

現代文訳

落穂集

原作 大道寺友山
享保十二年

第一卷 — 第五卷

一一一 竹千代、岡崎で出生、尾張熱田に幽閉（〇―七歳）

東照大権現家康公は松平廣忠公の息男として天文十一年（一五六八）十二月廿六日三河国岡崎城で誕生され幼名を竹千代君と云い、母君は同じ三河国刈屋城主である水野右衛門大夫忠政の息女である。この誕生の儀式には酒井雅樂頭正親が胞刀、石川安芸守清兼に墓目役をそれぞれ務めた。

同十二年右衛門大夫忠政が死去し子息下野守信元の代になると、それまでの駿河国今川義元の傘下を離れ、尾張国の織田弾正信秀と盟約を結んだ。その為親戚である廣忠公も尾張の織田家と盟約を結んではどうかと再三誘いがあつたが廣忠公は同意しなかった。そのため信元と関係が悪化し、爰に至つては親戚の縁を切ると云う事で㊦竹千代君が三歳の時、母君を刈屋へ返された。

信元は益々立腹し近隣の諸城主を説得して織田家へ協力させた上、尾張の軍勢を引入れて岡崎の城を攻める事を企てた。この為今川家と盟約のある城は三河の国内では岡崎一城だけになり、廣忠公はこの状況を駿府の義元に伝え加勢願いたい旨頼んだ。然し刈屋の水野といえ、最近迄廣忠公の親戚であり、又他の親戚にも尾張側の城主達も居るので、間違いない人質を今川家に出さなければと言う事で、当時六歳の竹千代君に金田某を付け駿府へ送った。

ところが駿府への途中塩見坂辺で田原の戸田五郎が待ち構えており、竹千代君を奪い取り尾張の織田信秀に引渡した。信秀は大変喜んで竹千代君を同国熱田の住人である加藤図書に預けて家人一同竹千代君を大切に扱うように申し渡した。

その後信秀は岡崎へ使者を送り、御息男の竹千代殿を思いもかけず当方に奪い、今は熱田の住人加藤図書と云う者へ預けてあるが元氣なので安心されたい。就いては水野下野守殿と相談して当家に味方されるなら竹千代殿は直ぐに貴殿へ送るが、もし同意無いなら竹千代殿を殺害し岡崎へ軍勢を送り戦う事になると云わせた。

㊦廣忠公が其使者に面会し直々に返答した内容は、今川家と当家との盟約は然るべき由緒があり、今更これを破る事は全く考えられない。その為竹千代についての事は了解したので、信秀の好きな様にされたい。一子の愛に溺れて武士の盟約を破る事はないと口上した。

再度この様な趣旨で使者を送れば、その使者を無事に帰す事はないと口上した。其使者は尾張へ帰り廣忠公の返答の一部始終を報告した所、信秀はたいへん感心して早速熱田へ飛脚を送り、竹千代君を益々大切に扱う様にと加藤図書を初め関係者に指示した。

又阿古屋の久松佐渡方へ再嫁した母君方が熱田に滞在する竹千代君と接触して安否も訊ねる事を許可したが面会は追って指示すると云う事だった。母君はこれを喜び以後平野久蔵及び竹内久六と云う者を代わる代わる熱田へ訪問させ、竹千代君の安否を尋ねると共に衣服や菓子等を送った。

其後天文十七年(一五四七)三月になると織田信秀が岡崎の城を責取る為軍勢を調べ、尾張を出発すると云う情報が駿府へも聞こえた。義元は廣忠公への加勢として雪斎和尚を首将として両朝比奈及び岡部五郎兵衛等を添えて千余の軍勢を三河に向けて送った。その部隊が既に藤川に達した事を聞き、織田信秀も安祥の城を出て矢作川の下流の瀬を渡り上和田の砦に陣取った。時に廣忠公も岡崎を出陣して(五〇)今川勢に合流した。

今川方岡部五郎兵衛は先発して上和田の砦に兵を進めたところ、織田三郎五郎信広は藤川へ押寄せ戦うべく兵を進めたので両軍は思いがけず小豆坂で鉢合わせし互いに慌て隊が乱れた。今川勢の中より朝比奈藤三郎進み出て一番に鎧を合せば、岡崎衆の中から酒井雅楽頭正親が進み、織田家の侍鳴海大学を討取る。尾張勢が敵わず退く処を今川・松平両家の者達は勝に

乗って追った。所が織田三郎五郎が引き返して、追って来る敵に立向うのを見て織田造酒丞・下方左近、岡田助右衛門・佐々隼人・同孫助・中野久兵衛等、信広と共に踏み止まって力戦した。是を世間では小豆坂の七本鎧と言ひ伝えた。

ここで尾張勢全体が引き返して勇敢に戦うので今川勢は利を失い敗色濃くなつて行く。その時廣忠公の軍勢が今川勢を援護して突き掛り、北村源之介・林藤五郎等始め数十人が討死を遂げた。今川勢既に総崩れと見えたが岡部五郎兵衛が計略により部隊を建て直し、横合に突掛て尾張勢を追崩した。今川方の小倉倉之介が尾張方の勇士鎧三位を組打にしたのも此時の事である。かくして信秀は安祥の城に信広を残し、尾張へ帰って行った。

其後又義元は安祥城を攻めるため雪斎和尚に朝比奈備中を副えて三河に軍勢を出した。

その時先ず岡崎の城へ立寄り廣忠公と内談し時、最初に岡の城を攻取り、それから安祥の城へ取掛るのが良いと云う廣忠公の意見に随い、先ず岡崎勢が岡の城を取巻いた。岡城の(五〇)城主松平藏人信孝は去年の菅生河原の戦いで討死しており家来達ばかりでは守る事も出来ず早々に城を明渡した。

廣忠公は人数を少々割いて留守番に置き、今川勢と共に安祥の城を攻めに押寄せる。これが尾張にも聞こえたので安祥の城の援兵として、信秀は平手某に五千余の軍勢を付けて信広の援護に出軍させ、平手も道中を急いで安祥の城下近く迄押寄せ陣を張った。その夜甚だしい雨に紛れて岡崎勢が平手の陣所へ押寄せ烈しく攻め込んだので尾張勢は防ぎ切れず敗退する。その混乱の中、安祥の城へも押寄せて二三の曲輪を占拠した。しかし城兵は終に尾張勢も奮闘し、岡崎方の本多平八郎・榊原藤兵衛等が討死を遂げた。しかし城兵は終に追詰められ、外郭を捨てて本丸へ取籠る。

斯して城将信広は切腹するか降伏して囚人となるか二つに一つとなつたが、尾張から応援に來た平手某は城外に居り和睦を申入れてきた。

信広を助命し尾張へ返して呉れば熱田に留めている竹千代君を岡崎の城へ返す条件である。廣忠公はこれを知り、その件は一応駿府へ報告し義元の指示次第とした。しかし雪斎和尚を始め他の武将達も、竹千代君の事は義元も日頃心配しているので、駿府へ報告する迄も無く早速約諾されよ、との意見であつた。その結果竹千代君は熱田より岡崎へ帰つたので安祥の城の囲みを解いて信広を尾張へ返した。その時の護送役は(五二)大久保一族の人々が當つた。

- 註1 東照大権現 徳川家康神号 1543 - 1616
 註2 松平廣忠 (1526 - 1549) 三河国岡崎市城主 松平宗家八代、主君は今川義元、家康父
 註3 岡崎城 現愛知県岡崎市康生町
 註4 刈谷城 現愛知県刈谷市城町
 註5 墓目役 貴人の誕生に際して鎬矢を打ち邪気を払う
 註6 戸田五郎 田原城主戸田康光 今川傘下から織田陣営へ寝返る。
 註7 織田信秀 (1510 - 1551) 尾張国守護代一族 信長父
 註8 熱田 加藤図書介順盛
 註9 大原雪斎 今川義元の参謀
 註10 安祥城 現愛知県安城市
 註11 織田三郎五郎信広 (? - 1574) 織田信長庶兄
 註12 上和田砦 岡崎市上和田。
 註13 小豆坂 岡崎市戸崎町 藤川 同藤川町
 註14 岡城 岡崎市岡町

一一二 竹千代、今川家に寄寓（八―十七歳）

竹千代君は天文十六年(1548)より同十八年に至る迄尾張熱田に幽閉されていたが、思いがけなく今度岡崎へ帰城する事になった。廣忠公もたいへん是を喜び、家中の上下臣達も皆目出度い事だと喜び一入だった。

しかし廣忠公にして見れば今川義元との約束もあり、此度敵方より竹千代君が帰参できたのも今川家の面々の武功によつての事である。そんな訳で竹千代君をそのまま自分の手元に置く訳に行かぬと考え駿府へ送る事に決めた。お供には酒井雅楽頭・天野三郎兵衛・平岩七之介・同吉十郎・渥美太郎兵衛・阿部善九郎・同新四郎等七人を添えた。その他に道中護衛として数人を付け、旅立の時は廣忠公も一行が城内を出る迄見送った。阿部善九郎は未だ幼少の者だが、道中の話し相手として竹千代君と同じ興でお供する様にと廣忠公が直々に指示した。

さて駿府へ到着すると義元はたいへん歓迎し、宮ヶ崎という所に新に屋敷の造作を指示した。又久島土佐と云う今川家譜代の侍を竹千代君の世話役に付け、不自由をない様にと指示した。

天文十八年(1549)三月六日岡崎城内で廣忠公が逝去したので、義元は岡崎の家中を駿府へ招き言渡した事は、竹千代君が成長し自身で統治ができるまで岡崎の支配は義元が預るので、家老の面々始め家中上下共に妻子を連れて駿府へ滞在すること。岡崎城の本丸と二の丸は今川家の侍大将が手勢を引き連れ代わる代わる警備する。鳥居伊賀守は郷村の用事を行う掛り役人を指揮し、三の丸に居住し廣忠公時代に定めた規定通り諸事を遂行し、年の諸勘定収支は伊賀守が毎春駿府へ出頭し直に義元に報告する様申渡した。

又今後の宮ヶ崎諸経費については岡崎で負担する様との事であり、岡崎の城には鳥居伊賀守と下級役人だけが残し、その他の侍一同は大身小身共に駿府へ引越して今川家の諸士と一緒に

軍役等を勤める事になった。このため以前からの岡崎譜代の侍達は困惑して、廣忠公の早世を悔み竹千代君の成長を待ち焦がれた。

やがて竹千代君が成長し、十三歳の時始て具足を付け、名前も松平次郎三郎元信公となった。弘治三年（1557）正月十五日、義元の取計で元服、名前を蔵人元康公と改め、義元の伯母婿の刑部太輔親永の息女との婚義も調ったので、岡崎譜代の侍上下一同は集まり喜んだ。

永禄元年（1558）の春三河国寺部の城主鈴木日向守が今川家に叛いて尾張の織田上総介信長の旗下となったので、元康公が手勢のみを率いて攻める様にと義元より云われた。元康公は当年十七歳の初陣であり是をたいへん喜んだ。

家中の人々もまちわびた主人成長後の初ての出陣であつたので、上下共に喜び勇んで寺部の城へ押寄せ外曲輪を焼払い、鈴木の人家人百余人を討取って帰陣した。義元も大いに喜び初陣の祝義として大刀一腰を与えた。

同年 元康公は義元と相談して広瀬・挙母・梅坪・伊保の各城へ攻撃を加えた。

同年 元康公は石ヶ瀬へ出陣し、水野下野守信元の兵と戦った。その時渡邊半蔵が軍功あり目通りして労った

永禄二年（1559）三月駿河で三郎信康公が誕生した。

この年、元康公は岡崎の城へ帰り成長後初めて領地を見て廻った。鳥居伊賀守が城内の

金蔵を開いて見せた時、鳥目（穴明銭）が縦に積んであるのを見て、駿府の商家では鳥目を横に積んでいたが、ここでは縦に積んであるのは何故かと尋ねられた。伊賀守は、少ない鳥目を積むのは縦でも横でも問題ありませんが、多くの鳥目を横に積んでは繋いである縄が早く腐ってしまうのでこの様に縦に積むのですと答えた。金銀が大切な事は勿論ですが、軍用には鳥目が一番ですから数年掛けてこの様に貯えて置いたのですと言上したので、元康公がたいへん感じ入ったと伝えられるのはこの時の事である。

同年元康公は再び寺部・梅坪・広瀬・挙母・伊保等の城々を攻撃し、各地の戦いで勝利し駿府へ帰ったので義元もたいへん満足していた。

註1 今川義元（1516 - 1560） 駿河国、遠江国守護大名、三河国、尾張一部迄拡大、桶狭間で戦死

註2 天文十八年（1549年） 松平廣忠 病死

註3 弘治3年（1557年） 家康元服

註4 永禄元（1558年） 家康初陣

註5 寺部、広瀬、挙母、梅坪、伊保 何れも織田方に属していた城
現在豊田市寺部、同広瀬、同金谷、？、同保見町付近。

註6 永禄二年（1559年） 家康嫡男 信康誕生

註7 鳥目（チョウモク） 銭の異称、穴が開いているので鳥の目に似ている事からいう。

一三 今川義元横死と松平元康の自立（十七―十八歳）

その頃義元は駿河、遠江、三河の三国を手中に収め、甲斐の武田信玄とも和平を保っていた。

更に相模国小田原の北條氏康も和睦し子息の助五郎と云う者を駿府へ人質として提供していた。又近国の諸城主は皆今川家に随って居り、義元は軍事力を誇りこの上は尾張の織田信長を倒して京都へ攻上ろうという気持ちで一杯だった。

その手始めに大高・星崎の両城を攻取り、大高の城は妹婿鵜殿長照に守らせた。今後尾張への進撃の為大高の城へ兵糧を十分に貯えようとの考えだったが、織田家側もこの計画を見抜き、大高近くの鷺津と丸根の両城に兵を置き、若し大高の城へ兵糧を入れる動きがあれば直ぐにほら貝を吹く事、その音を聞き次第寺部・梅坪の両城を初め、その外の城兵も直ぐに鷺津・丸根へ加勢する様に信長から命じられていた。

その為今川家は兵糧を入れる事が出来ず、大高城中の兵糧が乏しくなり、苦勞している事が駿府へ報告された。元康公に何か工夫して大高城中へ兵糧を入れる様にして欲しいと、義元から依頼があったので心得た旨返答した。家中の侍達は相談の結果、今度大高城へ兵糧を入れる件はたいへんな事である。何故なら織田家もこれに備え、大高近辺の数ヶ所の城に準備をさせ、合図を決めて兵糧入を防ぐ用意が出来ていると聞くので、手持の兵だけでは難しいのではないか、との意見だった。

しかし元康公は、今度の大高の兵糧入に就いては自分の一存に任せよ、色々意見を挟むなと厳しく言われた。そこで元康公の指図は部隊を二つに分け、先手の松平右馬助・酒井与四郎・石川与七郎は四千余の兵を率い、手前にある鷺津と丸根の両城を素通りし、

遙か奥にある寺部の城を攻める事とし、元康公は旗本勢八百余の兵に兵糧を荷駄千式百足に積込ませ、大高の城より廿町程の外に待機させた。先手の軍勢は命令通り寺部の城へ押寄せ烈しく攻めた。

城内では予想していない事であり上を下への騒動となり、しかも四月九日午前二時頃の事なので、敵味方の見さかひなく同士討ちを行い大混乱となる。味方の兵は一の木戸を押破って火を付けて早々引揚げ、次に梅か坪の城を攻め、二の丸、三の丸迄押入って火を付けた。

両城の火の手を見て鷺津と丸根両城に待機していた飯尾近江・同隠岐・佐久間大学など大に肝を潰し、取物も取あへず寺部・梅坪の両城へ加勢に行く。元康公は事前に両城に間諜を入れておいたので、早速この報告があると直ぐに自身命令して大高の城の各入口に荷駄を入れ、思う存分兵糧を入れさせた。鷺津と丸根の城中からこれが見えたが、壮健な兵は皆寺部と梅坪へ加勢に行った後で、残って居る者は老弱の兵ばかりで何も出来ない。

その内に先手の三部隊の軍勢が戻ってきたので、元康公は、夜中に働き骨を折った者達だから先に連帰る様にと言われた。(p12) しかし三人の頭達はそれを聞き、いやそれはなりません。先ず旗本の部隊を先に帰すのが良いでしょう、と云ったが、元康公は大に立腹して、今回の兵糧入れ作戦は他の意見は聞かないと出陣前に堅く念押ししたのを忘れたか、と云われた。これ以上はとやかく言わず三人の頭が部隊を帰した後で元康公も帰陣した。後にこれを大高の兵糧入と云い名作戦と伝えている。

さて義元はいよいよ尾張へ進出し織田信長と一戦を遂げる事に決め、永祿三年（1560）五月に元康公も駿河勢に先立って丸根の城へ軍勢を向け烈しく攻撃した。城将佐久間大学も必死に防戦したが、味方の諸軍はひるまず終に城を破り、城将大学介を討取った。五月十八日の晩方に義元よりの差図によって元康公は大高の城を守っていた鵜殿長照と交代して大高で義元の着陣を待っていた。

翌十九日未明より駿河勢は鷲津の城を取囲んで攻撃した。城将飯尾近江・織田玄蕃は防戦したが今川家は多勢によって終に城を責落した。これで義元の軍は大に勢いが付いて桶狭間に到着したところ、近辺の領民達は酒肴を捧けて勝ち戦を祝った。義元は機嫌よく将兵を招いて酒宴を開いていた。

その油断を伺っていた織田信長は三千余の手勢を率いて笠寺の東にある間道を通って善照寺辺から部隊を二手に分けて、旗を巻き長道具を横にして義元の陣所の後にある山手に待機していた。(p13)

その頃黒雲が辺りを蔽い、霧が深くて前後を見分る事も出来ず義元は敵の襲来に気付かなかった。その時信長は一斉に旗を揚げ、関の声を挙げながら義元の本陣を目掛けて突っ込んだ。

今川勢にとっては思いがけない事で大に慌てたが、義元は幔幕の内の座を退かず

近習の侍達に命じて戦はせていた。

その時信長の徒士服部小平太が進み出て鎗で義元を突いた。義元は大刀を抜いて小平太の膝を切った所に毛利新助が服部を助に来て終に義元を討てその首を得た。大將が既に討死した為駿河兵は総崩れとなる。信長軍は勢いの乗ってこれを追討、今川家の家士三浦左馬之助・斉藤掃部・広原左近太夫 等を初め二千五百余人を討取った。

その頃元康公は大高の城に待機していたが、水野下野守信元家臣の浅井六之助が主人の使として伝えた事は、今川義元は桶狭間にて信長の為に命を落した。その為今川家の所持する城は全て明渡す事になったが、貴殿は未だ大高城中に逗留されていると聞く。急いで岡崎の城へ帰るのが良い。本来なら知らせないのだが、親戚のよしみで伝えるとの事である。

元康公の家中の者達は、下野守殿の云われるように早々に退去するべきですと、口々に諫めた。しかし元康公はこれを聞き入れず、本来私と信元は伯父甥の關係ではあるが、今彼は織田家に随っているので敵である。これは彼が私を欺く為の謀である可能性もある。もし信元の謀であり真実でない場合、この城を明渡せば武門の恥辱で天下のもの笑いになるだろう。(p14) 使者の浅井を虜にして留めておき、確実な味方からの情報を確認してから岡崎へ退去すると云われた。

それ迄義元の為に本丸を空けて元康公は二の丸に居られたが、急遽本丸に座を

移動し、家中の人々にも夫々持ち場を決め籠城の覚悟と見えた。

その夜中岡崎の留守居役鳥居伊賀守より義元討死の次第を詳しく言上あった。今川方の岡崎城駐在役三浦上野や飯尾等も義元の横死により、皆駿府へ帰らざるを得ない状況である事も合せて報告があった。ここに至ってはと元康公も大高の城を出発し、浅井六之助を案内者として同行させ岡崎へ向った。

途中所々一揆勢に遭遇したが先頭部隊が追払ながら撤退した。池鯉鮒（知立）の駅迄来た所、刈屋の城より水野信元の家来が一揆勢に交り帰路を妨げるので浅井が馬を乗掛けて、水野下野守使者浅井六之助と大声で一喝したので一揆勢は手出しせず、その夜無事大樹寺まで到着した。

翌廿三日岡崎へ帰城したので今川家より駐在していた者達は駿府へ帰るため暇の挨拶にきた。

元康公は三浦や飯尾等頭分の人々を召し出し、氏真の方への伝言として、義元の横死の事は驚いている。信長が大勝利で油断している中に、奇襲を掛ければ味方の勝利は間違いないと考える。一刻も早く弔合戦を遂行されるのが良い。その情報を戴き次第私も出陣して一戦の上、信長を討果し義元追善に備へるので氏真を始め家老の面々へ十分伝えて欲しいと言い含められた（p15）

しかし氏真は義元討死の後途方に暮れて弔合戦どころでは無かったが、元康公は

早速出陣を布告して岡崎を出発し、信長に属する挙母・梅坪の両城を攻撃した。外曲輪を攻めて火を付けて撤収した後、駿府へ使者を送り義元の弔合戦の事を催促した。しかし氏真を始め家老の面々も全くその気は無く、ひたすらに義元の追善を営むだけである、と言う報告に元康公はたいへん不満だった。

以後は氏真へには構わず、単独で岡崎を出陣して広瀬の城主三宅右衛門尉を攻めた。しかし先手の勢が勝利出来ないのも、旗本勢を進めて戦ったところ、敵兵は忽ち敗走した。

夫より直に沓掛の城へ攻撃を掛け、城下の民家を全て焼き軍勢を引揚げようとした時、信長の命で当城を守っていた織田玄蕃丞が城より討って出て元康公を追ったが、大久保新八郎がしんがりをしつかりと勤め、引揚げは完了した。

その後又岡崎を出陣して水野信元が所有する刈屋の城外十八町と云う所で、刈屋勢と戦ったが敵味方共に日頃知り合った関係なので、互いに負けられず力戦して、双方引き分けとして元康公は岡崎へ帰城した。

今川家は義元死去の以後は途方に暮れているのに、元康公だけは義元存命時の盟約の方針を少しも変えずに単独で信長側の城を次々攻め、今川方の旗色を鮮明にする（p16）非常に奇特な大将であると、織田家側でも感心していた。

註1 大高、星崎城 名古屋市南区本星崎・同市緑区大高町

註2 鵜殿長持 長照の誤りか 長照は長持の子

註3 鷺津、丸根砦 名古屋市大高町鷺津・同町丸根
註4 沓掛城 豊明市沓掛

一―四 元康 織田信長と和睦（十八―廿一歳）

同年又岡崎から出陣し、水野信元と石ヶ瀬で戦った時、家中の鳥居四郎左衛門・大原右近右衛門・矢田作十郎・高木九助・寛平三郎等特に軍功があった。その後直ぐに又出陣し、寺部と拳母の両城を攻めた。

その後又三河山の中にある賢王山の砦を攻めた時、久松佐渡守俊勝が初めて味方に加わり、先頭に進んで城へ乗込もうとした時、城兵が鎗で俊勝の具足綿嚙を突いた。久松はその鎗の柄を切り折り終に城へ乗込み火を付けて城内屋敷を焼いたので城は終に落ちた。次ぎに長沢の鳥屋の城を取囲み、城外の民家を焼いて引揚げた。

永禄四年（1561）二月七日石ヶ瀬へ出陣し、水野信元の兵と戦った。家中では石川伯耆守数正・高木善四郎・本多肥後・上村庄右衛門・松井左近等が特に手柄を立てた。同年又出陣し広瀬・伊保等の城を攻めた。松平大炊助好景へ命じて中島の城を攻めさせた時、城主板倉弾正は防戦できず、城を撤退して岡の城に籠ったが、元康公自身が岡の城を攻めたので板倉は又城を捨て東三河へ逃れ去った。

この年織田信長も元康公の武略に感心して、水野下野守信元を仲介として和睦を申し込んできた。（p17） それ以前に度々義元の弔合戦を氏真へ催促したが同意なく、その上義元時代から勤めていた古い家老達の意見を聞かず、三浦右衛門と言う若輩の愚か者を諸事の相談相手にしているの、今川家の伝統は全て失われ取るに足らぬ規則ばかりを作っている。其上氏真の不行跡は目に余るものである。これらは駿府に逗留する三郎信康殿に付けた侍達からも逐次報告があり、元康公も今川家滅亡の時節が到来するのにも止むを得ないと考えていた。

こんな時に信長より和睦の提案があったので気持ち動き、先ず元親戚である水野信元と和睦し、その後信長との和睦が成立した。今川氏真はこれを聞いて大に立腹し岡崎へ使者を送り、貴殿は旧来の盟約を破り織田家と和睦する以上、駿府に居る内室と子息は殺害し、近日中に大軍を起して岡崎を攻める事になると云う。岡崎の家老達が相談した案に基き、元康公は氏真の使者と面会し直接返答した事は、私の親廣忠の時代より義元の厚恩によって当城が安堵されている。これは偏に今川家のお蔭であり、今も少しもこの事を忘れていない。しかしながら尾張は隣国であり、今このこと和平を保たなければ領国を維持する事は難しいので謀としての和睦である。決して真の和睦ではない事を丁寧な氏真へ伝える様にといい含めた。使者は帰って詳しく報告したので以後氏真の疑いは止んだ。

同年八月今川家の侍糟谷善兵衛と小原藤五郎と(p18)云う者が、三河国長沢の城に立て籠もり近郷を侵掠している事を元康公は聞いて、石川日向守家成と松平勘四郎信一の兩人に命じて長沢の城を攻めさせた。しかし糟谷と小原は堅く防ぎ城が落ちない旨の報告があり、元康公は岡崎を出陣し長沢の城へ向い攻撃した。城将小原藤五郎自身が城から討って出たので防戦し、渡辺半蔵が藤五郎を鎗で突き則首を取った。この為糟谷も終に防ぐ事が出来ず退去したので、味方は勝利を得て岡崎へ帰陣した。

永禄五年(1563)今川氏真は鵜殿長照に命じ三河国西の郡城を守らせた。元康公は久松佐渡と松井左近忠次の兩人へ命じ西の郡城を攻めさせた。左近が城中の隙を突いて久松と打ち合わせ素早く城中へ攻め込んだので鵜殿は防ぐ事が出来ず和睦して城を明渡し駿河へ帰る事を願うので忠次はこれを許可した。

鵜殿達が城を出て帰路に付いた時、忠次は伏兵を置いて鵜殿の二人の子供を生捕り、岡崎へ護送し元康公に差上げて喜ばれた。

今川氏真はこれ聞いて元康公が織田家の味方になった事を怒り、御台所と息男を殺害して大軍を揃え岡崎へ進撃し、手切れの戦いを遂行しようとした。

この為石川伯耆守数正急いで駿府へ行き、御台所の親父関口刑部大輔と相談し、この度御台所と息男を間違はなく岡崎へ返して頂ければ、鵜殿の二子と交換すると伝えた。鵜殿の二子と云うのも今川家の親族であり、その上氏真は鵜殿長照を

最肩している事もあり早速同意があった。交換が成立し鵜殿の二子は駿府へ帰り、御台所と三郎君は(p19)岡崎へ帰った。

その後も元康公が織田家に味方したので、氏真は大に怒り関口刑部大輔を殺害した。九月十一日の夜に入って氏真は軍を発し三河国西の郡の弾正左衛門正勝の城を攻撃した。正勝は是を防ぎ嫡子元正は戦死したが、次男孫九郎が父に力を合せて防戦して何とか城を持ち応える事を岡崎に注進した。

元康公が援軍を送ったので正勝は是に力を得て益々力戦して終に今川勢を追払った。これが今川家と当家(徳川家)との手切れの一戦である。

同月廿九日元康公は軍勢を率いて二連木・牛窪・佐脇・八幡の敵と赤坂で戦ったが、先手の酒井忠次が大に苦戦して従士十八人が討死をした。これに依って敵兵は勝に乗じて攻めてきたが渡辺半蔵が十度程敵と渡り合い、その中二度は馬から下りて鎗で戦った。この時以来俗に鎗半蔵と言われる様になった。

時に元康公自身も敵に向った為、旗本の面々は特に力戦して敵を破った。近藤伝次郎は敵方の首将松倉弾正を討ってその首を得た。

永禄六年(1563)正月十五日元康公は岡崎の城を出発し山中に陣取、同廿一日牛窪の城を攻めた。この時本多平八郎は十六歳で牧野方の武勇の侍牧野宗次郎と鎗を合わせた。牧野の家来稲垣平右衛門は牧野を説得し酒井左衛門・石川日向守を頼り投降した。

これにより牧野右馬之丞は酒井左衛門尉の婿になり譜代衆に負けじと奉公した。
この戦迄元康公は馬印に厭離穢土の小旗を持たせていたが、牧野の金の扇が（p20）
見事だと云う事で所望し、以後の馬印となったと伝えられている。

この年織田信長の息女と三郎信康君の婚約が決まった。又この年元康公は岡崎を出発し
吉田の城兵と小坂井で戦った。渡辺半蔵や蜂屋半之丞等が敵と鎗を合せて力戦した。
味方の兵が戦い労れたと見て敵兵が競って進軍して来た時に、松平久内が鉄砲でこれを
防いだ。更に平岩七之助親吉が兵を率いて来て戦ったので敵兵は吉田の城へ退いた。

註1 三河山中 岡崎市山中

註2 長沢 豊川市長沢 鳥屋の城 登屋ヶ根城

註3 永禄四年 1561年

註4 上之郡城 蒲郡市神の郷町

註5 牛窪城 牧野氏居城、豊川市

一―五 家康、三河一向一揆の鎮圧、三河の統一（二一―二五歳）

同年九月 元康公は菅沼藤十郎に命じて三河国佐々木の辺に砦を構へさせた時、人夫の
兵糧が不足したので同郡の上宮寺領の米を押収して菅沼の館へ運び込み、工事人夫の
飯料にした。これを上宮寺の僧徒等が大に怒り国中の宗徒代表を招集して評議した。

開山上人以来、当国三ヶ寺に関しては特別扱いで守護の権限が及ばない地と決まってい
るのに、此度の菅沼の行為は非道此上なく、又宗門を侮辱するものである。決して
成すがままにはさせないと衆議一決し、野寺と針崎の両寺を始め諸寺の屈強な僧達が集結し、
甲冑や兵杖で武装して突然菅沼の館に押入った。菅沼の家来達も少しは防禦したが、
僧達は大勢乱入して終に例の兵糧を奪い返して上宮寺へ運び込んだ。

菅沼は大に怒ってこの事を酒井雅楽頭正親へ報告し、正親は事の次第を元康公に報告した。
元康公は大変立腹し、雅楽頭に命じて上宮寺の暴動僧徒の指導者を斬罪にした。（p21）
その結果三河国中の一向宗の僧徒及びその支援者が憤激して戦を企て、今川氏真へ
同調する土豪達を卷込み一揆を起そうとした。

当家譜代の侍中も宗門信仰の者達は一揆方に組し敵対する一族もあった。中でも吉良義照
が敵対する事になり、元康公妹婿の荒川甲斐守も義照に同調した。その他櫻井の松平監物や
上野の酒井将監、大草の松平七郎等なども一揆方に組した。その他譜代の侍達で宗門側と
なった者は野寺と佐々木の寺内に立籠り、敵対者は凡そ三百人余に上った。

その頃鵜殿藤太郎が今川氏真に味方して三河の上の郷城に籠っていた。同国竹谷の城主
松平備後守清善は藤太郎とは同母兄弟だったが常日頃元康公に味方をしていたので、
早速竹谷より兵を發して上の郷の城を攻めた。初日は清善が勝利を得て城兵七十余人を
討取ったが、次の日は負け戦となり多数の兵が討たれた。この事が岡崎に聞へたので

元康公は早速軍勢を出して名取山に陣取った。甲賀流の忍者兵を使い、上の郷の城を襲わせた処、城将の鵜殿藤太郎・同鹿助を始め城兵も皆討死し、城も終に落ちたので岡崎へ帰陣した。

この年の秋、元康公は名前を改め家康公と云った。

同年十月廿五日、針崎の反徒が上和田の城を攻めるといふ知らせが岡崎へ有ったので直ぐに軍勢を出し、上和田へ向った。その時上村庄右衛門は一揆方の勇兵蜂屋半之丞と鎗を合せて戦った。蜂屋が少し退いたので水野藤十郎忠重が言葉掛けて（二）蜂屋を追ったので蜂屋は戻って忠重と戦った。その時家康公が忠重を援護する為、自身蜂屋に向ったので蜂屋は恐れ入って逃げた。松平金助が追討ちをかけた処、蜂屋又戻って来て、家康公は主君であるから刃向いしないが、お前達は別だと鎗で金助と渡り合い、終に金助を突倒して蜂屋が乗掛て首を取ろうとするのを家康公が見て、又蜂屋に向かへば、蜂屋は金助を捨てて逃げ去った。その後一揆も退散したので帰陣した。

同年又岡崎を出馬、大久保一党に針崎の一揆の鎮圧を命じ、自身は小豆坂に登ったところ一揆の兵が岡や大平から引揚げてきた。そこで味方の先頭勢と坂の途中で戦いとなり、一揆方の佐橋甚五郎を始め、数人を討取り勝利して岡崎へ帰城した。

永祿七年（1564）正月、一揆勢と小豆坂で戦った時、一揆方の鉄砲が家康公の馬の手綱に

中った。支障なかったが立腹して敵軍の中へ馬を乗入れたので一揆勢は敗走した。同月十一日 針崎と野寺の一揆方は上和田の砦及び岡の城へ押掛けたので大久保一党がこれに対処した。城代の大久保五郎左衛門、同七郎右衛門共に軽傷を負い籠城が難しい旨報告があり家康公は即刻出馬した。その時一揆方の鉄砲が鎧に中ったが支障なかった。

この戦いで中根喜蔵が一揆方の渡辺半蔵と鎗を合せたが互いに鎗を捨て太刀で戦ったが勝負がつかない。そこで鵜殿十郎三郎が渡辺半蔵（p23）を討とうと攻め寄ったが、半蔵の父渡辺源五左衛門が半蔵を助けに来て終に鵜殿を討取った。そこへ川澄大輔が源五左衛門に討て掛るが、源五左衛門は川澄に取合わず家康公を目掛けて突き掛ったが、甥の内藤甚四郎が弓で源五左衛門の両股を射貫いた。彼は即座に倒れ、疵が重く終に死んだ。主君の為に伯父を射た事を家康公は感激し、人皆これを賞賛した。

一揆方の侍の夏目治郎左衛門は武功も有り親族も多く、自身の知行所内の屋敷に城の様な要害を構へて住んでいた。近接の松平主殿助は様子を見ていたが、ある時主殿助は手勢を率いて突然押掛け木戸を打破り烈しく押入ったので夏目は大に慌て防禦も間に合わず、妻子を連れて土蔵の中へ籠った。

主殿は多人数で嚴重に屋敷を取囲み、その旨を岡崎へ報告して命令次第夏目を成敗しようと構えていた。ところが家康公はこれを聞いて主殿助の忠節は感心だが、夏目は既に土蔵の中へ逃込んで居り、これを殺害しては籠中の鳥を殺す様な事なので、その俣にして命を助けよ、との事だった。主殿はこれを聞き、始め打殺して差上げようとしたのに何と慈悲に過ぎた

扱いと思つたが、既に赦免とある以上は是非もなく引揚げた。

夏目は蔵の中から出て岡崎の方を伏拝んで、さて／＼こんな慈悲深い主人を疎かにして敵対した事が悔いられると涙を流した。その日以来宗門の勤として持仏堂で本尊に向つて（25） なにとぞ主人の為に死ねる様に御守り下さい、と声高らかに祈った。

その後念願通りに遠江国の三方が原で武田軍との戦の時、家康公の身代わりとして働き討死を遂げた。

さて又一揆の鎮静化に尽くした人は誰彼とあるが、最初は蜂屋半之丞である。半之丞が大久保治左衛門及び同新八郎兩人に出合つて云うには、私を始他の人々も殿様に対しては何の恨みも持っていない。元は菅沼の理不尽な処置と、その上家老の酒井殿の片手落な処理より起こった事である。譜代の家臣達が主人へ対し謀反人と言われる事は今更後悔している。

できる事なら土呂・針崎・野寺の三ヶ寺共従来通り認めて戴き、この度敵対した人々も何事も無く全員赦免して戴く様にと云う。大久保兩人が返答したのは、ご意見は尤であるが、その様に色々願ひ事が有つては中々ご理解が得られるとは思わないが先ずはその旨お伺いして見ると、兩人は岡崎の城へ上った。

蜂屋の言い分を聞いて家康公は大方は同意したが、三ヶ寺をその俣にする事は認めず、三ヶ寺共に破却して更地にし、敵対者の中でも罪の軽重に応じて夫々に処置すると言う。

大久保兩人もそれ以上何も言えずにいたが、兩人と共に御前に控えていた大久保淨玄がこれを聞いて、ご意見は尤ですが、（26） その様に言われては問題が解決しません。檀家達の願ひ通り三ヶ寺を先ず認め、此度敵対した者も罪の軽重によらず一同に恩赦を行い、一致団結して少しでも早く敵地へ進出して領地を拡大するのが良いと思います。領地が大きくなれば如何様にも政治ができます。私事です但し今回の騒動で多くの親族が謀叛人共の為に犠牲となり、その恨みは決して少なく在りませんが、殿様の為には替え難い事ですと、言上するのを家康公は聞いて、その様な老人の考えを拒否する訳にも行かないので、良き様に取り計らえとの事となった。

その趣旨が言渡され、敵対していた侍達も皆、忝い事と云つて喜びあつた。

しかし吉良殿や荒川殿も居城を出て降参したが赦免は無かつた。吉良殿は上方へ行き近江国の佐々木義頼を頼つたが芥川で討死した。

荒川殿は妹婿にも拘らず二度も謀叛を起したので許されず、その後河内の国で病死した。上野の城主酒井将監は家老の身で有りながら一揆方で敵対したので特に憎まれ、侘び言も通用せず今川氏真を頼つて駿府へ去つた。親族の中では松平監物殿だけが許された。

その後この度敵対した侍の中で主な者百人余りを岡崎の城へ呼び一同に面会した。その時（26） 直接皆に言い聞かせた事は、今度其方共は三ヶ寺に荷担して敵対したのは

不届である。しかしよく考えれば人は貴賤に拘らず、この世は仮の宿で来世は永遠という事である。それならば私を仮の主人と思ひ、弥陀如来こそが永い世の主人と考える事が

宗門にとり大切と思うのは一理はあると考える。赦免する以上は毛頭心に留めないで、皆も敵対した事を忘れて以前の心に立帰り、少も隔てなく勤めを励むのが最善と思う。此趣旨を其方共の部下達にも聞かせて、誰もが安心する様と言われたので、謹んで是を承った人々は老若共に歓喜して御前を立った。

右の事はその時代の事を述べた書物にも見当たらないが、永井日向守殿が若い頃古老から聞いた話として、浅野因幡守殿へ語ったと言う事である。実話と思うので爰に書き載せたものである。

同年五月岡崎を出馬し、野田・牛窪の両城を攻撃した。それから直ぐ吉田の城を攻めた処、城将の小原肥前が城外へ討って出て防ぐので、無理せず兵を引揚げて帰陣した。

同年吉田の城を守る小原肥前を援護する為、今川氏真が万余騎を率いて三河に進軍し、五千余の軍勢で本多百助が守る一宮の砦を取囲んだ。氏真は五ご千程の軍勢で佐脇八幡に陣取る。百助はその状況を岡崎へ報告したので、家康公は三千程の軍勢で一宮へ出陣した。今川方でも必ず岡崎から出陣が有ると予想して武田信虎へ二千程の兵を付け岡崎勢へ備えた。しかし岡崎方が隙なく進軍して来るので信虎はこれを喰留る事が出来ず、岡崎勢は信虎の近くを押通り一宮の砦近くに押寄せた。これは敵わぬと見て駿河勢は囲みを解いて牛窪の方へ引退る処へ城将の百助が城中より討って出て今川勢を追討したので家康公は難なく一宮の城へ入る事が出来た。

この夜今川家の作戦会議で、家康公の手勢と城兵を合せても五千を超える事は無い。味方の全軍で明日早朝より城を取巻き、岡崎勢は一騎一人と言えども生きて帰すべきでない、専らその準備をした。そんな中家康公は湯漬など食べ、一宮の城を出て夜中に退去したので、今川家の評議は無意味となった。この事を世間では一宮の後詰と云って家康公の大きな誉となった。

同年六月小原肥前が吉田の城を当家へ明渡したので三河国全体が家康公の領知となった由。

永祿九年（1566）十二月廿九日家康公は従五位下に昇進し、名前も三河守となった。

同十年（1567）五月三郎君へ信長の息女の輿入れがあった。

註1 三ヶ寺 土呂本宗寺、針崎勝曼寺、野寺
註2 吉田城 城主小原鎮実（今川方） 愛知県豊橋市

一六 家康遠江へ進出（廿五―廿六歳）

同十一年（1568）三月堀川と宇津山の城を落した。（p28）
同四月二股の久野城を落した。

同年十二月井の谷城を攻落とし、本坂に進み刑部の城を落した。

同十二年（1569）正月北條氏康と氏政の父子が四万五千余の軍を率い、今川氏真を援護するため駿河へ出陣した。大軍であるので薩埵山から八幡平迄陣を構えた。

武田信玄は山縣三郎兵衛に駿府の城を守らせ、自身は一万八千余の軍勢で興津河原に布陣して北條父子と対戦する。

時に家康公は掛川へ出陣して天王山に陣を敷いた。今川氏真は掛川城内より久野一家の者達へ使いを送り、自分は家康と戦うので、其方一家の者は打ち合せて良い折りに岡崎勢の後ろを攻めよと伝えた。久野一家の者達はその命令に随ったが、久野三郎左衛門宗能と同八左衛門両人は相談して氏真の密謀を家康公に知らせた。

家康公は宗能に加勢したので宗能は是に力を得て同姓淡路守を殺害し、采女正を追払った。氏真側では未だこの事を知らずに家康公の陣へ押寄せた。前述宗能の情報に基き岡崎方は既に予定していたので大須賀・大久保・本多・水野・松平康重・同家忠の面々が兵を伏せて待、一斉に起つて突進んだので氏真の軍勢は忽ちにして敗れた。其夜中より直に掛川の城を攻撃し多くの城兵を討取った後、家康公は見付の城へ帰陣した。

同年三月家康公は出陣し掛川の城を攻撃した。城兵朝比奈備中、三浦監物は抵抗したが勝利はできない。此時（226）氏真の家臣小倉内蔵介を呼び、これから氏真と和睦して北條氏康と協力して信玄が占領している駿府の城を取返して、氏真に再び駿河の守護に

なってもらうべきであると家康公は云った。

小倉は大に喜び、その趣旨を氏真へ伝えたところ、氏真も納得したので、小倉が陣中へ参上して誓約を成し終に和睦が成立した。氏真は掛川の城を家康公へ渡し相模国の小田原へ移転するので、石川日向守に掛川の城を守らせた。

その頃北条氏康は薩埵山に布陣して武田信玄と戦っていた。そこで家康公が出陣して山縣三郎兵衛が守る駿府の城を攻撃したので、山縣も城を守る事が出来ず撤退した。

信玄も北條と徳川の軍勢を前後に受けての勝利は難しいと判断して、早々甲府へ引揚げた。これで氏真は再び駿府の城へ帰り、これは偏に家康公のお蔭と大に喜んだ。

しかし城内の家屋が兵火で焼失して居住は出来ないので、氏真は伊豆の戸倉城へ移り駿府の修復を命じた。

同年六月家康公は出陣して遠江国天方の城を攻め、城主山内山城守が降参したので、それより直ぐに飯田の城を攻めて、城主山内大和守を始め城兵残らず攻め殺しにして帰陣した。

註¹ 堀川城 浜松市北区細江町

註² 宇津山城 静岡県湖西市宇津山

註³ 久野城 袋井

註⁴ 興津 清水・由井の間

註⁵ 伊豆の戸倉城 静岡県駿東郡清水町

- 註6 天方城 城主山内通興 静岡県周智郡森町
註7 飯田城 城主山内通泰 静岡県周智郡森町
註8 見付端城 静岡県磐田市見付字古城
註9 駿府城 現静岡市葵区、今村家居城
註10 北條氏康 (1515 - 1571) 後北条家二代目当主、相模の戦国大名

落穂集第一巻終

落穂集第二巻

二一 金ヶ崎の撤退と姉川の戦い (廿七歳)

元龜元年 (1570年) 正月、浜松城の工事が完成したので家康公は此方に引越し、岡崎の城は信康公へ譲られた。

同年春、織田信長は越前の守護朝倉義景を攻める為家康公へ加勢の依頼があり、同意して三月に浜松城より出陣された。 信長と共に越前の手筒山の城を攻め落とし、次に同国金ヶ崎の城を攻撃中に、近江小谷の城主浅井備前守が寝返ったとの知らせがあった。 信長はたいへん驚き金ヶ崎城の囲みを解きへ引揚げる時、一陣は信長、二陣は家康公、殿(しんがり)は木下藤吉郎秀吉が受持った。

漸く若狭の国へ入る頃、朝倉軍が多勢で追迫り、(p31) 秀吉の部隊と戦いとなった。秀吉が無勢で苦戦しているので家康公が部隊を戻して秀吉の部隊に加り戦った。その時家康公自身が鉄砲を取り朝倉軍を防いだので、家中の面々は励まされ力を尽して戦った。 そのため朝倉勢もそれ以上追う事も出きず、信長は朽木谷を過ぎて無事京都へ帰陣した。 是を金ヶ崎の撤退戦としその頃有名となり、徳川家の名を挙げた。

この金ヶ崎から信長が撤退した時の逸話が一つある。

ある時家康公が信長へ面会した際、末座へ一人座って居る男は一体何者かと思っておられたところ、信長が云うには、家康公は未だ御存知ないだろうが、あの仁は松永弾正久秀と云い普通の人が出来ない事を三度もした仁である。

一つは主家の三好に謀叛を勧めて十四代將軍の光源院（足利義輝）を攻め殺させ、二つは三好家に反旗を翻して滅亡させ、三つ目は奈良の大仏殿を焼いてしまった仁である、と。

松永は赤面して困惑した様子なので家康公は気の毒に思い、席を立てて松永の側近くに行き、貴殿の事は兼ねて聞いておりましたが私は遠国に居るので御目にかかれなかったが以後宜しくと挨拶をされた。

旅館に帰り迎えに出た家老達にこの咄をされたが信長に関しての話は特になく、松永が非常に困っている（p32）様子を見て、以前に苦労した時の物語をされた。

信長が金ヶ崎から撤退した時の事であるが、浅井の策略により所々で一揆が起きていたと言う情報があり信長も苦慮して朽木谷方面へ撤退しようとしたが、朽木と云っても佐々木の一族であり、浅井とは同じ仲間とも考えられた。

そこで松永弾正が信長に申出た事は、私が朽木の館へ行き交渉して味方に付く様説得します。朽木が同意すれば人質を出させ、その者を連れて迎えに参りますから

暫く此処でお待ち下さい。若し私が戻らない時は、朽木と刺し違え松永は死んだとお考えになり、どちらへでも向かつて下さいと言いつつ朽木の館へ走り去った。やがて松永が人質を連れて戻って来たので、信長も疑いを晴らして朽木谷に入った。

もしこれが本当なら、とその後の事は何も言われなかった。

この咄は古い書物にも見えないが、土井大炊頭殿の咄として大野知石が私（友山）にしたものである

同年六月織田信長は軍勢を調べて浅井備前守が籠る小谷・横山の両城を攻撃したが、浅井は朝倉に加勢を頼み、朝倉は小谷城の援兵として朝倉孫三郎に一万の軍勢を付けて加勢した。その時信長も家康公に加勢を頼んできたので家康公は五千余の軍勢を率いて浜松城を出発、六月廿六日に信長の陣に参じた。

翌廿七日信長陣所で（p33）の作戦会議では柴田と明智の両部隊が第一陣となり、家康公の部隊は第二陣として控えるというものだった。それに対して家康公は、私が柴田や明智の後陣では加勢として出陣した甲斐がない。浅井・朝倉の両敵の中で何れかを私が引受て切崩して見せましようと言え、信長も、それは良い事です、浅井軍は主敵ですから私自身の部隊で切崩しますから、貴公は朝倉を押さえて下さい。しかし貴公は少数、朝倉は大軍の様なので私の配下の中で人数を持つものを三四人付けますから誰でも希望して下さいとの事だった。

家康公は私の部隊だけでも大丈夫ですが、どうしても加勢をと云う事であれば稲葉一鉄を
と希望して稲葉が加わる事になった。一鉄が家康公陣営へ参上して云うには、明日の
一戦で私は何の用にも役立たないと思いますが、先手の中に加えて下さいとの事である。
家康公はそれに対し、貴殿も御存知の通り朝倉は大軍、私の方は少数ですから勝利は
分りません。そこで貴殿は第二陣に控え、我々の一陣が危なくなってきたら横から
朝倉勢に突掛けて切崩すのが良いとの事で一鉄は後陣となった。

さて翌朝になり朝倉は味方が小勢だと見たので姉川を渡って攻めてきたが、そこへ先手の
本多・大久保・堀・榊原・松平信忠・小笠原などが一斉に掛けて朝倉勢を切崩して味方の
勝利と成った。一方信長の先手坂井・池田の両部隊が浅井の先手である礪野丹波に負け
(敗走) 敗走し出したので、浅井勢は勝に乗じてこれを追い信長の旗本部隊も浮き足立った。
危なくなってきたので家康公は一鉄の部隊に使いを出し、私の方は敵を切崩したが味方
(信長) の戦況が危ないので私も応援に行くが、ここは貴殿が先手となる場面ですと伝えた。
家康公の旗本部隊は東の方に向かい、先手を勤めた面々には今朝からよく働いたので、
その場を守り休息するようにと命じた。
さて一鉄の勢と旗本の部隊で横合から攻めたので浅利方も敵わず引き下がることを、
信長の旗本部隊が切崩して多くの敵を討取り勝利した。

信長は大へん喜び、帰陣した時家康公へ種々の名器を進上し、書状の文言には、

今度の大功は表現できない程であり、過去にも例がなく今後誰も達成できないだろう、
実に徳川家の根本であり武門の頂点であると記した。
この姉川の戦いは場所が場所だけに日本国中に知れ渡り、天下の武士の語り草となり
家康公の武勇を褒め称えた。

同年八月廿八日に三郎君が元服して岡崎次郎三郎信康と称した。浜松の城中での
お祝いに観世宗雪による能舞台が催された

元龜11 (1571) 年正月五日、家康公従五位上に叙せられ同十一日侍従に任官した。

註1 浅井備前守 (長政 1545 - 1573) 北近江の戦国大名、信長の妹婿、

秀吉側室淀君及び徳川秀忠正室於江の父

註2 小谷城、滋賀県長浜市、

註3 朝倉義景 (1533 - 1573) 越前の戦国大名、

註4 金ヶ崎城 (敦賀城) 福井県敦賀市金ヶ崎町、手筒山城は支城

註5 松永弾正久秀 (1510 - 1577) 武将、初め三好長慶に仕え、後信長に仕え茶人として
有名

註6 朽木元綱 (1549 - 1632) 武将、朽木谷城 (滋賀県高島市朽木野尻) 城主

註7 姉川の戦い、滋賀県長浜市野村町付近で行われた。

註8 朝倉孫三郎 (景健 1536 - 1575) 朝倉家臣、安居城主

註 9 礪野員昌 (1523 - 1590) 浅井家臣、近江佐和山城主

註 10 稻葉一鉄 (1515 - 1589) 始め土岐氏、斉藤道三に仕える、美濃曾根城主。子孫は江戸期大名となる

二二 武田家と衝突、三方ヶ原の敗戦 (廿九歳)

元龜三年 (1572) 正月十三日、家康公は出馬して金谷大井川を偵察し、(p35) 酒井・小笠原の部隊が井呂が瀬を渡り島田河原に布陣した。武田信玄は是を聞き約束違反であると激怒して、近日中に和睦切れの戦いをすべしと準備を進めた。

同年十二月廿二日、信玄は三万五千の軍勢を率いて遠州三方ヶ原へ出陣した。その前の夜浜松城での作戦会議の時に、信長の命令で尾張より応援に来ていた三人が言うには、武田方は三万以上の大軍であり、一方味方は小勢なので平地での戦いは無理と考える。先ず籠城すれば武田軍が押寄せて包囲する筈である。その内に尾張より援軍が到着し敵の後ろから攻めるので、その様子を見て城内から一斉に突いて出て敵を切崩すという方法以外は難しいと言う。

家康公はそれを聞いて、皆が云う事も一理があるが信玄の軍勢がどれ程であっても、敵を城下迄楽々踏込ませた上、防戦もせずに籠城するのは城主としては不本意である。私は城外へ繰出して戦うので、城内の侍や足輕を一人でも多く連れて出る。幸に

尾張より来られた皆さんに城の事は頼みますと言へば、応援の三人も我々も出撃に加わりましようと言う事になり尾張勢を合わせて漸く八千余になり大野と言う所に布陣した。

信玄方は始め一戦する積りだったが、尾張からの応援もあり更に追加の尾張の (p36) 軍勢も到着すると云う事を聞き、一戦の計画を止めて後陣は既に山際迄引退った。そこで郡内の小山田左兵衛配下の上原能登と言う者がきよいヶ谷から勝負をする事を進言し、その理由が妥当であるため、信玄も同意してその褒美としての気持ちから小山田にその日の先陣を命じた。

この頃鳥居四郎左衛門は偵察の為に旗本から先手の部隊に来ていたが、武田方の部隊配置を見て旗本へ戻って家康公の前へ参上して、今日の一戦は止めた方が良くと思います、武田方は大軍である上幾重にも備えをして、その配置も万全ですと報告した。家康公は立腹して今日の一戦を止めるとはお前はいつもと違い臆したかと云われたので、四郎左衛門は、私が剛毅か臆病かはどうでも良い事で勝負の善悪をお考えの上戦を進めて下さい。どうしても一戦と云う事であれば、敵が堀田の郷へ進んだ時分に始められのが良いでしょうと申上げた。渡辺半蔵も偵察から戻り今日の合戦は疑問がある旨申上げたが全く同意なく、戦いを始める様にと先手の面々へ命令され夕方方になってから合戦が始った。

武田方の小山田が味方の石川伯耆守と戦い始め、石川家来の外山小作が一番に鎗を

合わせた。酒井左衛門、榊原小兵太、大久保七郎右衛門、柴田七九郎などが攻め掛け、山家三方衆の作手、段峰、長篠等の三手を切崩した。山縣三郎兵衛の部隊を旗本部隊で三町程追い立てた所、武田四郎勝頼が山縣の二陣でとして大文字の旗を押(p37)立て横から攻めてきた。これを見て武田左馬頭、穴山梅雪も勝頼に続いて押してきた。信玄の命令により小荷駄奉行の甘利の部隊迄も押掛けた。

この戦いで信長から応援に来ていた平手監物も討死を遂げた。浜松方は総敗軍となり家康公も退却中、武田方の城伊庵とその弟の玉虫と一緒に追いかけて来たので馬を引返した。そこへ夏目次郎左衛門が駆けつけ、大将の討死の場ではありません、と云い馬の口を浜松へ向けて、持っていた鎗の元で馬を叩いたので馬は駆け出した。夏目はその場に残り討死を遂げた。

家康公は戦場から撤退して浜松城へ着くと西門より入ったが、味方の敗軍で城内の者が大将の安否を心配して慌てるのではない、わざとお堀端を乗回した後玄関口から入った。

この戦いで家中の戦死した面々は本多肥後守、岩城勘ヶ由父子、松平弥右衛門、加藤次郎九郎、天野藤右衛門、青木又四郎、渡辺十右衛門、同新九郎、中根平右衛門、成瀬藤蔵など始として三百余人が討死した。中でも鳥居四郎左衛門忠広は偵察から帰り、お前は日頃と違い今日は臆したか、と言われた事を心に刻み、先手の石川伯耆守の部隊へ駆けつけて合戦が始るや否や武田方の土屋右衛門尉の部隊に切込み討死を遂げた。

戦いが終り右衛門尉は鳥居の旗指物を取寄せて見たら紺地の布に金で鳥居の紋を付け、その下に鳥居四郎左衛門尉(p38)忠広と書付てある。これを信玄に見せたところ、名のある侍の差物などを悪く扱ってはいけない。以後其方の家中の番差物に使う様にと信玄の差図があつたので、右衛門尉家中の番差物に用ひた。今でも土屋家の番差物に使っていると言う。

天正元年(1573)四月浜松城にて家老達が御前へ出て、甲府で武田信玄が死去したと云う噂がありますと申上げた所、信玄程の武人は現在外に居ると思えず、その上歳も未だ五十を多くは超えていない筈なのに死去が事実なら惜しい事だと色々思い出を語られたので一同感じ入った。

同年秋、武田勝頼は武田左馬頭信豊と馬場美濃兩人に命じて遠州金谷に台城を築き、諏訪の原城と名付けた。

天正二年(1574)正月五日 家康公正五位に叙せらる

同年四月八日三河国産目と云う所で後の越前中納言秀康公が誕生したが、何か理由があつて本多作左衛門へ預けられ、幼名を於義伊丸と云った。

同年天野宮内左衛門を攻める為に犬井城を取囲んだが兵糧の運搬に支障があるので

味方は苦勞していた。そこで三倉の砦へ撤退した所、城主の宮内左衛門が後を追いか戦いを始め兵卒二十四人が討死をした。そこで水野、大久保、榊原康政等が取返して戦い多数討取り、敵を追払い家康公は何事もなく三倉の砦に入った。この撤退時大久保七郎（a39）右衛門が馬から下り、負傷した家僕の文蔵にこの馬に乗れと云った。文蔵はこれを聞いて馬鹿げた馬の下り方をなさる、私の様な者が五人や十人死んでも大した事はありませんが大將たる人の一命は大切です。神に誓っても乗りませんと云う。七郎右衛門はそれを聞いて、乗りたければ乗れ、乗らないならそれも良い、何れにせよ私はここに馬を捨てると云い歩行した。児玉甚内が文蔵を抱いて馬に乗せた。家康公はこの様子を聞いて、強将の下に弱卒なしとの言葉だった。

註1 三方ヶ原 静岡県浜松市北区三方町付近

註2 小山田左兵衛尉（信茂 1539 - 1582）武田家譜代家老衆

註3 山家三方衆 奥三河（信楽郡山間部）の作手、段嶺、長篠を指し、夫々奥平、田峰菅沼、長篠菅沼という豪族がいた。始めは家康に従っていたが武田方に三家共切崩され、家康から離反して武田方に付いた

註4 山形三郎兵衛（昌景 1529 - 1575）武田家家臣、武田四天王のひとり。

註5 夏目次郎左衛門（吉信 1518 - 1573）家康家臣、前に一向宗一揆に加担、巻一に出る。家康の身代わりとして討死した事で有名

註6 武田信豊（左馬頭 1549 - 1582）武田信玄甥

註7 馬場信春（美濃守 1515 - 1575）武田四天王の一人、

註8 諏訪原城 別名牧野原城、静岡県島田市金谷
註9 天野宮内左衛門（景貫） 武田家の勢力が遠江に及んだ1571年徳川家から離反して武田勝頼に付く
註10 犬居城 浜松市天竜区春野町堀之内（山城） 天野氏歴代居城
註11 御蔵砦 三倉城 静岡県周智郡森町三倉

二二三 長篠の戦い（三十二歳）

天正三年（1575）正月十五日浜松城下で鷹狩りの時、井伊万千代を始ご覧になり誰の子かと尋ねられた。私は井伊信濃守直満の孫で肥前守直親の子ですと申し上げたところ、即日家臣に加えられた。

後日に井伊谷が先祖の旧領であるのでこれを万千代に下され、井伊谷三人衆を配下に加え、更に木俣清左衛門、棕原次右衛門、西郷藤左衛門三人を付人として与えられた。

同月十八日天野三郎兵衛康高の下女が連歌の発句を献上したので披露された。来る廿日鎧の賀の時に多数の連歌を出す様に命ぜられた。その年の六月長篠の戦いで勝利したので徳川家代々毎年の祝いとなった。

同年五月、武田勝頼は二万の軍勢を率いて三河国長篠の城を攻めた。城主の奥平信富と援兵の松平外記が堅固に守り防ぐので武田勢は中々攻略できない。

しかし城中の兵糧は乏くなり、その状況を鳥居強右衛門が岡崎へ報告した。それ以前に家康公より小栗大六を使者として織田信長へ加勢を依頼し、信長・信忠父子が五万に及ぶ軍勢を率いて出馬し（p40）っており、家康公も信康公を同道して近日中に救援に向う旨云われた。

強右衛門は長篠城へ戻って柵を乗越へて城内へ入ろうとしたが武田方の侍で河原弥太郎と云う者が夜勤番中に強右衛門を見付て縛り上げた。勝頼の本陣へ連行したところ、勝頼は鳥居に面会し事の次第を聞いて云うには、長篠城中には多くの侍が居るのに其方一人が身を捨てて城を抜け出して大事な使いを勤めたのは誠に武勇に勝れた剛毅な武士云うのは其方の様な人を云うのだろう。所で一つ言い聞かせる事がある。もし同意するなら一命を助け、その上勝頼の旗本直参に採用するがどうかと問われた。

強右衛門は、一命を助けられる事自体たいへんな事なのにましてや直参に採用戴くなど望外の事です。どんな事でも必ずやりますと言う。それでは長篠の柵の近くに行き、城内の仲間を呼出して、今度の加勢について織田信長が同意しないので徳川殿単独では救援が難しいとの事である。此上は直ぐに降参して城を明渡すのが良いと云えとの事である。

鳥居が承知しましたと云うので手の縄を解き胴縄だけ付けて城際近くに行った。そこで柵の木に上り、強右衛門が 唯今帰りましたと呼べば、待兼ねた城内の者達が門を開けて走り出て、どうだったと問えば強右衛門は答て、私は岡崎より今夕方帰り島原山で時間を調整し夜陰に

紛れて城中へ入ろうとしたが、夜廻り番人に発見され囚人の身となった。所で岡崎城では家康公は（p41）勿論の事、織田信長も加勢に五万余の軍勢を率いて岡崎に着陣されたので近日中にこちらへ着陣するので皆に伝えて欲しいと云う。武田方侍は鳥居を柵より引おろして縄を掛けて勝頼へこの事を報告したので勝頼は激怒して城から見える所で強右衛門を磔に掛けた。

この頃加勢の四大将方が長篠に向けて進軍していた。家康公と信康公は八剱山と高山に布陣、信長と信忠父子は極楽寺山と御堂山に夫々布陣した。勝頼は兼て鳶巣山に砦を構えて武田兵庫頭に三千の兵を分与して守らせていた。この鳶巣山砦を攻めるとい酒井左衛門尉の作戦に信長が同意し加藤市左衛門、金森五郎八、佐藤六左衛門三人が添えられ、徳川家からは松平主殿頭、其子家忠、本多豊後、松井左近将監、牧野新次郎、菅沼新八郎、松平玄蕃、西郷孫九郎等が左衛門尉へ加えられた。これらの部隊は間道を通って鳶巣山の城へ向った。

十二月廿二日の黎明に至り、勝頼は軍勢を率いて瀧沢川を渡り十三段に陣を敷いた。家康公と信長は大軍にも拘らず丈夫な柵を作り其内に鉄砲足軽を配置し、その後ろに兵士を配置して敵勢が掛かって来るのを待っていた。勝頼は何の遠慮もなく押掛けて柵の内へ矢玉を放して柵を破れと命令した。各部隊は待達迄柵際へ押掛け遅れを取るまいと柵木を壊して攻込もうとする処に織田徳川連合方の数千挺の鉄砲が筒先を並べて発射された。

武田方の中では有名な武将達迄全て鉄砲に中り討死をする者無数である。 其後敵味方の各部隊が一同に合戦を (p42) 始めたが、 武田方は終に戦い負けて総敗軍となった。 武田方で討死した武将は山縣三郎兵衛、内藤修理、馬場美濃、土屋右衛門、真田源太左衛門、同兵部、甘利備前、原隼人安中右近、望月甚八等で、足軽大将では横田十郎兵衛、多田三八、小幡又兵衛等始として信玄が育ててきた強兵が全て戦死した。

其日の早朝、鷹巢の砦へも酒井左衛門尉配下の軍勢が押寄せ奇襲攻撃したので、 城将 武田兵庫頭、 三枝勘ヶ由左衛門、 飯尾弥四左衛門、 五味与三兵衛、 縄無理之助等を始め数百人が討死した。 徳川方では松平主殿が討死した。

註1 長篠城 愛知県新城市長篠

註2 奥平信昌 (1555 - 1615) 三河国作手の有力国人、今川、武田、徳川と所属が変わる

註3 井伊万千代 (直政 1561 - 1602) 後の徳川四天王の一人、父井伊谷城主

直親が謀叛の疑いで今川氏真に誅殺される。 井伊谷城は浜松市北区引佐町

註4 井伊谷三人衆、永禄十一年 (1568) 家康が遠州を攻めた時、今川氏真から離反した井伊谷の近藤康用、菅沼忠久、鈴木重時の三人。

二一四 武田方長篠余話

この長篠の戦いには種々の説が有るが、その中で確かと思われる事を少し詳しく記す

その1 武将達の水盃

信玄以来の武田家家老である馬場美濃、山縣三郎兵衛、内藤修理、土屋右衛門等は打合せ長篠の戦いの前に勝頼に異見して、この戦いは止めた方が良い、敵は信長と家康の連合で六万以上の大軍であり、陣は柵や逆木で囲っており、数で劣る味方軍が合戦しても勝ち目はありません。 大軍の上方勢が武田家の武威に恐れて陣を柵や逆茂木等で囲っているのを勝として、今回は奥平を生かして軍を引揚げるのが良いでしょうと云った。 勝頼が承知しないので手を替え品を替えて色々説得した結果大筋同意した。 しかし更に考慮すると云う事で家老達が退出した後、跡部大炊 (p43) 長坂釣閑という二人の追従者を呼出して、家老異見の趣旨を聞かせて其方達はどう思うかと尋ねた。

両人は、御前の考えでは是非とも戦いを進める事に家臣の身分で反対する事などは信玄公の時代には思いも寄らぬ事でした。 これは御前が若く今跡を継いだばかりなので軽んじる気持ちがあるのでしょうか。 勿論上方勢は大軍の様ですが、合戦の勝負は人数の多少には関係ないと、信玄公も良く云って居られたのを私達も聞いて居ります。 是非一戦を進められるのであれば武将達を呼び集めてその旨を言渡し、それでも家老達が反対する様なら武田家の誓言を聞かせれば、皆覚悟を決めて随う以外ないでしょうと言う。

勝頼は早速その意見通り家老を呼出し、其方達の意見は熟考したがやはり一戦を行う以外ないと伝えた。 家老達はそれを聞き、先ほども申上げた通り明日の一戦は難しいので今一つお考え下さいと云った。 勝頼は不機嫌となり皆が同意しないのであれば見ておれ、私は旗本部隊だけ

で一戦を遂げると誓言をして云う。

家老達も止むを得ずその座を下り、明日の一戦の場所を見て置こうと武将達とも相談して出かけた。見分が終つて四人の家老は清田村と云う(p44)所で清水が湧出ている池の辺に一同集つて床机に腰掛け休んだ。そこで馬場美濃守が、明日の一戦ではお互いに生死はどうなるか分らない。私達は信玄公の代以来一緒に勤めて長く親しくしてきたが、この様に集る事もこれが最後となるかも知れない。山野の事で酒盛という訳には行かぬが、あの池の清水を汲んで今生の名残の盃を交わしてはどうかとあった。

他の三人の家老もそれが良いとの事だったので、馬場は家来に柄杓で清水を汲取らせ、腰に挟んだ水吞で、まず私からと一盃呑み、残る三人もこれを飲んだ。その後あちらこちらで水を飲み交わしたので、その頃から是を武田家の清田村における水酒盛と伝えている。主人へ対し忠言を尽し、其事が行れず討死する覚悟を決めた同志の者が水酒盛をして今生の名残を惜しむ気持ちは世の中に決して多いと思えないのでここに書留める。

その2 山縣三郎兵衛の最後

この一戦の時、山縣三郎兵衛は家康公の陣に前から掛かつてきたが、信長の差図で柵木を丈夫に構えていたので、柵を破らない限り戦いが出来ない。武田勢は柵際へ詰めかけて始め押倒そうとしたが柵木の根が深く倒れない。刀や脇指で切破つて押入ろうとして、我も我もと柵際へ寄り集るので武田方は味方を傷つける事を恐れ鉄砲を打つ事が出来なかった。

家康公(p45)は事前に各部隊の鉄砲を全て柵内に配置して、大久保治右衛門配下の鉄砲発射を合図に、柵の木の間隙を目標にして各部隊が一斉に入替わり立替り発砲する様にと伝えてあった。武田勢は柵を切破りつて間もなく押入ろうとする時分、味方の足輕達は膝台に鉄砲を乗せて待構えていたが、治右衛門配下が鉄砲を打出したと同時に、各部隊の足輕達が雨の降るように打ち掛けたので柵際の武田方の負傷者死人が多数出た。

山縣は広瀬郷左衛門を呼び、味方の軍勢を川原へ進めて正楽寺の浅瀬より敵の左へ廻り、家康の旗本部隊へ押掛けて一戦を遂げようと伝えた。広瀬は承知しましたと云ったが山縣の配下の者達も四方へ散り非常に少数だった。しかし山縣が馬上で集合の采配を振ると、流石は山縣の配下の者達だけの事であり直ぐに三四百程集った。その部隊を率いて川原の方へ進もうとした所に、大久保配下の鉄砲隊の玉が山縣の右の手に当たったか、采配を左の手へ持替えた。しかし今度は左手へも鉄砲が中つたのか最後は采配を口にくわへながら駆け回っていた。三度目の鉄砲が山縣の鞍の前輪をかすめて下腹を打貫いたので、山縣は采配を口に咥えたまま落馬して絶命した。

武田家で大身の家老達は数人あったが山縣は家康公も只者ではないと思われていたようである。

一つは本多百介に男の子が生れたが、かたわに生れつき(p46)たいへん残念がつている由を側衆から家康公が聞いた。それは如何様のかたわかと尋ねられたので、大き兎口と云う事

ですと答えた。家康公は、それは良い事だ、信玄の家老山縣は大きな兎口だったと聞いているが、山縣の魂が移り当家譜代の百助の子に生れ出た事は目出度い事である。十分大切に育てる様父百助にくれぐれも伝えよとの事だった。

次には石川伯耆守が徳川家を去って秀吉卿へ仕えた年の翌年十一月六日だったと思うが、旗本を始め家中一同に、是まで使ってきた当家の軍法一式を今後は全て信玄流に替えるので、その様に心得よと通達された。その時の事だったか、井伊直政へ預けて置いた山縣配下の侍達を御前へ召出して、直政の部隊は今後赤色の具足に統一し先手となる事、直政も山縣に劣らぬよう部下を良く育てる様にと言われた。これは山縣の事を家康公が惜しまれたためと思われる。

この様に山縣討死の様子など末代迄武士の頭を勤める侍の手本にもなると思ひ此処に書留めた

その3 馬場美濃守の忠節

馬場美濃守は柵際で配下の者が皆討死をしたり、負傷したりで部隊が崩壊したので仕方無く戦場を退いて小山に上り、千鳥鎌の鎗を杖にして、敵を後ろに控え味方の敗軍の方を眺めた。そこへ真田兵部が来て山の下に馬を留め、そこに居られるのは馬場(まば)殿ではないかと言葉を掛けた。馬場は、私は美濃である、貴殿は如何と聞く。兵部は、兄の源太左衛門は撤退したと聞いたので、私も撤退しようとした所へ兄が乗っていた馬が引き返してきた。

その轡取りの者に尋ねたら源太左衛門は討死したと云う。今朝出発する時に、討死する時は兄弟一緒と決めて居たので此処まで引き返し来ました。あなたは源太左衛門の討死の場所を

御存知ないかと聞く。

馬場は、源太殿が討死した場所は柵際近い所ですが、その辺へは最早上方勢で満ちて居るので行くのは無利でしょう。私もここで討死と覚悟しているので一緒にと云うので、兵部も馬場の側に並んで立っていた。そこへ上方勢が押掛けてきたので兵部は最期を急ぎ、馬場殿は何を見合わせているのかと言葉を掛ければ、馬場は今少し待ちなさいと云う。暫くして馬場が言うには、唯今勝頼は猿橋を渡ったのもう安心です、と云い鎗を持ち直して山から下りて討死を遂げた。

世間では日頃主人に目をかけられ人に勝れて昇進すれば、主人が驚を鳶と云えばそれに随い、恩ある主人が落ち目になると日頃の態度を変えて主人の苦勞を顧みない類の者も多い。

この馬場などは主人勝頼の為に忠言を尽したが採用されなかったもので、主人が辱められるなら家臣は死ぬという昔の人の(ことば)言葉通り討死の覚悟を決めた。その上尚主君の安否を気遣い、勝頼が猿橋を越えたのを見届けて後安心して討死を遂げるのは決して例が多い事ではないのでここに書き留める。

その4 高坂弾正の心配り

この一戦の時、武田家家老の一人高坂弾正は上杉家の進出を阻止する為に信州海津の城に残留していたが、長篠戦について心配し部下の小幡山城に後を頼み川中嶋から出陣した。

しかし勝頼が利を失い味方が総崩れとなった事を聞いたので、小高場と云う所に宿の陣を張り、

勝頼は云うに及ばず侍達に至る迄全員への料理を用意して待っていた。

勝頼が着陣したので弾正は迎えて、恙なく御帰陣になり目出度い事ですと云い先に立って座敷へ案内した。勝頼が弾正へ云った事は、今度長篠では私の思った事と異なる戦いで後れを取っただけでなく、信玄公が大切にして居られた家老や武将達を全て討死させてしまった。私も討死する覚悟であったが穴山梅雪から厳しく留められ、止むを得ずその意見に随い帰陣し其方などに向って面目次第もないと云えば、弾正は聞いて、その事は後にしましょう、先ず御膳を召上って下さいと云いながらもと違い弾正自身が立廻って接待した。

食事が終わってから勝頼は弾正を呼び、先程も概略は述べたが返すがえすも私の不見識でやらなくても良い戦いを進めて負けてしまったと云う。弾正はそれ聞き、貴方様は未だ若いので (p49) 是非一戦と思われたでしょうが、この様な時こそ家老達が相談して強く止めるべきであるのに、殿の思うままにさせたのは不届きですと言う。

勝頼は答えて、いやいやそうではない、家老達は無理な戦いと気づき、手を替品を替三度も戦いを止めるよう進言した。その意見を取り入れなかったのは私の過ちで家老達には非はないと云い、家老たちの意見を詳しく説明した。

弾正はそれを聞き、それでは尚更家老達の判断ミスと私は考えます。何故なら勝てない戦いと考える以上、他の武将達も全員を殿の前に集め、明日の戦いは不可能ですから是非一戦と

云われるなら全員で切腹しますと云うべきです。そうであれば殿一人が一戦と思っても先手を受持つ武将もないので戦う事は出来ません。一戦できなければその場は退く以外ありません。そうすれば将兵を失う事もなく改めて次の機会を得られたのです。実に家老達の思案不足は残念ですと云った後、この討死した者達は信玄公の時代より私も共に勤め長年親しくした者であり不憫ですと目に涙を浮かべた。勝頼も落涙に及んだとの事である。

これらの事は横田次郎兵衛殿宅で小幡勘兵衛殿が話された席に私(友山)も居たので (p50) 此処に書き留める。

註1 高坂弾正昌信 (1527 - 1578) 武田家重臣

註2 梅津の城 別名松代城 長野県松代市松代

註3 小幡山城守虎盛 (1491 - 1561)

註4 小幡勘兵衛景憲 (1572 - 1663) 甲州流軍学者、大道寺友山の師

二一五 武田方遠江の諸城攻略 三十三―四歳

天正三年(1576)六月 家康公は浜松を出馬し遠江国二俣城を攻めた時、城主朝比奈弥兵衛が打って出て味方の松平彦九郎を討取った。その時内藤弥次右衛門が弓で弥兵衛を射倒すと、弥兵衛の弟朝比奈弥蔵が弥次右衛門に打て掛った。弥次右衛門二の矢で弥蔵を射殺したが城兵が弥蔵を城内に引き入れようとするので、桜井庄之助が追付き敵を突伏せて

門際で首を取て戻るところ桜井の赤根の指物が城門に引っ掛かった。桜井の下僕の今若がこれを見て主人桜井に知らせたので早速引き返してこの指物を取て帰った。この時家康公は鳥羽山の上からは是をみており庄之介の働を高く評価された。

その翌日二股の城主依田方より内藤が射た矢に札を付、賞賛の言葉を書き添え石川日向守家成に送ってきた。この事を報告したところ、家康公は弥次右衛門が弓術と武勇を兼備へていと云う事で高く評価し褒美に胴服を与えた。

同年武田方の朝比奈又太郎が立て籠もる光明城を攻め、本多・榊原の部隊が先鋒で二天門に攻め上り戦った。城主朝比奈は防ぐ事が出来ず城を明渡した。

同年七月又出馬し遠州諏訪原の城を攻めた。城将今福丹波、室賀、小泉等堅く城を守り戦う。その時は鳥居彦右衛門が先鋒に進み戦ったが、城中より打放した鉄砲に腹を打抜れ落馬した。しかし従士杉浦藤八と云者がよく元忠を助けて退いた。その後城兵は力尽て籠城出来ず、武田方三将(p51)は城を捨てて同国小山の城へ退いた。以後諏訪の原城名を改め牧野の城となった。

この城は敵城にも近く領地の境目であるので急に敵が攻めるかも知れず、誰を城代にするか思案中に、松井左近将監忠次が進み出て、もしお許しがあるなら私が城に残りますと云うので、家康公は喜んで忠次を城代に任命して一字を与えた。以後松井は周防守康親となった。

同年九月牧野の城へ家康公は出馬し、武田方小山の城を攻めるかどうか評議した。酒井左衛門尉が云うには、小山の城は要害の地ですから、落城したとしても手間を取られます。こんな所へ敵が大軍で援護すれば緊急に軍を引き上げようとしても道路も險難多くて大変ですから、今回は攻撃を延期しましょうと云う。その時周防守(前出)が云うには、勝頼は前の長篠戦で重臣達が多数討死しており、それ以来武力も衰えていますので強力な援護は出来ないでしょうから小山を攻めるのがよい言うので家康公は同意し則小山を攻めさせた。

この時石川伯耆守、松平周防守、本多平八、松平善四郎、同又八郎などが先鋒で力戦した。そこへ武田勝頼が二万余の軍勢を率いて大井川の辺へ進軍したと云う情報があったので、小山の城の包囲を解いて牧野の城へ退いた。勝頼が大軍で押寄せるとの(p52)事なので味方の者達はどうしようかと思つて居た時、榊原康政と大須賀康高の兩人が、ここは私達が先手しますと云い部隊を進めた。その体制に隙がないので武田方は追う事が出来なかった。

その時まで旗本部隊は先頭に信康公、後方に家康公が続いていたが、信康公が自身の兵を全て道の脇に寄せ自身も馬を寄せたので、家康公からは何故そこで控えているのか、先に行って良いとの事である。信康公は、今までは敵が前にいましたの先に立ちました、最早敵も後になりましたので、お先に引取り下さいと答えた。家康公より又使者が立ち、敵前の遠近は構わず今まで通りの隊列で馬を進める様にと使者が言う。信康公が使者に伝えたのは、其方達の身にとつても心得るべき事だが、敵前近くでは親を後にして子が先に退けるか、いくら言われても随えないとの事なので、使者はその通り報告した。

家康公はこれを聞き、さてさて剛情な奴と言われたが左程立腹ではない様子で牧野の城へ入られた。

天正四（1576）年犬井へ出陣し檜山の城を攻め、次に勝坂の城攻めに取り掛かったところ城主の天野宮内左衛門が塩見坂の陣で防戦した。味方の先鋒が破れ大原大助、大浜平左衛門等が討死を遂げた。その時水野忠重や大久保忠世（おきよ）が力戦したので城兵は防ぐ事が出来ず、城将天野は城を捨て逃れて鹿鼻の城に籠ったので帰陣した。

此年家康公が岡崎の城へ入られた時、信康公から本多作左衛門方へ内意があり、産目より作左衛門は於義丸君を連れて岡崎の城へ登城した。信康公の差図通り座敷の障子を於義丸君に叩かせた。家康公がこれ聞き、あの障子を叩くのは誰だと尋ねられたので、信康公は席を立て次に行き、於義伊君を抱いて戻った。

これは私の弟於義丸ですと云えば、家康公も此方へと抱いて膝の上に置かれ、元気に生れたなと云われるので、信康公もおっしゃる通り丈夫に生まれ育っています。

この者が健やかに成人すれば私の良い援けと成るでしょうといえ、家康公も御機嫌に可愛がり来国光の脇指を与えられた。

是以降岡崎は言うまでもなく、浜松城下でも於義伊丸様と云い皆尊敬するようになった。

天正五（1577）年八月、遠江から山梨方面へ進出したところ、武田方穴山梅雪が防禦したが徳川方の攻撃が急であり、梅雪は終に戦い負けて引退がったので帰陣した。

今年十二月十日頃 家康公は従四位下に叙せられ、同廿九日左近衛権少将に任ぜられた。

天正六（1578）年三月、浜松を出陣し駿河田中城を攻めた時、酒井与九郎、内藤勘左衛門、熊谷小市郎、小栗又（おさ）市の四人が命令もないのに忍んで城壁に近付いたので、城外に伏せていた敵兵が急に興って襲った。上記四人の者達は粉骨を尽して戦い。終に敵を城へ追い込んだ。比類のない働きであったが、命令もないのに抜け駆けをしたことは軍律違反であり家康公の意に反し四人共に勘気を蒙った。

その翌日味方の諸部隊が田中城の外部を攻破り敵を多数討取った後、牧野へ帰城された。勘気の四人はその後三カ年を過ぎて許された。

同月十三日越後の上杉謙信が春日山城中で死去したという知らせがあった。家康公は、武田信玄が死去した後では謙信程の武人はいなかったのに、とその死を惜しまれた。

註1 二俣城 浜松市天竜区二俣町二俣

註2 依田信蕃（1548 - 1583） 武田氏家臣後徳川氏家臣

註3 光明城（別名高明城） 浜松市天竜区山東字光明山

註4 諏訪原城（牧野城） 静岡県島田市金谷、武田氏築城

註5 小山城 静岡県榛原郡吉田町

註6 犬井城（犬居城） 浜松市天竜区春日町堀之内 室町時代初め以来天野氏居城

註7 勝坂城 犬居城の支城 浜松市天竜区春日町豊岡

註8 於義伊(於義丸) 家康の第二子、後の結城秀康。 懷妊すると女を本多作左衛門に預け、この時が父子初対面との事。 母は家康正室築山殿の女中於万

註9 本多作左衛門(重次 1529 - 1596)家康家臣、一筆啓上云々の書翰は長篠戦の時に書かれたと言いつ

註10 穴山梅雪 (1541 - 1582) 武田家重臣、(一門)

註11 田中城 静岡県藤枝市田中1 今川家の城、1570年武田家に取られる

註12 上杉謙信 (1530 - 1578) 戦国大名、越後守護代長尾家出身、長尾景虎

二一六 嫡子信康の自害 (三十六歳)

天正七 (1579) 年四月七日 秀忠公浜松城で誕生され土井甚三郎が七歳で付人になった。

同年九月十五日三河守信康公が遠州二俣の城内で切腹された。 息女が二人あり小笠原兵部大輔秀政及び本多美濃守忠政へそれぞれ嫁いだ。 信康公切腹について、私(友山)が若い頃ある老人から聞いた咄がある。

遠州二俣で信康公が切腹を命じられた時、浜松から検使として渡辺半蔵と天方山城守に御目付衆を添えて派遣された。 科の理由書を兩人は持参したので差上げたところ、信康公は拝見した上で兩人へ云われた事は、最早この様に云われる以上言分けがましい

事は云わないが、其方達に言って置きたい事は、子の身として親に (p55) 対し謀叛や逆心などは人の倫理に反する。 然るに私が武田勝頼と同意して当城中へ武田勢を引き入れて謀叛を企てたなどの一条は、日本国中の神慮にかけて全くの虚言で影も形もない事である、この一事は私の死後よくよく説明して欲しいと云われた。

兩人は畏まって承り、その件に付いてはご安心下さい、仮令私達が大殿様の御機嫌を損じ咎めを受けようとも、ご遺言として伝えますと堅く約束した。 信康公は満足され、他にも一つ頼みがある、当城下でも浄土一宗の寺は有ると聞くが葬儀は大樹寺の方丈へ頼みたいとの事である。 兩人は、それはお安い御用です他に何でもおっしゃって下さいと云えば、他に思い残す事は無いとの事だった。

信康公は渡辺に、其方は私が幼少の頃から馴染んでいたので介錯は其方に頼むとの事だった。 渡辺は畏まりましたと次の間から自分の刀を持って来て腰脇に置く。 信康公はそれを見て肌を脱ぎ潔く切腹され、半蔵、半蔵と呼ばれた。 しかし半蔵は信康公が肌を脱ぐのを見た途端にぶるぶる震えだし何も出来ない状態である。 山城守はこれを見兼ねて半蔵はあの通りです、 定めて御苦痛でしょうからお許しが (p56) あれば恐れながら私が介錯をさせて戴きますがと伺えば、其方頼むぞと云われたので是非無く山城守が介錯して差上げた。

御目付の内一人報告の為に浜松へ返し、兩人は暫く鋸って葬儀を執り行なった後浜松へ

帰り登城して詳しく報告した。次に謀叛に言及する一条に関しては天地神明に誓った遺言の事を兩人が承った事情を涙を流しながら報告した時、家康公は特に何も云われなかったが、御前に控えた人々は皆涙を流した。中でも榊原康政と本多平八郎の兩人はいたたまれなくなり声を揚げて泣き出して下ったので、次の間に控えた人々も暫く落涙に及んだ。

其後家康公は御側衆に、この度山城守が二侯城へ持参した脇差の銘を尋ねられたので千子村正作である事を報告した。家康公はそれを聞き、御前に居た人々に以下云われた以前に尾張国守山城攻撃中に安倍孫七郎が乱心して清康公を殺害したのも村正作の刀と聞く。又家康公が若い頃駿河国富ヶ崎寄留中小刀で手を切り、たいへん痛かった事があるが、この小刀の銘も千子村正だった。今度山城守が思いも寄らず信康公の介錯に使ったものも同作である。つまり村正作の刀は徳川家にとって不吉と思われるので村正作の刀類は全て捨てる様に納戸係り役人に指示された。

一方前述天方山城守は徳川家を立(p57)去り行方が分らなくなったが、暫くして紀州高野山に閑居しているという噂があった。日頃天方と親しくしていた友人の一人が有馬温泉入湯の休暇願いを出し、序に高野山を訪れ天方に出会った。そこで貴殿はどんな考えで浜松を去ったのか、と尋ねた。天方は、貴殿も聞いている通り二侯城で思いがけず若い信康公を私の手に掛けてしまった。それ以来世の中が空しくなり、奉公にも身が入らずこの様な状況になった云う。更に言葉を尽して尋ねたところ、天方が言うには、今更云っても仕方がない

事であるので決して他言無用と言う事で語った。

私が徳川家を去ったのは別儀ではない。信康公の切腹の際、介錯を半蔵に頼まれたが切腹に至ると半蔵がぶるぶる震えだして介錯が出来ない状態だった。信康公は既に腹を切り苦しんで居られるのを見かねて、私がお許しを得て介錯したのである。ところが或時、殿様が近習衆へ雑談の節、渡辺は鎗半蔵と呼ばれた程の勇者だが主の子の首を切る時になり腰を抜したと云われたの伝え聞いた。ならばこの山城は主の子の首切り好きなように思われたのかと気付き、奉公の身が厭になり世を捨てたのだと語った。

ひよつとしてこの様な事を聞いて不憫の思われたのか、後に結城秀康公が関ヶ原戦以後に越前一国を拝領の(p58)後、高野山より天方を呼び寄せ高禄で抱えられた。しかしかなり昔の事であり真偽は分らないが、私(友山)が聞いた事を書き記す。

- 註1 秀忠公 後の第二代将軍徳川秀忠
- 註2 土井甚三郎 後の秀忠、家光時代の老中、大老 土井大炊頭利勝(1573 - 1644)
- 註3 松平三河守信康(1559 - 1579) 妻が信長の娘であるが不仲となり、妻より信長に不満の書状が出されたのが発端で、家康は信康を処断せざるを得なかったという説
- 註4 守山城 名古屋守山区市場 織田一族(信長の叔父信光)
- 註5 松平清康(1511 - 1535) 家康祖父 守山城を攻める最中に家臣に殺害された

天正八（1580）年正月従四位上に昇進

同年五月駿河国へ出馬して田中城を攻めるが、武田方城将芦田右衛門佐が防ぐ。味方部隊で田中城外の麦作をなぎ払い引揚げるところへ、駿河用宗の城主向井伊賀の部隊が最後尾の石川伯耆守の部隊に打って懸る。時に伯耆守を初め酒井河内守、松平周防守、牧野右馬丞、平岩七之介、内藤弥次右衛門、鈴木紀伊守等が引き返して敵兵八十余人討取る

同年九月松平家忠、牧野康成等に用宗の城を攻撃させ、城主向井及び三浦等戦死した。

天正九（1581）年の春遠州高天神の城が落城した。この城は何としても攻め取りたいと思われ、昨年以來遠江及び三河両国の部隊で攻めたが城兵等が堅く守り中々落ちない。味方諸部隊に指示された事は決して力攻めにしない事、城を取囲み各陣を堅く守り城中から夜襲など仕掛けられぬ様に用心する事。数日立てば城中の兵糧が尽き降参するか、或はどこか一方を打破って切り抜けようとするか、この二つ以外にない。もしこの城を救うために勝頼が出陣すれば、我々も途中迄出かけて武田勢を切崩すので各部隊共気長に城を取囲むべしとの事。

その指図通り城中の兵糧が尽きてきたので籠城が困難の旨甲府へ報告したが、(p59)勝頼の援護は延び延びになっており、城兵は我慢出来ず一方の囲を切抜けて城を遁れ出ようと相談していた。三月廿二日の夜半になり城門を開いて石川長門守が守る瀧が谷へ切て出た。味方の各部隊は前からこの事態を待っていたので早速対応し、敵を瀧が谷へ追い込み悉く討取った。残りは城中へ追返して其勢いに乗って諸部隊が四方より一斉に攻込んだので城兵は戦い疲れ、城将岡部丹波を始め兵士達も残らず討死した。この時信長より加勢として、佐々内鞍助、野々山三十郎兩人が来ており寄手の中に加っていたが、彼等による信長への報告では高天神籠城兵士の首七百余討取としている。

この城兵の中で唯一人横田甚五郎は味方大須賀康高と大久保忠世部隊の間の柵を破り何事なく甲府へ退いた。勝頼の前へ出て、高天神の城兵は徳川家康の大軍に取囲れ、其上兵糧が乏しく籠城を続けられず、城中の者は残らず討死を遂げましたと報告した。勝頼も特に言葉も無く赤面したが、横田が敵の囲の中を切抜けて帰った事は感心であるとして褒美に脇差を与えた。しかし甚五郎はそれを手にも取らず云うには、私としても城兵と一緒に討死する所でしたが、それでは高天神城の事情をお知らせ出来ないもので帰りました。武士たる者が死場を遁れて運よく逃げ帰り御褒美を戴く訳には行きませんので、恐れながら返上致しますと云い終に受け取らなかった。

後にこの事が家康公の耳に入ったのか、翌年甲府で元武田士卒を数人召出された時の

事であるが、一条右衛門太夫屋 (p60) 鋪において夜になり浪人達に面会された時、横田甚五郎と読み上げられると御前にあつた手燭を家康公自身で取られて甚五郎の側へ行き、昨年高天神落城の時其方は何歳だったかと尋ねられた。

註1 用宗城(持舟城) 静岡市静岡区用宗城山町 城代武田家臣向井正重、三浦義鏡

註2 高天神城 静岡県掛川市上土方・下土方

註3 横田甚五郎 (尹松 1554 - 1635) 武田家武将原虎胤孫、家康に仕え江戸幕府旗本

註4 一条右衛門太夫 (信龍 1539 - 1582) 武田信玄の異母弟

落穂集第二巻終

落穂集第三巻

三一 一 武田家滅亡と本能寺の変 三十九歳

天正十年 (1582) の春信州の木曾左馬頭義昌が武田勝頼に背き織田信長の旗下と成ったので信長信忠父子は甲信の両国に兵を發して武田家を追討するとし、近国の諸大将と相談し駿河国方面には家康公三万五千で進發した。関東方面から北條氏政・氏直父子が三万余の軍勢を率いて向った。飛騨方面からは金森五郎八長近が参三千余の兵で進入し、木曾方面からは織田信忠が五万余を率いて向った。信長の旗本は七万余の人数で全軍の後から進發することになっていたが、信州の下条伊豆の配下の下条九兵衛が勝頼に背き信長へ傾き濃州岩村の城代である河尻肥前守軍勢を引入て信州伊奈の城を信忠へ引渡した。それ以後武田家の諸勢 (p61) は力を落して織田家へ降参する者が多くなった。

同じく家康公も二月十八日浜松を出發し駿河の田中の城を攻めたところ、城主芦田右衛門佐和を願ったので大久保七郎右衛門に城を請取せた。それより同国の真国寺の城へ向ったところ城主朝比奈駿河守は降参して城を明渡した。同国江尻の城主穴山陸奥守入道梅雪はかなり大きな勢力で城に立て籠もっていたが、家康公は旗本の長坂血鎧九郎を城中へ派遣して交渉させたところ、梅雪は長坂の意見に随い味方と成り、江尻の城を明渡したので駿河国中の武田方の各城は残らず当家の手に入った。

三月九日、家康公は駿河を出馬し穴山梅雪を案内者として文殊堂、市川口より甲州へ入り、

同十一日に甲府へ着陣し織田信忠と対面した。

それより前武田勝頼の軍勢は日々に少なくなり、甲州に留まることも難しく行く末を失ったが信州上田の城主真田安房守方からの使いがあり、早々私共の方へおいで下さい、命に賭け御世話しますとある。勝頼は是非との気持ちがあつたが、その時は未だ長坂釣閑と跡部大炊助の両追従者が付き添つており、色々反対意見を述べて郡内の小山田が武田家代々の家老筋であるので小山田に頼むと言う事で郡内へ落ちて行つた。ところが小山田は全く同意せず、それどころか足輕の兵を出して弓鉄砲を打掛けて寄せ付けなかった。

それより天目山の麓、田野村と云う所へ落ち行き百姓の家に (pg3) 潜んでいたが、知られて滝川左近と川尻肥前両部隊の者達が田野村へ押掛け終に勝頼・信勝父子を討取つた。

その首を甲府へ送つたので信忠は葉原助六・関嘉平次と云う侍を添えて信長へ持参させた。信長は勝頼の首を庭先に置いて、親父信玄以来の色々の悪事を云いたて悪口を行つた後、この首を家康へも見せる様にと指示した。上の兩人の使いは首を家康公の陣所へ持参したところ勝頼の首をくきやうに載せる様と言ひ、首対面の取扱で見られた後信長への返答をしようとした。しかし兩人の使者が、私共は今からこの首を京都に持参しますのといふので返答は出さなかつた。

さて信長は上の諏訪に滞留して関東各地の処理を進めたが、駿河国一国を家康公へ進上し今度好都合なので富士見物をしながら東海道を上ると言う事である。家康公としては駿河、

遠江、三河の三ヶ国の領地のそれぞれの場所で信長を御世話する事になるが、その準備は半端ではなく、道橋掃除等は小栗仁右衛門と浅井六之助の兩人へ指示し信長は満足して安土へ帰城した。

その後月初めに家康公も浜松を出発して穴山梅雪を同道して安土へ行けば、信長もたいへん歓迎して色々応接があつた。同廿一日梅雪を連れて安土を出発して京都に行き、その後堺の港を見物しようとして下向した。南北の商家の者達が昔からの伝えられた珍器等売つてゐるのを梅雪は田舎人であるから見物する様にと云い堺に逗留していた。

六月二日丹波国亀山の城主明智日向守光秀は羽柴筑前守秀吉が毛利家と対陣している場所へ出発するので、(pg3) 中国へ下ると触れて軍勢を調べて亀山の城を出て桂川を渡る頃急に謀叛の趣旨を述べて信長の宿寺本能寺を急襲した。当番の武士達はいへん驚き防戦したが敵わず、信長は四十九歳にて自殺した。明智は直に二条新宮へ押寄せて嫡子信忠にも腹を切らせたと云う知らせがあつた。

家康公は堺より直に上洛して明智を討果したいと思ひはあつたが、人数も少なくその上明智に同意する人々の有無も不明なので、拙速な上京も如何なものかと思慮していた。そこへ近江の瀬田の城主山岡兄弟が駆けつけたので、勧めに随ひ山岡を案内者として伊賀越えをして岡崎へ帰城した。

近日中に上京して明智を退治すると言う事で出陣の触れを駿・遠・参三ヶ国に出して、

酒井左衛門尉忠次を先鋒とする事が決まった。忠次が部隊を率いて尾張の津嶋迄来た処羽柴秀吉から家康公へ使者があり、今度山崎において明智と一戦に及び直ぐに勝利し反逆の輩は残らず討果したので上方方面は平穏なのでご安心下さい、出陣は不要ですとの事なので先鋒の部隊も津嶋から帰陣した。

註1 織田信忠 (1535 - 1582) 織田信長長男

註2 明智日向守 (光秀 1528 - 1582) 信長の重臣、美濃の守護土岐氏支流

註3 亀山城 京都府亀山市荒塚

三十二 甲斐他旧武田領の争奪、北條家と和睦 四十歳

信長在世の時上の諏訪で勝頼領地の分を誰にどう割与えるか決めたとき、西上野全体は滝川一益に給わり、厩橋の城に常駐する事とし、甲州半国は川尻肥前に与えるとの事だった。その時信長が家康公へ (pg4) 言われた事は、甲州は駿河と接しており領地並であるから川尻に色々協力する様にと直々言われた。信長が横死したので肥前守も力を落していると考え、本多百助を甲府へ派遣して肥前守と諸事の相談相手になる様にと言い含めた。ところが肥前守は内心でこれは家康公の計略と考え違いを起こし、ある夜兎小姓に命じて百介の寝首をかって殺害した。

本多の家来達は大変憤慨して百姓の家へ寄集り、主人を殺されて生て返ったとしても

助かる事はないと考えから川尻の家へ押込み切死をしよう、しかし主人の敵川尻を打漏しては悔しいと言っているのを武田家の浪人が一人二人と聞きつけて、例の百姓家に集り色々相談した。まもなく彼等は一揆を起して川尻の家を囲み、早速攻め破り川尻始め徒卒全てを討殺した。中でも肥前守は甲州の武川衆の内三井十右衛門が討取った事を本多の家人達に使者を添えて浜松へ報告した。家康公は大変喜び、その後岡部次郎右衛門、成瀬吉右衛門兩人に芦田右衛門佐を添えて甲州へ派遣し、徐々に甲州経営が始まった。

その頃滝川左近将監一益も上州厩橋の城に滞在していたが、信長横死の知らせを聞きたいへん驚き力を落し、関東を捨て上方へ上る考えであるので北條氏政・氏直父子が出陣されるのが良いと、新田の由良信濃守やその他の上州衆や武州忍の成田等から小田原へ注進があった。氏政 (pg5) 氏直父子は三万余の軍勢を率いて厩橋城を攻めた。滝川も流石の者で北條家の大軍を事ともせず厩橋の城から出て小田原勢と一戦を遂る。しかし小勢の事であり終に戦い負けて厩橋の城へ引退く。その後笛吹峠へ越えて木曽路を経て上方へ去った。したがって西上野の旧武田領は全て北條家の持分となった。

その後北條氏直は西上野の人数を合せ四万余の軍勢で笛吹峠を越え信州へ侵入した。芦田や真田を始めとして信州侍を全て味方に付け、五万に及ぶ兵を率いて川中島へ進出した処、越後の上杉景勝も信州へ出馬し善光寺辺に逗留して犀川を隔て対陣となった。その時北條家の一門や家老の面々は氏直へ異見して、小田原に接する甲州を差置いて此処で上杉家と対陣しても利益とならないと言う。氏直も同意して直ぐに軍勢を引揚げ、そのまま甲州へ侵入して

若神子で七月末より十一月迄五ヶ月の間家康公と氏直の対陣となった。

それより前に甲州浪人達から浜松へ報告があり、北條氏直は今信州へ出陣しているが、親父氏政は小田原に居残つて相州三板の城へ軍勢を貯え、甲州黒駒辺への出張を考慮中との事なので、直ぐにでも出馬されたいと要請があったので浜松を出陣した。その頃は古府中に滞在の予定だったが、氏直出陣の報告があったので新府中へ布陣して氏直と対陣した。

この時家康公は朝比奈弥太郎を使として北條美濃守氏規方へ書を送った。内容は甲斐

国は (pgc) は駿河と接しており、最寄でもあるので当方より支配とすべきである。西上野の武田の旧領を添へて上野一國全体を北條家で支配されるのがよい。この趣旨に氏直が納得するなら以後和睦を結び、来春になり親父氏政が隠居され氏直が家督を相続されたなら当方の娘を氏直へ嫁がせる。幸い隣国の事なので円満に話し合いたい旨詳しく書面にしてある。それを見て氏直を始め北條一門や家老達もこれは最もな事となった。

氏直はその意見を得たので早速小田原へ報告し、氏政よりの返答次第で美濃守が新府の陣所を訪れる旨回答した。氏直は近習の侍遠山新四郎を小田原へ遣わしたところ氏政も納得はしたが、決断の評議が済まず使者の新四郎は小田原に逗留している内に寒気の季節になった。

山の手には布陣している信州先方の侍達は小屋の普請を始めて冬支度をしている事が家康公に報告されたので、たいへん立腹して、或日の早朝北条家一の先手大道寺駿河守の陣所へ朝比奈弥太郎が馬を乗りつけて、先日も御目に掛かった弥太郎です、家康からの使で参りましたと言うので駿河守が陣屋へ呼入れた。弥太郎は、家康が云うには先頃和平の事を申し入れ、

小田原からの情報次第で美濃守が参陣されるとの返答だったが、数日待っていたが返答がないので、ここに至つてはと諸陣では小屋普請をしている。これは和談をすると言うのは真実でなく時間稼ぎの策略であろう。時間が立つと (pgc) 互いに人馬の融通もできないので今日中に一戦を遂げるので、これは断交の使いであると言う。駿河守は驚いて、家康公の御腹立されるのは当然である、しかし氏直の気持ちは最前美濃守よりお伝えした事と今とは少しも變つていない。何れにせよ美濃守と直接話されるのが良いと言う。弥太郎は、その事に関しても家康が私に指示したのは、誰でもよいから先陣の人々に伝えて直ぐに帰つて来いという事です。から、此陣へ来て貴殿へ直接申し上げた以上美濃守殿へお話する必要はありません、と座を立つのを漸く引き止め、駿河守は本陣へ駆けつけ事の次第を報告した。氏直始め皆たいへん驚き、此上は美濃守が新府の家康本陣へ行き、何とか事なき様に交渉せよと一決した。

証人の為、駿河守嫡子大導寺孫九郎を美濃守に同道させ、朝比奈弥太郎を案内者として新府へ駆けて行く道すから、榊原小平太、大須賀五郎左衛門、土井豊後の三部隊は若神子の上の山手へ押上っており、左側の軍勢は酒井左衛門尉、石川伯耆守、本多平八郎の三部隊は北條方上野衆並に信州佐久小縣衆へ差し向ひに布陣して部隊毎に偵察を出して合戦を待ち押出そうとしている。その両陣の中を弥太郎が氏規(北條美濃)と直繁(孫九郎)を同道して通るのを見て、左右の陣から使いが駆けて来て事の次第を聞くと暫くは部隊の前進を押し留めた。

そんな中で三人は新府の陣所へ乗付て、弥太郎が本陣へ参上して右の次第を報告したので

早速家康公は美濃守に面会した。氏規は、先達ての和睦の回答が（p68）遅れている理由を一つ一つ申し上げ、不手際の至りで困っていますと申し上げれば、家康公も、そのような間違いはよくある事だと機嫌よく笑った。この上は一戦の必要ないと云う事で先手の面々も部隊を引揚げようと指示があった。孫九郎にも面会して、ところで美濃守も若い時は北條助五郎と云ったが親父氏康から駿河の今川義元方へ人質として送られ、その頃家康公も竹千代君と云い駿河の富ヶ崎と云う所で屋敷が並んでおり、朝夕の様に出席した事など雑談があり、美濃守と孫九郎に弁当の料理を下された。

美濃守がお暇を申し上げた所家康公は、貴殿がこの陣所に来て直談したのだから、人質は必要ないので孫九郎を連れて帰らないと云う。美濃守は、いやそれはなりません、この様な事は幾重にも堅くするのが良いでしょう、氏直からそのような言われておりますので、こちらに置いて下さいと云う。それなら孫九郎の引替として此方から酒井左衛門尉の倅、小五郎を貴殿に預けよう、しかし今日は夜も更けたので明朝引渡そうと云った。美濃守は、こちらからの人質は必要としませんが、それでもと云う事であれば氏直は明朝陣を払い小田原に帰りますから、それ以後小田原へ送って戴けば結構ですと云い氏規は帰って行った

その後で榊原小平太と鳥居彦右衛門元忠の兩人を呼ばれ、北條氏直からの人質の孫九郎を来年三月迄兩人に預けるといふ。その中でも彦右衛門はこの甲斐国に居残る事になるが孫九郎をどこに（p69）置くかと尋ねた。元忠はこの甲斐国も未だ確実に手に入った

訳でもありませんので心当たりも無く自分の手元に置く外はありません、と答えた。家康公は、人は突然死んだり病気になるたりするが、人質は大切な物であり他の置場所を考えて見ぬかと重ねて尋ねた。元忠は外には思いつきませんと云うと、家康公は究極の場所があるのを思いつかぬか、孫九郎を富士の神社の社人へ預けよ。富士の神社は関東に多くの旦那を持つから、北條家の家老の子を疎略にはしないはずである。私が幼少の頃事情があつて尾張の囚われとなった時、織田弾正信秀は自分の手元に置かず、尾張勢田の神社の社人に預けた、と云われた。元忠は最も至極の事ですと、その翌日孫九郎を連れて富士の神社のある勝山村行き、小佐野越後と云う社人頭へ預けた。

翌年三月（天正十一年1583）に西の郡の姫君と北條氏直との婚礼が済むと、榊原小平太、鳥居彦右衛門、水野藤十郎の三人が勝山村へ行き、社人達から孫九郎を受け取って相模国三坂の城へ連れて行き北條美濃守に渡した。

この甲斐一国を徳川家が手に入れたのは、黒駒において北條左衛門佐が相模上坂の城から甲州へ浸入した時、鳥居彦右衛門が味方となった甲州衆と協力して（p70）駆けつけ合戦となり敵の首三百余を討取って勝利を得た事と、若神子で氏直と百日余り対陣とした事だけで甲斐の国全体を領地とした事はたいへんな手柄と世間では云われた。

註1 川尻肥前守（秀隆1527 - 1582） 織田家家臣、信忠の補佐役

註2 滝川一益（1525 - 1586） 左近将監、織田四天王の一人

註3 厩橋（前橋）城 群馬県前橋市

- 註4 本多百助（信俊 1535 - 1582） 三河以来の家康家臣
註5 黒駒 山梨県中部笛吹市付近の旧名
註6 若神子城 山梨県北杜市須玉町若神子古城 北條氏直が本陣を置いた
註7 北條氏政（1538 - 1590）後北条第四代当主
註8 北條氏直（1562 - 1591）後北条氏第五代当主
註9 大道寺駿河守（政繁 1533 - 1590） 後北条家臣、 落穂集の作者大道寺友山の先祖筋、
その為か多くの紙面を割いている
註10 北條美濃守氏規（1545 - 1600）北條氏政の異母弟、三崎城主
註11 西の郡の姫君（督姫 1565 - 1615） 家康と側室西郡局の娘

三―三 秀吉と対立、小牧長久手の戦い 四十一歳

天正十二年（1584） 尾張の織田雄卿の家臣である津川玄蕃、岡田長門守、浅井多宮の三人が羽柴秀吉へ心を寄せ、信雄郷を裏切るといふ計画を告げる者があつたので、信雄卿は立腹し此三人を伊勢の長島の城中で誅殺した。それ以後信雄郷と秀吉郷が不仲となり、尾張に軍を向けて織田家を滅ぼすべしとなった。信雄郷は信長の取立て立身出世した諸大名に出軍の依頼をしたが、時の勢いは秀吉にあり誰一人強力する者は居ない。これはもう家康公に援けて貰う外はないと熱心に頼んだ。

家康公も、秀吉は今天下を握る勢いではあるが本とは言えば信長に大恩があり、仮令天下

を奪ったとしても信雄は本来主君である。それを責め滅ぼそうとするのは武士道の姿では無い。私は信長に特別に恩を受けた訳ではないが、日頃親しくしていた間柄なので息子の信雄を見放す事はできない。秀吉が出軍すれば何時でも私の方も出陣するので安心されたいと返事をした。それ以後直ぐに尾張へ出陣する準備を進めた（67）。三河、遠江、駿河、甲斐四力国の軍勢に信州の協力部隊を合わせて総人数は堅く三万五千余となるが、越後の上杉景勝の押へとして信州部隊は残し、又相模の北條氏直は近い親戚であるが親父氏政には油断が出来ぬため、駿河国の所要所には留守部隊を残す。その他三河、遠江、甲斐の三ヶ国の留守居部隊を堅固に備えると結果として残るのは漸く一万五千余の軍勢を率いての出陣となった。

その頃尾張の犬山城は信雄卿が中川勘右衛門に守らせていたが、勘右衛門が同国支城の警備に行った留守に、秀吉卿に味方した池田勝入が三月十三日押寄せて即時に城を乗取、勝入が代りに犬山城へ入った。秀吉方の旗色を鮮明にして所々で放火をしている事を家康公が聞き、信長に厚恩がある勝入の行為は許されない事であり、何としても勝入を討取らねばならぬと小牧から出陣したところ勝入は早々に犬山城へ引き込んだ。

十六日より犬山へ軍勢を進めたところ、羽黒の八幡等に森武蔵守と尾藤甚右衛門が陣取って味方の軍勢に鉄砲を打掛けてきた。そこで奥平九八郎、酒井左衛門、松平紀伊守の三部隊からも鉄砲を打掛る。鎗前よりかなり遠くに武蔵守の部隊から使いの武者らしき一騎が乗出して来たのを味方の鉄砲がこれを打ち落とした。是を見て敵の部隊が少しひるんだ所を

奥平九八郎が千人余りの手勢で直ぐに川を渡り、武蔵守の三千計の部隊と（p72）一戦に及ぶ。武蔵守は敵わず羽黒の内へ入った所を奥平が進み犬山近所迄追詰める。敵方の野呂助左衛門と同助三郎父子は引き返して討死を遂げた。奥平に続いて味方の軍勢が押掛るのを見て犬山城外に布陣していた勝入父子の部隊と福葉伊予守・右京父子の部隊も次々と城内へ引取った。これを見て家康公は御使番を送り深追いせずに早々に部隊を引揚げ、様に指示をしたので先手の面々は追い止めの勝ち鬨を挙げて引揚げた。

その頃秀吉は大阪から出陣しようとしていたが、紀州の根来近辺で家康公と信雄郷に同調する一揆勢が所々に蜂起するので暫く出陣を見合わせていたが、泉州岸和田の城主中村式部少輔が一戦を遂げて勝利したので一揆勢は退散した。これで心配はないと三月廿三日、秀吉は拾二万余の軍勢を率いて大阪を出発し、同廿七日犬山城へ入る。兼て秀吉は小牧山を本陣としてその近辺を諸軍勢の陣場としようと考えていたが、家康公も先達て小牧山を選んだ信雄卿と一緒に布陣したので、秀吉卿の軍勢は尾口楽田近辺に陣を取って小牧山へ向って土居を築き柵を設け、私の命令がない限り誰であらうと抜け駆けは罰せられると緒軍へ堅く言渡した。

その頃家康公は信雄卿と相談して、蟹清水、外山村、宇多津村に取土の城を築せ、中でも岡崎への通路の為として小幡の古城も活用し、本多豊後守と甲州穴山梅雪の配下だった穂坂常陸等に警備させた。（p73）

四月五日池田勝入が犬山城へ来て秀吉へ提案したのは、信雄卿を打滅ぼすのは非常に簡単な事ですが家康の加勢があるので色々面倒になりました。それについて私が思うには家康公も上杉や北條の両家を警戒して甲信駿三ヶ国の城々に軍勢を残しており、三河と遠江両国と旗本部隊だけで出陣していると聞いております。従って留守は手薄の筈ですから、不意に岡崎城を攻めれば、家康公はこの戦場を引揚げて岡崎へ帰る事は間違いないと思います。その後で小牧の陣所を攻めて信雄卿を討取るのは簡単ですと言う。秀吉卿もすっかりこの案に納得し、岡崎攻撃の事は勝入の思うままにせよと云い、森武蔵と堀久太郎兩人を勝入に添え、本隊として三好孫七郎秀次に率いさせ合計五万余の軍勢で岡崎城を攻撃する為に楽田を出発した。勝入は先陣であるので六日の夜十時に出発して翌七日朝二時には篠木柄井へ着陣し、九日に三河に出発する事にした。

この時篠木村の住民がこの様子を家康公へ知らせたので小牧には酒井左衛門尉、松平主殿、石川伯耆守、酒井与四郎等に留守を命じ、家康公は岡部弥次郎、榊原小平太、大須賀五郎左衛門、水野惣兵衛、本多彦次郎、井伊万千代の六部隊合わせて四千二百余を率いて八日の朝十時に小牧山を出発し、行軍には旗は絞り長道具の鎗は横たへて穩便に部隊を進めて（p74）小幡城へ入った。本多豊後守に偵察の侍十人程つけて龍泉寺辺へ行かせて敵勢が南の方へ進むと見たら直ぐに報告するようにと言い含めた。すると豊後守が早速馳帰り敵勢はひっきりなしに南の方へ進んで行くと報告したので小幡城を出発した。

池田勝入は八日の夜二時に篠木を出発して、丹羽勘介の居城を攻めにかかり、伊木清兵衛と片桐藩右衛門の兩人を先鋒として一気に攻める。城主勘介はハ小牧に出陣しており、弟次朗介が七人程で守っており、暫く戦ったが敵わず次郎介を始め従卒も皆討死を遂げた。勝入は幸先が良いと大いに悦び、次は岡崎へと押掛ける。

九日秀次は池田、森、堀の三人を先手とし只岡崎へと何の疑いもなく進軍していた所、徳川方六部隊が秀次旗本部隊先頭の田中久兵衛の隊に襲い掛り散々に切崩した。中でも榊原小平太と丹羽勘助の両部隊は逃げる敵を追詰めて切りかけたので、秀次の旗本部隊は忽ち崩れて大敗軍となり、秀次は長久手の堤へ逃げて漸く引取ったと言う。

この時池田父子、森武蔵、堀久太郎等は旗本部隊が戦いに敗れた事を知らずにいたが、その落ち武者が五騎あるいは三騎と先手の方に逃加るので三人共大に驚いた。各々川に部隊を待機させ堀久太郎が大声で、今日の戦いは旗本が先手である、敵が来たら近く迄引きつけ一斉に鉄砲を打てと命令する。味方の部隊は逃げる敵を追いかけてきたが、堀の部隊が手堅いのを見て少し立ち止ると堀が真先に進み切りかけて来た。その為（ハ）味方の部隊も少々討死はあったが、本多彦次郎康重は命を惜しまず戦い七ヶ所の疵を受けた。堀久太郎は更に味方を痛めつけて進んで来たが、井伊万千代（この時二歳）は部隊を率いて長久手の山へ上り敵を目の下に見おろし鉄砲を烈しく打ち掛けて堀の進撃を阻止した。

森武蔵は自身で鎗を取って、続けや者どもと命令して掛けて来たが万千代隊から打ち掛けた鉄砲が武蔵の眉間に中り落馬し、そこへ本多八蔵が走り寄り首を取った。是で森の部隊は敗走する

池田勝入父子が手勢を指揮して井伊の部隊に打ち掛ろうとした時、岩崎山の峰続きから朝日の輝く様な金の扇子の馬印が揚がった。あれは徳川殿だと言うものもあり、池田の兵は忽ち敗走した。しかし勝入は少しも驚かず床机に腰をかけていた所へ永井伝八郎（この時廿二歳）が勝入を突伏せ首を取った。勝入の嫡子紀伊守を安藤彦兵衛が討って首を得た。

この一戦で池田父子、森武蔵等が討死し秀次も敗軍した事が楽田へ報告されると秀吉は非常に不機嫌で、家康が戦いに勝ち誇っている所を蹴散らしてやろうと広言して、金瓢箪の馬印を挙げ早速駆出した。皆遅れまいと続いたので軍勢は雲霞の様にして龍泉寺へ着陣した。

そこで地元の者に状況を尋ねた所、徳川殿は昼の一戦が終るとそのまま小幡の要害へ引取ったと言う。それでは小幡の城へ押掛けようとしたが福葉伊予守は、もう夜になり味方の軍勢も楽田から駆けつけて疲れていますので今日は（ア）延期しましょうと諫めた。それでは明日にしようと言う事で龍泉寺の河原に野陣を張ってその夜を過ごした。

その夜中家康公は小幡の城を引払い小牧山の陣所へ帰ると、秀吉卿もその翌日楽田へ軍勢を入れた。その後六月十三日に秀吉卿は犬山城を引払い大阪に帰陣したので、家康公も小牧山を引取った。しかし秀吉方は楽田二重堀の土手の内に上方勢を残しているの、小牧山の陣所にも軍勢を残して置いたが双方共に対陣するだけで、互いに足輕を掛け合やす事もなく終った。

その頃家康公は尾張の蟹江城を攻めていた。この理由は滝川左近将監一益は信長が他界した

時関東より駆け付け羽柴筑前守秀吉、柴田修理勝家等と共に信長跡の相続を相談していたが、色々あり羽柴と柴田の両家の仲が悪くなり終に戦いとなった。滝川は柴田勝家と同盟したが勝家が志津ヶ嶽の一戦で秀吉に敗れ越前北の庄城で自殺したので、滝川は力を落して秀吉に降参した。信長より給った北伊勢五郡を秀吉へ献上して命は助かり、漸く五千石計の所を領知していた。

今度は信雄卿へ逆らい秀吉への忠節を尽くそうと色々考え、尾張蟹江の城主前田与一郎と相談して、九鬼右馬丞喜隆と同船して六月十六日の夜蟹江の城へ取籠った。

家康公はその時清須城に居たが、この話を聞くと直ぐに出馬し蟹江の城へ向った。井伊万千代(トコ)大須賀五郎左衛門、榊原小平太等一番に駆け付け海手を堅めたので、城内へ入遅れた敵方は船から味方の軍勢に向け鉄砲を打ち掛けたが、距離があるため何の用にも立たない。その時城兵が二三十人程門を開いて駆け出し味方の勢と戦ったが、叶わずに城内に引き退く時岡部弥二郎の隊の者が滝川一益甥の長兵衛を生捕にして御前に引き出した。家康公はこれを見て、既に生捕にしたのであれば縛って首を切るしかない。そうなる滝川の家名が傷つくので一命を助けて縄を解いて刀や脇差道具も返して城中へ放し入れる様にと指示された。

長兵衛は感涙を流して忝(かたじけな)しと言って城中へ立帰り、伯父の一益に逢って一部始終を報告した。一益はそれを聞いて家康公の仁情に深く感じると、急に心を変えて城中の前田与一郎を殺害して、その首を家康公へ献上した後、自身は長兵衛を連れて城を出て越前国の五分一と言う所へ行ったという。

- 註1 織田信雄 (1558 - 1630) 信長11男、秀吉と和睦後内大臣、居城は長島城の後清洲城
- 註2 犬山城 愛知県犬山市犬山北 織田家の城、江戸時代は尾張藩家老成瀬家の居城
- 註3 羽黒城 犬山市羽黒字城屋敷
- 註4 小牧山城 愛知県小牧市小牧
- 註5 楽田城 愛知県犬山市楽田 犬山の南、小牧の北に位置する
- 註6 小幡城 名古屋市守山区西城²
- 註7 龍泉寺城 名古屋市守山区竜泉寺1 小幡城との距離2.5km程度
- 註8 榊原小平太 (康政1548 - 1606) 徳川四天王の一人、江戸幕府老中、初代館林藩主
- 註9 堀久太郎 (秀政1553 - 1590) 信長側近、長久手戦後越前北ノ庄城主
- 註10 森武蔵守 (長可1558 - 1584) 河内源氏の棟梁、信長、秀吉に仕える、森蘭丸の兄
- 註11 池田勝入 (恒興1536 - 1584) 信長家臣、池田輝政の父
- 註12 三好孫七郎秀次 (1568 - 1595) 秀吉姉の子、三好康長の養子、後の豊臣秀次
- 註13 柴田勝家 (1522 - 1583) 織田家譜代の重臣、秀吉と対立、敗れて自害
- 註14 九鬼嘉隆 (1542 - 1600) 九鬼水軍の棟梁、信長家臣、信雄から秀吉に寝返る
- 註15 蟹江城 愛知県海部郡蟹江町蟹江本町城

三十四 長久手戦余話

長久手の一戦については色々な説が伝えられているが、百四十年も前の事でありその時の正

記録等も無い。これこそ実説と言うものも無いが大筋は上に述べたようなものである。尚この一戦に関して私が聞いた実説等をもう少し詳しく書き加える。虚実は今述べた通りである。

その1 秀吉の挑戦状

長久手の一戦前、秀吉卿は先手の面々が待機して(p78) いる二重堀の要害へ犬山の城より移動して来ると小牧山の見える矢倉へ上り、高山右近を呼出し、明日明後日の間に是非一戦を遂げて勝負を決すべきと思うので家康方へ書状を送り、我等十二万五千の軍勢を段々に備えその後には土居堀を構へており、味方の諸部隊は一足たりとも引き下らぬ覚悟である事を貴殿は承知されたい、と連絡せよとの事である。右近は聞いて、それはやらない方が良いです、とても家康からまともな返事は送って来ないでしょう、そこで急いで無理な一戦をして負ける事になるでしょうと答えた。秀吉卿は、仮令家康がどんな返答をしようと急いで無理な戦いをして負ける理由は無いと言って、増田右衛門尉に命じて前述の文言で書状を調へて竹の先へ結び付け、細川与一郎(その時十八才)を呼出して、此書状を家康の陣から見える小山の上に立てて来る様に言った。

高山右近は与一郎に、そなたが殿様(秀吉)の為を思うなら、書状を持参するのは無用であると言う。与一郎も手を付いて畏まっていたが秀吉卿は再び口を開き、あの小山の辺へは小牧山からの鉄砲が烈しく飛んで来る所だからお前の様な若輩者では無理だな、他の者に持たせようと言う。その時与一郎は高山に向って、貴殿が余計な事を言うからあの様に言われ私の立場がありません、と云って竹を取って担ぎ片手綱で馬に走らせて秀吉が指示した(p79) 小山の

下へ乗り付た。馬より下りて竹を揺れない様にしっかりと突き立てて馬に乗った所へ小牧山より雨が降る様に鉄砲を打掛けてきたが何事もなく与一郎は戻った。

間もなく小牧山より月毛の馬に乗り茜の母衣を掛た武者が一騎来て、例の書状が付いた竹を抜いて持ち帰るのを秀吉が見て、間もなく返事が来るぞと云った。程なく小牧山の上より金の琵琶へらの差物で鹿毛の馬に乗った武者が文書を竹に挟んで持って来て、二重堀の秀吉陣から見える所に立てて帰った。これを秀吉は見、家康が返事をよこした、与一郎あれを取て参れと言うので、与一郎は又乗出して取て帰り秀吉に渡す。しかしそれは家康公の返礼ではなく御鉄砲頭の渡辺半蔵と水野兵部佐の兩人からの返礼だった。

その内容は、御内書拝見しました、明日明後日の間に一戦を遂げる時柵堀を最後の備えとして戦われるので、此方もその準備をせよとのお手紙の趣旨分りました。そうせよと言われても此方には不要です。柵堀を造らなくても皆々関東の者ですから一足も逃げる者はおられません。従って家康へ報告する事でもないので、憚りながら私共より返答します、と云う事だった。

この書面を秀吉は見て、何と憎たらしい奴等だと云えば、高山右近は、だから私が申上げた通り、ろくな返事を家康はしないと思いましたが云う。秀吉卿は不機嫌になり、よしよしやる事があると云って忠興(与一郎)一人を連れて馬で駆け出した(p80)ので近習達も遅れまいと続いた。秀吉は例の小山の上へあがり、尻を捲くつて叩き、家康これをくらへと云って帰る所、唐冠の甲に孔雀の具足羽織は間違いなく秀吉だと知って小牧山より雨の降る様に鉄砲を打掛たが中らない。

秀吉は、天下の將軍に鉄砲はあたぬものだと言して二重堀の要害へ戻った。

その2 二番煎じの柵

楽田の二重堀辺りの上方勢陣所の前に溝を堀り、土手に柵を立て廻しているのを家康公は小牧山より見て信雄卿へ、以前三河の長篠で信長卿と私の両軍で武田勝頼と対陣した時、信長卿の差図で味方の諸軍の前に土手と柵を付けた。勝頼は若気の至りでその柵を取り壊す様に諸軍に命じたので、味方から打掛る鉄砲に中り負傷者、死人続出で終に戦いにも負けた。それを思い出してあの通りに堀や柵を作ったのか、と云う事は秀吉は内心貴殿や私が勝頼と同じ程度と見ているのかと笑った。

その3 秀吉の空振り

長久手で岡崎攻撃軍の諸隊が徳川殿に戦ひ負、先手も旗本ともに大敗軍の様子が二重堀の陣城へ次々報告あったので、秀吉は是を聞いてたいへん立腹し、家康が勝ち誇っている所へ押寄せて蹴散らしてやると出馬したので、我も我もと駆け行き間もなく龍泉寺に着陣した。そこで土地の者に聞いたところ、徳川殿は戦いが終るとその（pg1） まま小幡の要害に引揚げられましたと云う。秀吉卿は馬上で是を聞き思わす手を打って、実に花も実もあり家康かなと云ったと云う。

その4 小牧山陣へ戻る

秀吉軍が龍泉寺へ着陣以後、日暮になり小幡の城で榊原小平太、大須賀五郎左衛門、其外

の武将達が相談して家康公に、龍泉寺付近へ物見を送り秀吉の陣を観察させたところ今日の昼楽田より駆けて来た諸軍共に疲れ果て、布陣の体制もなく至る所に伏せて居ると聞きます。夜中に戦を始めれば大勝利となりましようと言う。家康公は、いやいやと顔を振り、それ以上何も云わなかった。武将達が退出する時、豊後豊後と呼ばれるので本多豊後守が立ち戻ると、其方城の門々を見廻り、誰であろうと門外へ一人も出さない様に番人達に堅く言いつけよとの事である。その後家康公は湯漬を食べて直ぐに出馬し、静かに部隊を揃える様に言われたので、是はきつと敵軍を襲うのだと皆思ったが予想に反し小牧山の陣場へ引揚げた。

その5 森武蔵守の首

森武蔵守は一戦の時に討死したのは確かであるが、その首を取って届けた者がいないので家康公はじめ家中でも皆不思議に思っていた。そこで木屋常貞と云う研屋が上方の者で半年宛浜松にも詰めており、今度の戦いにも御供して小牧の陣場にいた。この者と呼んで其方は上方で森武蔵方へ出入りしなかったかと尋ねたところ、（pg2）確かに武蔵殿宅へ以前は親しく出入りしていましたと云う。それでは森家の道具等も見覚へあるか、と尋ねれば大方は道具の事も見覚えていますと云う。

それではと今度の一戦で確保した敵軍の刀脇差の中で歴々の道具類と思われるものを差出す様お触れが出て、多数集ったものを常貞に見せたところ、その中で刀と脇差二腰を見分けて武蔵殿の道具に間違いありませんと云う。その道具の出所を調べた所、本多八蔵と付け札が

あるので八蔵を呼出してその場の状況を尋ねた。八蔵は、敵陣中で武者が一騎部隊を離れて乗り出し走り回っていたが鉄砲にあたり落馬したので走り寄って首を取りましたと言う。してその首はと問えば八蔵は、首をお旗本へ持参しようと思いましたでしたが、もう首実検は済んだと聞きましたので道端の竹藪に捨てましたと云う。

以上の報告から、武蔵が討死した後に討死した池田父子の首は御覧に入れたのに武蔵の首持参が遅れた理由を八蔵に確認されますか、と伺ったところ、家康公は、森武蔵の討死は確かであり、首を八蔵が捨てたのであればそれで良く詳しく尋ねる必要はないと云われた。上の処置は不問となったが、陣中の上下の評判は良くなかった。中でも八蔵は折角取った首を敵方へ奪ひ返されたと言う噂(うわさ)なども出た。八蔵もそれを伝え聞いて無念に思ったか、後の蟹江城を攻めるとき、無理に敵城近くに進んで鉄砲に中り命を落とした。

その6 蒲生氏郷の甲

秀吉が尾張へ出軍する時、甥の三好孫七郎秀次を先手の大将に任命した。秀次は蒲生飛騨守氏郷方へ、貴殿が所持している鯨尾の甲を貸して下され、今度の晴の出陣に着用したいと言う。氏郷はお安い御用と云って持たせたが、秀次はその甲を着用して散々に戦いに負け長久手の堤へ逃げて見苦しい敗軍をした。帰陣以後この甲を氏郷方へ返したが氏郷は一見して、大切な甲に疵が付いたので、もう私が着用する事は無いと云ったが、その通りに相州小田原陣の時も別の甲を着用したと結解勘助から聞いた。この右鯨尾の甲は現在松平安芸守殿方のあると云う

その7 本多中務の勇猛

長久手の一戦で上方勢が勝利できず敗軍となった事が報告されると、秀吉は一騎駆けの様に龍泉寺へ馳出したので、我も我もと皆続き、尾口楽田の二重堀の要害には人が居なくなつたようだと小牧山の留守部隊に報告があつた。

酒井左衛門尉は留守居の面々へ向つて、秀吉が多勢を率い駆けつけければ、味方は小勢であり、其上今日昼の合戦に骨を折つて疲れているから小幡城での一戦は心配である。二重堀の要害に攻込み留守の番兵を全て討ち殺し陣屋へ火を付けて焼き立てればその煙を見て秀吉は取つて返すに違いないと思うが、各々方どう思われるかと聞いた。

一同皆左衛門(さへもん)尉が云われる通りだと同意したが、石川伯耆守数正はその頃から秀吉へ内通の気持ちがあつたのか全く同意せず、堅く制止したので相談が纏まらなかった。

その時本多中務は、各々方が此処に入つて居られるのでこの陣所は心配ないので、私は小幡城へ行き御供をして帰ると云い、手勢だけを率いて小牧山を馳せ出て程なく上方勢に追付いた。

秀吉の旗本近くに並びややもすれば追い越す状況であり、秀吉の先手の面々より、あれに見えるは家康の家来の本多中務との事です、押しかけて討取りましようかと云えば、秀吉は何を思つたか堅くそれを制止し、成る程家康が大事にするもの当然だと馬上で独り言を言つた。

その後天正十八年奥州陣の時、秀吉は宇都宮の城で中務を呼出し、佐藤忠信が着用と伝えられる甲を自ら中務へ与え、その時長久手の事を挙げて誉めたという

- 註1 母衣 馬上の武者が後ろからの矢を逸らす為、マントの様な布を着した。
註2 与一郎 細川忠興(1563 - 1646)号三斎、細川幽斉の子 嫡男は細川家初代熊本藩主
註3 高山右近(1552 - 1615) 切支丹大名として有名、最後国外追放となりマニラで死去
註4 酒井左衛門尉(忠次 1527 - 1596) 徳川四天王の一人
註5 石川伯耆守(数正 1533 - 1593) 酒井忠次と共に家康の片腕だが、長久手戦後出奔して秀吉に付く
註6 本多中務(忠勝 1548 - 1610) 平八郎、徳川四天王の一人
註7 天正十八年奥州陣 秀吉が天下統一し家康も秀吉政権に入った後、奥州での領土配分を宇都宮城で行った。

三六 秀吉と和睦 四十一―二歳

この年(天正十二、1584)秀吉は家康公と和睦したいと考え、先づ織田信雄卿と和睦をした。その後信雄卿に家康公とも和平を行いたい旨熱心に頼むので、羽柴下総守、土方勘兵衛の兩人を信雄卿の使者として秀吉との和談を勧めた。家康公は、私は秀吉に対しては少も疎意はないが先頃の小牧への出陣は貴殿の御願で止むを得ず戦ったものである、従って貴殿と秀吉が和睦された以上秀吉に対して私の遺恨は毛頭もない、秀吉と(p85) 貴殿がその様にしたいと言う事であれば、今後は従来通りにすると返答あり徳川家と羽柴家の和睦が成立した。

その後又信雄からの使いと言う事で羽柴下総守が浜松城へ来て、秀吉より信雄方へ伝えた事

は、先頃互に和睦の話合いをしたが、表裏なくお互いに親交を深めるため、ご子息のおきい丸殿を秀吉が養子としたいと言っております。ご同意あれば信雄も大変満足するでしょうと言う。家老達を招集して談儀したが、此方にも男子は今の所なく其上世間で息男を上方へ人質に出されたなど云われては当家の名折れではと皆が申し上げた。しかしどの様な考えか信雄卿の提案を受け入れ、其年の十二月に於義丸が十一歳の時上方へ登らせた。児小姓三人を付けその内一人は石川伯耆守の二男勝千代、一人は本多作左衛門息男仙千代、(後伊豆と改なり)である

天正十三年(1585)三月、羽柴秀吉は内大臣に任ぜられ二位に叙せられた。是迄は自ら平の姓を名乗っていたが、内府に任官以後藤原姓にあらためた。

同年三月 家康公は背中に腫物ができて、既に他界したと他国では噂が出るほどの容態である。最初は根太の少し大きなものだったが、前島長七郎、佐原作十郎、河野甚太郎三人の小姓達に大蛤の貝でこの腫物を挟ませた為か、一夜の内に痛みが烈しくなったので(p86)家老達を始め医師衆十人程で相談の上で勝屋長閑が治療したところ、家康公は、唐人流の荒侯薬と立腹して付けた薬を洗い落としてしまった。

そこで本多作左衛門が出てきて、先ず私を手打にしてから後で薬を止めて下さい、今他界されては他人は言うまでもなく親戚の北條殿を始め皆この国をねらうのは間違いありません。家中の面々も幼年の殿の下では力を落して果々しい合戦もできません。そうなれば跡は

潰れる以外にありません。私は六十歳になりますが目は片方切潰され、指も三ツ切られ、脛にも疵を負い、足もびっこになり、世の中の人の片輪と云う片輪を私一人で抱えています。今日迄は殿の御情で家中でも人を多く抱えています。今ご死去されたらこの作左衛門は即時に飢死する以外ありません。もし存命したとしても家康公に仕えた本多作左衛門と云ものは何を楽しみに命を惜しむのか、と諸人に後ろ指を指されては生きる甲斐ありません。

最近迄武田殿家中で甘利殿と言えば諸人の尊敬を得た武士ですが、主人の家が潰れたので今は本多平八郎の配下になり、松下や勾坂党の者達よりも下になっています。信玄の武威が盛んな時は甘利殿などはこの様な事は夢にも思わなかった事です。是は偏に勝頼が無分別な為長篠合戦より八年目に武田家は滅亡し歴々の武士さえ前述の通りです。殿が今長閑の薬を付けないと言われますが、それも大将の無分別と同じ事です。と筋道立てて順々と涙を流しながら説得したので家康公も納得して、この上は其方の云うとおりに治療しようとなった。(p.88) 長閑が出て薬を付け、灸も双六の筒の大きさにして作左衛門自身が三火迄全て進上した。更に内服薬も飲んだところ、その夜半に腫物が破れ膿が大量に出た時作左衛門は声を揚げて嬉し泣きに泣き、本多佐渡も同様だったという。その後腫物は間もなく平癒した。

同年七月秀吉は関白に任じ、この時列国の諸大名の多くが昇進し、於義伊君も三河守少将秀康公となった。

同年八月 家康公自身は出馬しなかったが、軍勢を派遣して信州上田の城主真田安房守昌幸を

攻めた。事の起りは一昨年(1588) 甲州若神子で北條家と対陣して和睦した時の約束で、向後甲斐、信濃の両国は徳川家で支配するので、武田の旧領である西上野添えて上州一国は全体を北條家が支配すると言う事で終った。そこで北條家が切取た信州佐久郡は早速北條家から徳川家へ渡したが、真田安房守は沼田の城を抱へて北條家へ渡さない。そこで北條氏直より催促があったので、早々明渡す様に真田方へ伝えたが安房守の回答は、上州沼田は武田家より給わったものでなく、自分自身の力で切り取ったものであるので本領の上田の城と何も変わらないのに、親戚の北條殿へ明け渡せと云われるのは余りにも情けの無いことですと云って同意しない。その上秀吉卿の威勢が日々に盛になる事を伝え聞き、(p.88) 表向きは徳川家に随って人質を浜松に置きながら、内々では秀吉へ取入っている様子も聞こえて不届と思っていたが、今回思いがけない回答に接し家康公もいよいよ立腹し、真田を攻める評議が決まった。

そこで攻撃の面々は久保七郎右衛門忠世、鳥居彦右衛門元忠、平岩七之助親吉、岡部弥次郎長盛、諏訪小太郎口忠、保科弾正直、入竹左衛門佐勝永、柴田七九郎、三枝平右衛門、其外遠山、知久、下条、大草、武川、芦田などである。彼等は相談して上田城へ向かい八月二日より城を取囲み攻撃した。しかし城将真田はよく守り防ぐので戦鬭毎に寄手の勝利は稀であり、城兵は毎度勝っているという報告が浜松にあったので、更に大須賀五郎左衛門康高、井伊兵部直政松平周防守康重の三人を上田へ派遣し、先の軍勢を引揚げさせて一緒に戻る様に命じた。

三人の者が上田へ着いて命令の趣旨を伝えたが、三人が城地の様子を見たところ城の構えは浅くそれ程堅固とも見えないので何か攻め様もあるのではと三人とも思い、又先発の面々も自分達で

こんな小城一ツ落とせず空しく帰るのは実に残念と思い、何れも今少し様子を見たいと思った。ところ城主安房守方から関白秀吉卿へ援兵を依頼したので、秀吉卿より越後春日山の城主上杉景勝に大軍を動かして上田の城へ加勢する様に命令が出て、近日上杉勢が出発するという情報があり、もしそうなれば問題だと相談の結果何れも上田 (p86) の城下を引払って帰陣した。しかし上田の押へとして大久保忠世は小諸の城に残り、その外信州衆の芦田、保科、下條、諏訪、和久、大草等はそれぞれの持ち城に待機して小諸の大久保忠世と打合わせて真田を押へた。

同年十一月、三河国岡崎の城代石川伯耆守数正が関白秀吉卿へ属する為に、妻女を連れて岡崎城を出て尾張に立退く時、松平源次郎と家老の松平五左衛門近正の所へ家人の天野又左衛門を遣わし、仲間になれば秀吉卿の覚えは私が宜しく取り持つからと言わせたが五左衛門は同意しなかった。そこで信州小笠原右近太夫貞慶から預っていた人質だけを連れて出た。その時五左衛門は後難を恐れ、数正側からの誘い及び自分の返答を書類に認めて一子新次郎に源次郎の家来兩人を付き添わせて浜松へ詳しく報告した。家康公はたいへん感賞し、今度数正の勧めに応じず、昨年は蟹江城攻めで軍功あり浅からぬ忠節と誉め、倅の新次郎に脇差を与えて大給の城へ返した。この理由で五左衛門は後に側近に召出され、関ヶ原戦の前哨戦で伏見城を攻撃された際の留守居四人の内の一人で討死した。

石川伯耆守が尾張へ退去した時、家康公より北條家への使者に書状を持たせた。

先頃飛脚で連絡しましたが、重ねて二科太郎兵衛を遣わします。 去る十三日

石川伯耆守が尾張へ退散し、信州小笠原の人質を連れ去りました。

上方 (秀吉方) と相談の結果としますので油断はできません。

詳細は太郎兵衛の口上に言い含めてあります。 恐々謹言

十一月十六日

家康

北條殿 (p90)

同年十二月信州方面で小笠原右近太夫貞慶が兵を率いて同国高遠の城を攻撃したが、城主保科弾正直は戦い防ぎ勝利を得て敵兵多数を討取った。結果貞慶は敗走したという報告があったので弾正方へ感状並びに御腰物 (包永) を下さった。

この年 (天正十三、1585) 羽柴下総守勝雅が浜松へ来て信雄卿の言葉として、関白秀吉卿は貴殿が上京される事を望み度々催促があるので、大儀ながら上京されると私も嬉しいのですがと云う。家康公これを聞いて、私は貴殿も御承知の様に信長公在世の時に毎度京都へも登った事ですから上方は珍しくもなく、その上上手もないので自分の仕事を差置いて上京する事は考えもしない事ですと云った。下総守はそれを聞いて、秀吉卿が上京を願っているのを御存知ながら上京されないなら、秀吉卿が立腹して三河守秀康殿へどのように当るかわかりません、その事を信雄も氣遣っていますという。

家康公これを聞き、三河守は人質や証人として出した訳ではない、秀吉が養子としたいと云うので信雄卿の取持に任せたので私の子では無い。人の子を養子としてそれに辛く

当っても良いと云うなら、仮令三河守を殺害しようとも秀吉の気持ち次第である。その様な事では益々上京など思いもよらないと云う。下総守もそれ以上は何も云わず退出して尾張へ帰り、それから大阪へ行き報告した。勝雅の予想外に秀吉卿は益々機嫌よく、流石は家康だ、その通りだと言うと程なく秀吉卿の妹朝日御前を家康公へ嫁せようと内談が始った。(p91) この年秀忠公が七才になると青山藤七郎忠成(後号陸奥守)を御伝役に、浅井半兵衛、鴨田権右衛門、瀧六蔵三人を御抱守に任命された。

- 註1 真田安房守(昌幸 1547 - 1611) 信玄家臣、武田家滅亡後自立、豊臣政権で領土安堵
- 註2 大須賀康高(1527 - 1589) 五郎左衛門 家康家臣
- 註3 大久保七郎右衛門(忠世 1532 - 1594) 徳川譜代家臣、北条氏滅亡後小田原城主
- 註4 松平五左衛門(近正 1547 - 1600) 大沼城主、大給(おぎゅう) 松平家家老
- 註5 保科弾正正直(1542 - 1601) 武田家臣、後徳川方、高遠城主
- 註6 小笠原貞慶(1546 - 1595) 織田家から家康、秀吉に付最後は家康、人質は子秀政
- 註7 羽柴下総守(勝雅 1543 - 1610) 本名滝川雄利、織田信雄に属して小牧長久手戦後信雄に秀吉との和睦を勧めたと言いつ。
- 註8 徳川秀忠(1579 - 1632) 徳川家第二代將軍

落穂集第三巻終

落穂集第四巻

四十一 秀吉妹朝日御前との婚儀 四十三歳

天正十四年(1586)正月、秀吉卿は織田信雄と羽柴勝雅を大阪城中へ招いて、前から云っている通り私は家康公が上洛する事を希望しているが未だ実現できていない、此の件で家康公に私の妹を嫁せたい、親戚となり親しくしたいが信雄卿の計らいに任せるとの事である。そこで秀吉卿の頼みなので信雄卿は家臣の下総守勝雅を浜松に派遣してこの趣旨を伝える事にした。

勝雅は大阪を出発すると先ず吉田城に立ち寄り、徳川家家老の酒井左衛門尉忠次と打合せ二人で浜松城へ下った。下総守は外宿して忠次が登城し家康公に報告して老中達と相談の上決定となった。下総守も登城して婚儀の事を調えた後大阪に帰り信雄、勝雅兩人が登城して(p95) 事的首尾を報告したところ、秀吉卿は大変喜び勝雅を感賞した。

同年二月下旬、北條氏直が領分の境目を始めて見分する事になり親父氏政も同道する旨知らせがあったので、家康公より氏政方へ、隣国に有なから未だお目に懸らず疎遠となっています、特に近年は親戚になりましたが氏直にも未対面です、今度良い機会なので、どこかで面談したいものですとの書状を送った。氏政からの返答は、おっしゃる通り、こちらもそう思っ居りました。良い機会ですから木瀬川を隔てお目にかかりたいとの事である。

家康公から再度、木瀬川を隔てての対面ではまるで隣国会盟の儀式と同じです、これでは親戚

の立場もなく他への聞こえもよくないので私が三島へ行つて面会しましょう。旅館であれば接待らしい事も不要ですと書状を送る事にした。

その時調度酒井左衛門尉忠次が浜松に詰めていたが、これを聞いて大変不満を覚え側衆を通し、氏政への面会を申入れたら川を隔てて外でお目に懸ると云う、こんな馬鹿な事を云うならその通りで良いのに、こちらから三島迄出向くのは好くない。これでは徳川が北条家の旗の下になった様に世間では誤解するだろうと云う。側衆も左衛門尉が云う事なのでそれを申上たら家康公は笑つて、私の思い入れだから其の通り書状を送る様にとの事だった。

その後氏政からの返書(p96)があり対面の日時も決まり家康公は前日より沼津の城へ行き翌日三島に入った。氏政・氏直父子とも対面が済み、帰る途中で沼津の松原で家康公は輿を止め、北条家より見送の使者がついている者の名を尋ね連れてくる様にと事である。

御前で山田紀伊守と申上たところ、其方ここまで送り御苦労である、もうここで帰る様にと云えば、紀伊守は、私は道中ご機嫌よく駿府へ御帰城される迄お供する様にと氏政と氏直から云われておりますと云う。家康公が、あれを見よと指差す方を紀伊守が振り返ると沼津の城の大手に人足が大勢集まり門塀を毀している。紀伊守が不審に思っていると、今日氏政、氏直父子へ対面した以上、領分の境目に城は不要である、あの城の本丸にある家屋敷は旅宿の為残すが外曲輪は今日より取毀す。其方は是を土産にして帰りなさいと云い、氏政・氏直へ口上等も述べ其の上拝領物も与えて紀伊守を帰した。

著者註 氏政・氏直との面会の為相州小田原へ家康公が行ったと書いた記録もあるが、それは間違いである。ここに述べた事は小幡勘兵衛殿の咄に基いて記した。

同年四月今度の婚儀打ち合せの為、本多平八郎（中務忠勝）を大阪への使者として派遣した。一般的に和睦以後は秀吉卿とは事ある毎に付届の旗本使者の交流はあったが、今回は特別の使いであるため家老の忠勝が使者となり秀吉卿も是をたいへん喜んだ。

同年五月十四日秀吉卿の妹君朝日御前の輿が浜松へと到着した。先ず榊原康政宅へ立寄り、上下の女中も各々支度を調へ終った後お城へ入輿したが女中従者は百五十余人だった。浅野長政が輿を渡し酒井雅楽頭が是を受け取った。この婚礼が済んだ報告には榊原康政が使者として秀吉卿へ派遣された。

同年七月信州上田の城主真田安房守昌幸を討伐する為出陣となり、家康公が駿府の御城迄馬を進めた時北条氏直からの使者があり、今度の真田追討のため上田へ出発されるに当たり大道寺駿河守と成田下総守の兩人に武蔵国と上野国の軍勢一万を添えて沼田と那久留美の両城を責取ります、その後直ぐに上田攻めに加勢をさせますとあった。これで今度こそ真田も滅亡疑いなしと家康公自身も出馬し、其上親戚の北条殿が大軍で加勢するとなれば真田も存立できないだろうと世間で云われた。

ところが関白秀吉より駿府へ使者が到着し、今度真田を追討するということ出陣される由で

あるが今回は延期して戴きたい。兎も角も貴殿の思いを私に調整させて貰いたいと云う事で上田への進発は中止となり、家康公は八月初に駿府より浜松へ帰城した。
著者註 氏直が加勢すると言う咄は、世上に流布する記録等の中には見当たらないが北条家の事を記した古い書面にもあり、更に天正十四年沼田城攻めで軍勢催促の廻文と伝えられる古い書物を私が若い頃上州で見た覚えがあるので書き記した。

同年の秋、羽柴下総守は秀吉及び信雄両卿の内意によつて大阪を出発して東下した。調度家康公は岡崎城に滞在していたので下総守も岡崎に留り、今度の婚儀も無事に終つたお祝い等述べ、その序に上京の事を申出た。家康公は、前にも言つた通り私は上京する用事とて無いし、婚儀に付いては身分の高下問わず決まりがあり、私が上京すれば秀吉卿は下向するのが慣わしである。そうなるとお互いに無駄であるから現状通りしておくのが好い。所で貴殿は今回に限らず、いつも私の上京を言い出すが何か理由があるかと言われ、下総守はそれ以上何も言わず帰京した。

この状況を報告すると秀吉卿は特別不機嫌の様子でもなく、家康の疑心は未だ解けないと言つた。その夜夜更けに織田信雄卿と羽柴勝雅兩人に急遽登城されたいと連絡があり、兩人早速登城したところ、秀吉卿は伊達染の小袖を着流しにして左の手に脇差を下げて右の手に紅染の細帯を手繰り持ちながら座に付、兩人を側近く招き寄せた。秀吉卿曰く、夜中に諸君を呼出したのは別の事ではない、家康が上京せざるを得ない方法を思い付いたので是を諸君に聞かせたく夜中に拘らず呼びに遣つたと。信雄卿（内府）がそれはどんな思い付きですかと」

聞けば、私の母である大政所を証（p90）人として差出せばまさか家康の疑心も解けない訳がないだろうと言う。織田内府も勝雅も共にそれは良いお考えですと感心して退出した。

今回も使者として羽柴下総守が行くと人々は思ったが特に指示は無かつた。しかし浅野弾正長政方より榊原小平太（康政）迄内々の相談があり、大政所が到着次第家康公も早速上京すると言ふ事に決まつた。井伊直政、本多忠勝、榊原康政等三人の親族の内各一人宛証人として上方へ登らせる事も決まつた。

四十二 秀吉政権の与党となる 四十三歳

天正十四年（1586）十月四日 家康公は権中納言に任せられる。
今月十八日 大政所が岡崎へ到着となるので、家康公は同地で大政所を迎えてその後直ぐに上京する予定で浜松城を出発した。御供には本多忠勝、榊原康政、酒井忠次、鳥居元忠、永井直勝、其外阿部善右衛門、西尾隠岐、牧野讃岐等を召連れた。大政所が岡崎城中に逗留する間の警固は井伊直政と本多作左衛門重次兩人が指名された。そこで作左衛門が御前へ出て、御前は大政所が到着次第上洛するとの事です、それはいけません。理由は上方方面には内裏上臈の年寄の類は幾らでも居ります、秀吉卿が殿様を欺いて何者かを大政所と称して差出す事も有り得ます、御前始め秀吉卿の母君を見知る者は家中に一人も居りません。これは大事な思案のしどころですと言う。家康公もその通りだと思つたか、大政所到着後四―五日過ぎて御台所（朝日御前、実娘）を浜松から岡崎に来させる予定だったが、直ぐに来て

面会 (p100) する様にと連絡した。しかし何かと支度に手間取り十八日の晩方岡崎城へ御台所が到着した。既に到着している大政所は奥の戸を明け御台所が奥より出て来るとそのまま抱き合い落涙したので、それを見た女中達も皆々涙を流した。

翌十九日 家康公も大政所へ始めて面会し、明けて廿日に上京のため岡崎を出発した。

その後本多作左衛門の指図と言うことで柴や薪を取寄せて大政所が居住する屋形の周りに山の様に積み上げた。これを見て驚いた女中が是は何事かと思っている所へ井伊直政が機嫌伺いに来たので、あの柴や薪は何の為のものかと聞いたが直政は、私は全く知りませんと言う。

直政は大政所の機嫌を毎度伺って、時々時節の果物や菓子等届けるので好ましい人として大政所を始め全女中達から兵部殿、兵部殿と人気があった。

一方本田左衛門が来ても何もないので誰が言うともなく、あの柴や薪は今度大阪に登った家康公の身に万一の事があった時、庭に積んだ柴や薪を全部屋形へ持ち寄り大政所を始め全女中達を焼殺するため、これは作左衛門の仕業との事だという噂を下々の女中が聞きつけ遂には年寄女中や大政所の耳にも入った。全く憎らしい男だと全女中達がいへん作左衛門を悪く言った。著者註 大政所が帰京した後、本多作左衛門を是非とも家康公より貰請けて死罪か遠島処分

にしたいと (p101) 秀吉卿へ強く望み、秀吉卿も女性の愚痴事と思っても老女達迄も願う。そこで止むを得ず、家康公に作左衛門は今後上方は連れて来ぬ様にして欲しい、但し国元ではどの様に使われても良いとの事であった。その為家康公も彼の取立てが難しかった。併し子息飛騨守の代になり、越前少将忠直の家老達の争いがあり、幕府による調査の結果

問題の家老達を処分したので残った家老は本多伊豆守一人となった。越前家が家老一人ではと、両御所 (家康、秀忠) の裁断で飛騨守を昇進させて丸岡の城主として、越前家の家老とした。これ以後越前家の両本多と世間で言われた。

註 越前家は家康二男結城秀康を初代として御三家に次ぐ徳川一門の家である、秀康が早世して嫡男忠直が継いだが年若く家老達の争いを処理できず混乱を来たし幕府が介入した。

天正十四年十月廿六日 家康公は大坂へ到着すると大和大納言秀長の宅が旅館と定められており、お世話も秀長へ命じてあった。即日秀吉卿も旅宿を訪問して家康公に、遠路上京戴き久しぶりにお目に懸り非常に嬉しいと挨拶があった。秀吉卿はもう少し咄もしたいがお疲れでしょうから、明日廿七日に待つて居りますと言う事で帰って行った。そこで本多忠勝を使者として御礼に訪問させた。

翌日廿七日 家康公が大坂城へ登城すると秀吉卿が式台迄出迎えて待つて居る。織田信雄卿も出迎えたが秀吉卿の家康公へ対する扱いが全て慇懃なので式台の下手に控えて、中納言殿お先へと云ったが、家康公は控えて、内府のお先へはと言う。そこで譲り合いが果てないので秀吉卿が家康公 (p103) の手を取って、今日は貴殿が私の客であるからと誘い入れた。信雄卿が家康公の後に続くのを見た秀吉卿の家来達はいへん驚いた。

註 この時秀吉は関白、信雄は内大臣 (内府、大納言) で家康は中納言で信雄より格下の位階。さて座敷での饗応が終ると秀吉卿は家康公を案内して天主閣の五重目の座敷へ上る時、秀吉卿

の指示で浅野弾正長政も一緒に上った。家康公は座敷の大矢間から四方の景色を見て大に賞美すると秀吉卿が言うには、私は貴殿も聞いて居られる通り、非常に身分の低い者だったが、今この様に成ったのは偏に貴殿のお蔭と思っています、理由は昔越前国金ヶ崎における戦いの時討死も止むを得ないと覚悟しましたが、貴殿の部隊の活躍で窮地を脱する事ができ、その後段々と武運に恵まれ大功を遂げる事ができました、貴殿の事に付いては愚弟の秀長と少しも替わらない程感謝の気持ちがありますと言う。信雄卿も秀吉卿の此一言を確かに聞き家康公をたいへん敬った。その後今昔の四方山話で数時間が過ぎたが、間もなく退出するという前に家康公は千家宗易に面会し茶道の事など尋ね、日も暮掛ったので暇乞をした。帰館の後、榊原康政を使者としてもてなしのお礼を伝えた。

大坂御逗留の間に秀吉卿より名物の茶器その他種々の贈物があり、浅野長政、大谷刑部の兩人を旅館に詰めて諸事の用を足す様にとの事で、たいへんな接待を受けた。

家康公は正三位に叙せられ、榊原小平太(康政)は従五位下に叙し式部大輔に任ぜられた。是は当家の家来が任官された(TOC)最初と言う。その後家康公は大坂を出発し京都へ登る時も大和・大納言秀長が付添い方々で接待した。今後の上京時の為にと聚楽の城内に屋敷が提供され、家作は好み通りと言う事なので簾堂与右衛門高虎を建築責任者と定めた。又この屋敷の近くに家来の屋敷も割り与えられた。この様な関白秀吉卿の家康公に対する接待を見て、家康公とは尋常な人ではないと其頃の京都・大阪の貴賤上下共に評判となった。著者註 この内容はその時代の事を書記し世に流布した書物とは少々違うが、私が若い頃

浅野因幡守殿の家老に徳永金兵衛と言う人がいた。此人は若い時太郎作と言ひ

浅野弾正長政の児小姓をしており、八十五六歳の頃迄存命して如雲斎と言う名で覚書にしたものをここに書留める。

同年同月十一日 家康公は岡崎へ帰城したが、その前に若君(秀忠公)も浜松から出張しており待っていた。十九日には大政所も上方へ帰るので道中送りに井伊直政が派遣された。大阪へ帰城の後大政所を始め付々の女中迄も口を揃えて直政を誉め良い報告をしたので秀吉卿も満足して、兵部、兵部と大に接待し種々の贈物等も給わった。この時大坂城中において秀吉卿は石川伯耆守数正を同席させた。直政は数正に対し親しく接する様子もなくむしろ敬遠している様子だった。これを見ていた秀吉卿の旗本達は感心して(p104)流石家康公の目がねに叶った人物だけの事はあると直政を誉めたという。

著者註 この咄も金兵衛覚書の通りである。現在世上に流布する書物等にはこの時直政は秀吉卿の家臣達に向って、人面獣心とは此伯耆守の事ですと悪口を言ったという。しかし金兵衛覚書には悪口の事は無いが何れが事実か分らない

註 石川数正は徳川家の家老職だったが一年程前徳川家を去り秀吉に臣従した。

この年十二月、家康公は浜松城から駿府城へ移ったが、既に年も押し詰まっているので家臣達は来春の都合の良い時移る様にとの事だった。

天正十五年（1587）四月、秀吉卿は三河少将秀康公と共に軍勢を率いて九州征伐に出陣し、家康公は本多豊後守広孝を加勢ではなく、陣中付使者の様な立場で派遣した。豊前と筑前の境にある巖石城を島津方の熊井備中と云う者が守っていた。秀吉卿は一気に責落とすべしと一番手に蒲生氏郷と前田利家の部隊、二番手は三河少将秀康公に秀吉卿の旗本勢を添えて、佐々陸奥守成政と水野和泉守忠重の部隊が参加する。この部隊が山を半分程攻上った時、前田と蒲生方からもう敵城を攻落したと連絡があったので、成政は馬を乗返して、落城したので馬を引き入れるのが良いでしょうと言えば秀康卿は、今日は初陣なのに城攻めの戦いに遭わずに残念と落涙した。成政は、敵城がこの様に早く落ちたものも偏に御前の御威光ですと慰めて漸く引戻した。

事の次第を秀吉へ雑談して、流石は徳川殿の御子息ですねと言えば、(p105) 秀吉卿は、成政が言う通り少将は家康の子息ではあるが、私の子として養育したので、武辺気質はこの私に似たのだと言った。

一方本多広孝は先手の部隊に加わり軍功があったので秀吉卿より褒美として金鰐の脇差並に羊の皮の羽織を給わった。

同年八月八日 家康公は権大納言に任せられて正三位に昇進した。

天正十六（1588）年四月十四日豊臣秀吉卿の聚楽亭へ後陽成天皇の行幸を仰いだ。

此時徳川家家中では井伊兵部、大沢兵部、本多中務、酒井兵部太輔、大久保治部、平岩主計、本多豊後、岡部内膳、菅沼大膳、牧野右馬丞の十人が従五位下に叙せられた。他家でも主人

の官位に随って家来も数人任官し、是を世に聚楽諸太夫といった。特に当家では井伊直政、大沢基宿兩人は侍従に任ぜられ、家康公の威光が大きいと世間では専らだった。

註 聚楽亭（第） 秀吉の京都における関白執務館

同年八月北條氏政・氏直父子の方より関白秀吉卿への使者としての北條美濃守が上京する時駿府へ参上して家康公の内意を伺った。そこで榊原康政、成瀬藤八郎兩人を案内のための差添とした。この理由は去る五月に北條氏政と秀吉卿の和義が決裂したが、家康公がその修復に努力して調整を図った事による。

美濃守が大坂へ参上すると秀吉卿は美濃守および榊原、成瀬兩人共に城中へ招き対面した。その時美濃守は、氏直が来年必ず上京致しますので今迄懸案の真田安房守が領有している

上州沼田を先年の家康公との約束通り明渡す様にご指導願いたいと言う。(p106) 秀吉公は、

家康との国境の問題は私の与り知るところではない。その件については再度使者を送り詳しく説明する様にとの事だった。

美濃守は小田原へ帰り氏政と氏直へその趣旨を報告した。そこで北条家では坂部岡江雪に詳細を言い含め上京させる事になったので江雪は大坂へ登った。秀吉卿に呼び出され

江雪は、氏直は来年二月初の頃には必ず上京する事に間違いありませんと云い、沼田の事を詳しく説明した。秀吉卿も納得して、それでは上州沼田領は北条家へ明渡す様にするから、来年中に氏直が必ず上京する様にとの返答があった。江雪は大喜びで小田原へ帰る途中で駿府城へも立ち寄り、大坂で懸案も全て解決した旨を家康公へも報告した。

著者註 一説には江雪はこの時北条家の使者として大坂へ登り逗留の間秀吉卿に氣に入られて、時々登城して氏康（北条家第二代当主 氏政父）以来の見聞した事を雑談した。そこで当人は利発な者と秀吉卿は見定めたので、北条家滅亡後に江雪はを呼出され伽衆の一人に加えられる常に雑談の相手となった。或時秀吉卿は江雪へ、其方の名字坂部岡は余りに長過るので以後は坂部の両字を除き岡にせよと言った。今当家旗本に属する岡の名字の人々はこの江雪の子孫との事である。

天正十七年（1589）五月十九日 若君（秀忠）の母公の西郷の局が逝去したので、同廿四日府中『静岡』龍泉寺に葬り宝台院と号した。

同月廿七日 秀吉卿の妾腹に男子が誕生した。幼名を鶴松君と云い（p107）この祝儀として家康公は大坂へ登ったが、秀吉卿は黄金式百枚及び白銀二千枚を家康公へ贈った。

註 鶴松は秀吉（五三歳）と淀君の子で三才で病死。有名な秀頼はその後に生れる。

同年七月秀吉卿の使者として富田平右衛門と津田四郎右衛門兩人が駿府城へ訪れ、上州沼田の城地の件で北条家へ渡す様真田安房守に伝える為上田へ行きます、この事を家康公の耳にもいれる様にと秀吉卿から言われたので参上しましたと言う。

それでは此方からも使者を差添ますと榊原式部太輔に詳しい口上を伝え、秀吉卿使者兩名と連れ立って上田の城へ向った。三人共に真田に対面して秀吉卿の命令を伝えたところ、今度は安房守は少しも異議なく早速明渡すと言う返答で三使共に帰路についた。

同年九月、家康公は甲州都留郡中窪、根津やその外所々順見したところ、鳥居彦右衛門元忠が白銀十枚、綿百把、漆百桶を献上した。家康公は、其方をこの地に居住させ諸事頼んである事を良く処理して呉れるので甲州は心配ないと満足していると語った。

同年十一月、北条氏直は沼田の城を受取、北条氏邦を沼田城に居住させた。この沼田の近くに那久留美（名胡桃）と云う小さな城があり、以前から真田が所有していた城地である。

沼田城を明渡した後もこの城は其のまま真田安房守は番人を置いていた。ところが氏邦の家老で猪俣能登という非常に軽率な者が居り、彼は上野国全てが北条家の領地となると云う事で今度沼田城も真田方から明渡したのであるから、那久留美一城だけを真田が領有する理由がないと那久留（こが）の城を預っている者へ明渡しを申入れた。名胡桃の城兵達が同意しないので猪俣は怒って軍勢を出して突然押寄せて城を攻め取ってしまった。

敗れた名胡桃の城兵は上田城へ帰り事の次第を報告した。怒った真田は早速大阪へ使者を立て報告すると共に駿府へも使者を送り榊原康政へ言上した。秀吉卿は当然の事で家康公もたいへん立腹した。この為秀吉卿は大谷刑部少輔を通じて家康公へ云った事は、私は北条氏政との関係は決して良くなかったが、貴殿とは近い親戚であり色々仲介されるので是まで大目に見て来た。ところが最近真田安房守の領内那久留美城を攻め取った。又貴殿と先約が有ると云う上州沼田の城地を渡せば氏直が上洛するといので、早速真田方へ指示して沼田を明渡させた。しかし氏直からは上洛する知らせもなく重ね重ねの不屈の限りである。つまるところ是は天皇をも

軽んずる罪も小さくはないので近々北条父子の所行を天皇に報告して征伐を加えなければ、秀吉が関白職にある意味がないと考える。その相談のため大谷を下向させたので、もし別な意見あれば率直に伺いたいとの事である。

家康公が大谷吉隆へ云った事は、秀吉卿が云われる通り北条家と私は関係もあり、心配して今まで何度か異見を述べました。氏直は同意していた様子だが親の氏政は頑迷で聞く耳持たず私の手にも負えないものです。偏に北条家滅亡の時節到来と思う意外ないので此処に及んで(p109)別に替る意見ありません。朝廷の政務を行う関白の処置として私も当然だと思いますので秀吉卿に能々了解した旨伝えられたいと聞き大谷は大坂へ帰った。

この様な動きが小田原へも聞えてきたので、北条家では石巻左馬丞を使者として大坂へ登らせ、今度那久留美の城を責落して城地を押領した件は氏政氏直父子は全く知らない事であり、外様の者の愚かな仕業です。不届千万な事であり早速取調べ責任者の猪俣を処罰する為現在身柄を確保しております。この事を使者によりお知らせしますと言う石巻の口上を聞いて、秀吉卿は益々機嫌を損じ、とやかくの返事もせず石巻と従者二人を虜にする様命じ、その他の随員は全て小田原へ追返した。

四―五 北条家追討、小田原の陣 四十七歳

天正十八年正月三日 若君(秀忠)が初て秀吉卿へ対面のため駿府を発駕して上京するので、

井伊直政、酒井忠世、内藤正成、青山忠成の四人が御供に付けられた。同十三日京都に到着すると秀吉卿からの使者として長束大蔵太輔が参上した。同五日聚楽の城へ登る時は酒井忠世が太刀持ち役、井伊、内藤、青山が側近くに付き添った。秀吉卿は若君への対面に上機嫌で尼奥蔵主を呼出して、若君のお世話をする様に申しつけて大奥へ導いた。既に用意してあった衣服、刀、脇差に全て改めた後、奥蔵主に手を引せ秀吉卿も付添って表へ出た。夫迄全て田舎風に見へたのが上方風に改められ、皆が寄り集まりこんな装いが替わるのか、最初とは見違えるなど(p110)と言い、奥向でも上下褒め称えた。

秀吉卿は直政に向って、今度は遠路の所御息男を上洛させ対面したが、予想以上に成長しておりその上全般におとなしく見え、喜ばしい事であると思える様にとの事だった。又初ての上京でもあり暫く逗留したらよいとも思うが、未だ幼年であり大納言(家康公)もきつと待ち兼ねていると思うので早々帰国させる様にとの事だった。井伊直政を初め四人の面々へ黄金と時服を賜った。

同月十七日に若君が出発の後で去る十四日聚楽亭で浜松御簾中(秀吉卿妹、朝日御前)が逝去したと発表、京都の東福寺に葬る(号南朝院)

同月廿八日秀吉卿より使者が遣わされ、若君上京のお礼と共に小田原に進発の際、領内の城内に旅宿したい旨の要望があった。家康公の返答は、私もその積りでしたので既に道路や橋の掃除等を指示しておりますと伝えた。上方の使者が到着する前にこの事が予想されていたので本多佐渡守、本多作左衛門兩人に指示し、使者が下向してきた時は大方完了していた。

同二月十日、家康公は、小田原へ出発する秀吉卿が駿府を出てから接待する為に用意させた

街道筋の茶店その他を視察し、伊奈熊藏忠正に富士川の船橋の用意をさせた。

同年二月一日、秀吉卿の先陣部隊は京都を出発し、その数は十七万である。織田信雄卿は伊勢、尾張両国の兵一万余を率いて出陣した。家康公の軍勢は甲斐、信濃、駿河、遠江、三河五ヶ国の軍勢二万五千余である。これらを合わせて追討の総数は二十万五(p111)千余となる。更に京都の警備の為に秀吉卿の差図として毛利右馬頭輝元が中国軍勢四万余を率いて残り、前田徳善院も又輝元に添えて京都に留めた。

註 前田徳善院、前田玄以(1539-1602) 信長家臣から秀吉に臣従

同月十九日、秀吉卿は駿府へ着陣した。事前に家康公が浅野弾正へ伝えた事は、今度秀吉卿が下向するに際し街道筋の旅館城々で接待を予定していたが、それは必用ないと貴殿より言われそれに従った。しかし駿府は私の居城ゆえ特別と考え、お供の人々迄も軽い料理を出すことにしていたが、これが了解されて秀吉卿も満足との返答だったので前々から準備を進めていた。ところが駿府到着の日になり突然駿府城に泊まる事を秀吉卿が不安だと言い出したので浅野弾正長政と大谷吉隆と内談して後、長政が秀吉卿の前へ出て暫く閑談していたが、以後様子が変わり駿府の御城へ入った。

翌廿日 家康公も駿府の城へ出た。事前に秀吉卿からも料理を戴く程の者達は陣中ではあるが上下を着用する様にとあつたのでたいへん城中も賑やかだった。

そんな中で本多作左衛門は平服の上に木綿の古びた柿渋の羽織を着て出て来て、家康公が浅野

長政、大谷吉隆、石田三成その他医者達と話しているの見掛け、殿、殿と呼び掛けた。(p112) 家康公が振り返ると作左衛門は、是は何事をなさるのか、国持の人が自分の居城を明けて人に貸すとはとんでもない事です、こんな事をする人は奥方様さへ人に貸しかねないと。家康公はこれを聞き、何を馬鹿な事を言うな、と言えば作左衛門は座を立ちながら、誰が馬鹿かと独り言を言いながら勝手口の方へ引き込んだ。

一座の人々は是を見て不審に思っていると、この様子を見て家康公は笑いながら、あれは本多作左衛門言う私の譜代の者ですが、何ともならぬ我まま者で場所を弁えず自分の言いたい事だけを言う奴です。しかし御払い箱にする訳にも行かぬ由緒もありそのままにして居ります。皆さんにご迷惑をかけますと言え、大谷や長束を始め他の人々も口を揃えて、ご家中に本多作左衛門と言う有名な人がいると上方でも聞いておりました、流石に貴殿は好人を持たれていますと言った。

駿府城内での饗応が終り家康公が座を立った後、大谷刑部少輔は山中山城守を招き、少々ここで相談したい事があるので貴殿は他人が来ぬよう控えていて欲しいと言ひ、浅野長政へ向ひ、先ずは今日卿大納言殿(家康)の饗応も無事に済み喜ばしい事です。ところで昨日昼の休息所で貴殿の強い説得がなければ、この城に寄らず大納言殿饗応も中止になったでしょう。それはどんな結果になったろうか。今度の北条家追討は大切な事であるのに、誰が何の目的で(p113)駿府城に寄らぬ事を進言したのか全く分らない、小田原攻めは重要な事なので是は殿下(秀吉)の為になる事と思つたら、皆に相談の上で進言するのが当然である。今後は誰であろうと一人だけで言上するのは好くないと大谷が苦々しく言えば、列座の面々は了解した旨反応があつたが

石田治部少輔一人は何も言わずしかめ面をしていた。そこでさては昨日駿府城に宿泊の中止を進言したのは石田三成ではないかと皆が推量した。

著者注 この事は山中山城守の覚書とし小田原攻めの事を書いた本の中に見えるので書記した。

二月廿七日秀吉卿は沼津に着陣し、家康公、信雄卿を始めその他の諸将を招き集めて北条父子が立て籠もる小田原城の責口を定めた。家康公の軍勢は中窪を越へ本山中へ進み、山名城の北の山を越えて小田原へ部隊を向ける事になった。さて山名城は近江中納言秀次が今度主将として、中村式部少輔一氏、田中兵部少輔長政、堀尾帶刀吉春、山内対馬守一豊、一柳伊豆守直末等総数五万に及ぶ大軍で同二十九日の朝十時から山名城へ攻めかかる事になった。

註 山名城 静岡県三島市山中新田、

家康公の部隊も中窪口より攻上ったが、北条方は事前にて小田原から人夫を送って道を掘崩し人馬の往来が出来ぬ様にしていた。先手の部隊は一足も進めぬ状況になり、検使として先手に付いていた御使番の面々が旗本へこれを報告に来了。家康公はこれを聞いて、敵地山中(ごにせ)行軍する場合、通常とは違う事もあるのは当然である、目的地へ行かずの留るわけにも行かないので道の有る方へ行けとの事で、前から甲州より採用していた黒鍬の者達数百人を先手部隊に配置した。

註 黒鍬 現代の軍隊で言えば工兵隊にあたる。行軍に必用な道や橋をつくる。その名残で江戸時代、江戸城の営繕を行う集団を黒鍬組といった

先手部隊から山名城の城際へは道らしく見えたが大きな堀切があるので旗本から派遣された黒鍬達が大勢集まり暫時の間に新しい道をつくり、何の支障もなく部隊は向かい側の高台に集合できた。そこからは三島口より進軍してきた秀次の先手である中村を始め其外部隊の旗も見え、当家先手の面々も一時は心配したが無事城攻めの予定に間合い、喜び勇んで中村式部少輔家中の者達と同時に城際へ迫った。中でも戸田左衛門、青山虎之助の両人は特に早く進んだ

中村家中でも藪内匠、川木惣左衛門、成合平左衛門等は戸田、青山と同時に城屏へ乗上り、渡辺勘兵衛はその直ぐ後で乗入れた。勘兵衛が鳥毛の大半月の旗指物を立てているので秀吉卿が控えている場所からもよく見えたためか、山中の城は鳥毛の大指物か乗取ったぞと言い、黄母衣衆にその指物主を尋ねさせた。これが中村式部少輔家来の渡辺勘兵衛と分ったので渡辺が一番乗と言う事になった。此山名城は北条家の松田兵部大夫と云う侍大將が従来城代として守っていたが、今度の籠城に備え氏政・氏直父子の命令で北条左衛門大夫氏勝、間宮豊前守好高、朝倉能登守三人に領内の兵を加えて守りを固めていた。

そこへ家康公の先手の旗が城近くに進み寄るのを見て、秀次の(ごにせ)先手の面々は各々秩序を乱して我先にと一斉に攻懸らざるを得なくなり急に押掛けた。城兵も弓鉄砲で応戦してこれを防ぎ、この時一柳伊豆守も城中から撃った鉄砲に中り討死した。寄手はは雲霞の如くに集り攻入るので城兵も防ぎ疲れて到る所で全て討死したか敗走した。城主松田を始め加勢三人の間宮、朝倉両人は討死し、北条氏勝も手勢は残らず戦死し漸く主従十七八人にて城を退去した。この山名城の戦いの様子を偵察するため山上強右衛門が小田原城から派遣され途中まで来ると

山中城から敗れて来た部隊に遇った。流石の山上も敵兵が進軍して来たと勘違いし、又山の上方勢の旗が数限りなく立並んでおり、これは山中が落城して敵兵は小田原城へ向っていると考え、途中から引返してこの旨を報告したので城中では全員がたいへん狼狽したと云う。

山中の落城後は箱根一山全体が秀吉卿の手に入った事になり、上方勢は思い思いの場所に陣を構え、その日暮方より各陣で篝火を焚いたので、その火が天を染めるのが小田原城中から見えた。その後城中の評義が替わり是迄城外へ張出していた松田尾張守、上田上野、北条陸奥守、成田下総、皆川山城、壬生上総介を始めその他の軍勢も全て陣を引払い、城中へ引き入れて各防禦担当を決めた。それにより上方勢も段々と箱根山を下りて麓に陣を構へ、秀吉卿は湯本の真先寺を本陣と定めた。

ところが北条方の松田尾張守が謀叛を起して秀吉卿へ内通して、今の本陣の場所は低地で好くありません、笠掛山へ(p16)本陣を移されるのが好いでしょう、その山上からは小田原城中を一望に見下す事ができ、総大将の本陣として最もふさわしい場所ですと告げた。

秀吉卿はたいへん喜んで早速陣城の工事を始め陣屋、堀、矢倉等に至る迄全て造り、小田原城中から見える所には白紙を張り回し、その後で木を伐り枝を払わせた。すると紙張の堀、矢倉は白壁の様に見えるので、小田原城中の貴賤は是を見て、秀吉卿は箱根の山中に長期戦の陣を構えて必ず当城を攻抜く積りだと思いいきに憂鬱となった。

四月九日味方の軍勢が小田原城を囲んでいたが、城兵等は弓鉄砲を以て是を防いだ。此時阿部左馬介忠吉が鉄砲に中ったが軽傷で命は別状なかった。

四―六 関東各地北条側諸城の攻略

天正十八年秀吉卿の命令で加賀利家を主将として舎弟弥四郎利政、越後上杉景勝、信州真田、芦田等を合せて四万余の軍勢が碓氷口より西上野へ進軍し、北条家の所持する各城、松枝、厩橋鉢形、松山、川越、瀧山等の諸城を攻落した。

その頃武蔵国江戸の城主は遠山十右衛門重政だったが、自身は小田原城に籠り川村兵衛太夫を城代として三田、牛込、富永等という郷士達に加わり籠城していた。そんな時に武田家浪人の遠山丹波、曾根内匠、真田隠岐守と言う三人の者が連れ立って小田原を訪れ、榊原康政に面会して真田隠岐守が、今度北条家を滅ぼした後にはその領知は全て徳川家へ拝領になると専ら噂されています、その通りになった場合私たち三人を共に知行一万石で採用して戴く様お願いします(ごん) もしお許し願えるなら私共の忠節を示す証として遠山左衛門の居城江戸千代田の城を私共が智恵を働かせてご当家の手に入る様にしますと言う。

榊原式部太輔はその旨を内々家康公へ報告したところ、秀吉卿にも相談されたのか早速この浪人達の提案を受け入れる事になった。そこで曾根、真田、遠山は江戸へ行き、どんな手を使ったのか城は問題なく明渡すと言う事で、江戸城内外の曲輪の数その他城近辺を概略図にして小田原へ持参した。家康公は上機嫌で則江戸城受取りは榊原康政の家来を遣わす様にとの事で付人の家老三人、組付の侍、旗本からは検使二名を添えて曾根、遠山、真田も江戸

へ行き城代川村より千代田城を受取った。

この頃相州玉縄の城主は北条左衛門太夫氏勝だったが、前述氏勝は箱根山中の城の加勢として行き落城に際し従兵は皆討死して、漸く主従十七八騎になり本丸へ入り切腹する覚悟でいたが堀内日向と言う家老が熱心に留めた。止むを得ず城を出て主従みな鬻も切り居城の玉縄へ籠り上方勢を引受て一戦をして後切腹しようと待っていた。しかし攻め手は来ず、その上氏勝も以前より家康公と知合いで、先走らない様にと内談もあつたので玉縄も当家の手に入った。

ここで家康公は秀吉卿と相談の上、武州の内忍、岩槻の両城を責取る事になった。岩槻の城主は太田十郎氏房だが、(p118) 自身は小田原城に籠もり、家来の伊達与兵衛が城代として本丸を守り、妹尾下総、片岡源左衛門の兩人には二の丸を預けて兵士も多数籠もらせていた。秀吉卿は岩槻城の攻撃を浅野弾正長政を主とし木村常陸を加えた。家康公は本多中務忠勝を主に鳥居彦右衛門、平岩主計頭、上村土佐守、三浦監物等を岩付に派遣し、浅野弾正と打合せて城を攻め取る様指示した。

これら寄手の面々が岩槻の城外へ押詰めて城を順見し各々の攻め口を定めた。大手口は浅野弾正、本多中務、上村土佐、三浦監物、搦手口ハ鳥居元忠、平岩親吉、和氣口は木村常陸が担当する事になった。五月十九日諸部隊が一斉に城へ押寄せ、大手は浅野長政と本多中務忠勝両家の部隊が責掛った。この時浅野長政の嫡子左京太夫幸長(十六歳初陣)が大手の橋の上へ進み、采配を振って士卒を指揮する様子を見て、誠に武将の器だと皆が感心した。

城兵も懸命に防いだが本多と浅野部隊が大手の門を攻破り城内へなだれこむと、城将妹尾下総が兵の先頭に立って力戦したが、忠勝嫡子本多平八郎忠政(十六歳初陣)が渡合い終に妹尾を討取った。この時三浦監物は討死をした。搦手口では鳥居、平岩の両隊が死力を尽くし攻めるが、城兵もよく防戦して責入る事ができない。そこで鳥居の兵が本丸の付曲輪へ乗入れた。本丸から防禦が烈しく元忠の従士吉田善兵衛、小田切又三郎、一宮左太夫等を始めとして三十余人討死し負傷者も多数だったが、鳥居、平岩の両部隊(p119)は終に城中へ攻入った。城兵等も全て戦い疲れて本丸へ撤退した。

城将二人の内妹尾は本多忠政に討たれ片岡は重傷を負い、これ以上籠城は難しくなったので、本丸の城代伊達与兵衛は浅野長政方へ使を出して、防備の手段も尽き籠城も不可能となった、城代与兵衛は城外へ出て切腹するので城中の者達は助命願いたいと申出た。長政は忠勝に相談すると、貴殿の思う通りなざる様にと返答あつたので、長政は与兵衛の願通り城中の人々を助命し、城代伊達も今は切腹せずに良い、城下近くの寺院に止宿する様にと申し渡した。その後本多忠勝も立会って城を受取り、兩人より岩槻城を責落した次第の報告書を作成し小田原に送った。家康公、秀吉卿共に感賞があり、秀吉卿より兩人へ使者を下し、のし付作りの脇差を給った。その時長政は忠勝へ、私は忍の城へ行き石田三成と相談をして城を受取る様にと小田原から指示があつたので早速当地へ行きます、この岩槻城は貴殿に引渡すので今後の処理は全て貴殿より小田原へ問合せて指示を受けて下さいと言って忍へ向った。

その頃武州忍の城主は成田下総だったが自身は小田原で籠城するので、忍の城は酒巻鞆負と云う者を城代として士卒を添えて守らせていた。そこへ秀吉卿の命令で石田治部少輔三成が小田原より来て城を見たところ、大きな沼が城を取巻いており攻撃は自由にならない、飯令(p120)どんな大軍で攻めても容易には責落せない様な城である。それでは城外に堤を築いて河水を落し入れて水攻にする以外は在るまいと、宇都宮、下野、水戸の佐竹等の武將と相談していた。そこへ浅野弾正が岩槻より来て三成が水攻の相談中に長政は、今度北条家が所持する城々は残らず落城し、どの城も攻撃に苦勞した事がないのに当城だけ水攻め、兵糧攻めとは小田原の本陣へ聞こえが悪い、願わくば力戦して責落すのが殿下(秀吉)の考えに沿うものと長政が同意しないので水責の支度は中止となった。

その後城の攻め口の担当を決めた時、長政は新田口を請取り攻める支度を調えた。一日

木戸口迄押寄せて戦ったが、城中の防禦も厳しく長政の士卒は中へ攻め入る事ができない。

そこで長政は部隊を引揚げて謀略により城兵等を説得した結果、城代酒巻は城を長政へ渡した。この忍の城攻以来長政と三成の仲が悪くなった。理由は長政が岩槻の城責めでの即功を三成が妬しく思った事が一つ、最初三成が考案した水攻の予定が長政が岩槻からきたため中止となった恨みが二つ、三つは長政が城中へスパイを入れて城兵達を説得し、城代酒巻も長政を頼り降伏して城を明渡した。これで忍城攻めに関しては三成の働きは一つも無い事になった。著者註 三成と長政の仲が悪く成った事は他の書には見当たらないが、徳永金兵衛の覚書にあり特に浅野家の事な(p121)ので事実と思いきき留めた

六月五日の夜中、小田原城中で和田と三浦の従卒百五十余人が自分達の持場に火を付けてその騒ぎに紛れて城から逃亡し夫々の在所へ帰ってしまった。この頃忍の城主成田下総守も秀吉卿へ内通した事が露頭して、民政・氏直は怒って成田の持場の廻りに柵を廻せて山上強右衛門組に警固させた。

六月十四日小田原城中で北条家の大身の家老、松田尾張守憲秀が謀叛を企て、秀吉卿へ内通した。それは長岡越中守忠興、堀左衛門尉秀政、池田三左衛門輝政の三家の軍勢を自分の持場に引入れ、城中所々に火を掛け其火を相図として諸方の寄手が一斉に城へ乗込み本丸へは憲秀自身が案内者として三家の軍勢を引入れると云う手筈を決めたものである。

十五日の夜に入、尾張守は身近かな一家及び親類を呼集めてこの計画を聞かせたが、皆憲秀に従う事で同意した。憲秀の次男左馬之介は氏直が寵愛する児小姓で常に本丸に居住しているが偶々この時病気で父の役所に下り養生していたのでこの一座に列していた。左馬介は父憲秀に向って、北条家には人材が多いのに当家は三老職の一人に備わり、恩禄も厚く蒙り何の不足もないのに謀叛を企て背くべきでないと言った。憲秀は怒って私が既に企を決定したのに偉そうな教訓を云うとは老父に対する不孝の至り、不届であると言ひ聞かした。どうして(p122)同意しないなら殺害か監禁すると云い更に付け加えた事は、先ほど聞かせた事は一旦は考えて私の思いも一応伝えたが、この事が成就したら伊豆、相模の両国を宛がうと秀吉卿が云われるので、これは一家繁栄の基にもなると説明した。

左馬介は、父上のお考えも尤です、しかし私に案があります、明十六日を一日延されてた方が
良い、何故なら明日は「成功しない日」と云い、この様な大計を行うにはたいへん良くない日と伝え
聞きますと云えば、憲秀も機嫌を直して、其方が云うのも尤だと云い十七日の夜半決行と決めて
寄手の方へも連絡した。左馬介は病氣養生として閉じこもり寝ていた様子だが、本丸に置いて
ある具足を取寄せると云って、具足櫃を本丸へ運ばせその中に入り本丸へ入り込んだ。

氏直へ向って、憚りながら誓って親憲秀の命を私へ下されば申し上げたいことが御座います
と左馬介が言えば氏直も誓って様子を尋ねた。左馬介は両眼に涙を浮べて事の次第を白状した
ので、氏直は大へん驚いてこの事を親父氏政と相談の上、松田を本丸へ呼んだ。

北条陸奥守氏輝と坂辺岡江雪両人が、其方が敵方に内応していると云う者があり、貴殿に有得
ない事と思うが一応尋ねる様に云われたので聞きたいと云えば松田はそれを聞いて、私が敵方へ
内応など根も葉も無い事です、この様な事は大抵敵方からの謀略で古今よくある事です、仮令
その様な噂が有ったとしてもこの此尾張を呼び出してお尋ねされるものではないと言う。

氏照は (p123) 元来短気な方なので松田に向かい、今の言葉は無根と言うが、貴殿の謀叛は
他人が云った事ではなく子息左馬介が直接言上したのであるから、どの様な申訳も立たない
はずであると云う。松田が甚だ赤面したところを待機していた鎧武者五六人屏風の蔭より出て
憲秀を組伏せ腰刀をもぎ取り縄を掛けた。其日の晩に急に松田の持場の部隊を入れ換え、
即刻本丸より検使を出して堀裏に飾った旗、馬印等は夜明に取替る様に指示した。又今晩
夜更けに敵勢が近く迫るかも知れない。その時は城門を開いて討って出ずに月夜に敵を

見定めて鉄砲で全て打殺す様にと指示されたので、一晚中待ったが敵は一人も来なかった。

一方堀、池田、長岡三家の軍兵は松田と打合せた場所に部隊を進めたが約束の時刻になっても
城内へ案内する筈の松田新六郎、同弾三郎の兄弟が来ない。時刻が過ぎたからと早速
引揚げるのもどうかと考え暫く様子を見ていたが、明け方も近くなかったので部隊を引揚げた。
何かの間違いが起ったかと不審に思っていると翌朝に堀裏の旗、馬印等を取替えているので、
さては松田の陰謀が露顕したと推量した。

著者註 この咄はその時代の事を記した書物の中にも見へるが、少々違っている。ここに書留た
事は大道寺内蔵介が若い頃遠山長右衛門と云う者に聞いた話である。長右衛門は
この頃小田原城中に居たのでよく覚えていたとの事である

(p124) 六月廿二日井伊兵部少輔直政と松平周防守康親両家の部隊は小田原城の笹曲輪へ
責入った。その訳は笹郭辺の地形は金堀を使うと良いと専門家が云うので、直政と康親の持場
から金堀を入れて漸城内へも掘付かと云う辺りで大雨となった。すると如何した事か城廻りの堀
や櫓が廿間程崩れ剥れた。城中の大騒ぎに紛れて乗り込もうと直政と康親両家の軍兵が烈しい
雨の中で例の崩れた口より攻込み役所に火をつけた。城兵は味方に内通したものがいて敵を
引入れたかと気遣い防戦する者もなく、一方直政、康親の部隊も後に続く味方もないので深々と
攻入る事もできず早々部隊を引揚げた。味方の諸陣では城中から夜襲の部隊を出して直政の
陣屋へ火を付けたと思いたいへんな騒ぎとなった。家康公もどうしたと心配したが松平主殿頭
家忠が一番に馳付けて事の次第を報告したので安心し、早く知らせた事に感賞があった。

落穂集第五巻 (p125)

五十一 小田原落城と徳川家関東入国 四十七歳

その頃伊豆国韮山の城に北条美濃守氏規が立て籠もっているのを、秀吉卿の命令の下で福島左衛門太夫正則、蜂須賀阿波守家政、長岡越中守忠興、蒲生飛騨守氏郷、中川藤兵衛秀政、森右近太夫忠政等に織田信雄卿の軍勢を添えて韮山の城を攻撃していた。家康公からも監使一人を添えて攻撃に参加する様にと秀吉卿が云うので、小笠原丹波守を韮山へ派遣した。しかし城兵の防禦は堅く城も堅固であり、簡単には攻落す事が出来ず諸將の評義をもどかしく思ったのか、小笠原父子は無理に城中へ突っ込み従卒共に残らず討死してしまった。そんな時家康公から秀吉卿へ何か相談があり、その後内藤三右衛門が韮山へ行き、城主の氏規を同道して小田原へ帰ってきた。(p126)その後秀吉卿の命令で攻撃軍は全て引上げて城は内藤三右衛門へ明渡しとなった。

天正十八年(1590)七月五日、小田原城中では氏直は謀叛人松田尾張に死罪を言渡した後家康公の陣所を訪れ、籠城も続けられなくなったので父氏政を始め城中の者達を助命あれば城を明渡すとの事である。家康公は、私は貴殿と親戚であり仲介する事は難いので羽柴下総守を通して秀吉卿の方へ直接申し出る様にと指示があった。そこで氏直は下総守を頼み羽柴勝雅はその趣旨を秀吉卿へ伝えたところ、氏直の願い通りで良いとなった。翌六日、家康公より榊原式部太輔康政、秀吉卿より脇坂中務少輔安治、片桐市正貞盛

の三人が派遣され小田原城を受取った。

この後七日より九日迄の三日間に籠城の人々は城中から退散する様に云われ、数万の人数で混乱が予想されたが、脇坂及び片桐方より警護や検査を行い何事も起こらず九日の昼には全員諸方へ立退いた。その夕方氏政と氏輝兄弟は本丸を退去し医師の田村安栖の居宅に移った。秀吉卿より大谷刑部少輔を通し家康公へ、氏直は助命して氏政と氏輝兩人は切腹させようと思う旨相談があった。家康公はそれを聞き、氏政氏直父子共に死罪かと思っていたのに、氏直が助命されるとは私としては大きな喜びですと返答した。その時秀吉卿の指図で家康公は翌十日芦子川口の内部へ移った。(p127)

同十一日氏政氏輝兄弟は医師安栖の居宅で自殺した。秀吉卿より石川備前守、中村式部、蒔田権之助、佐々淡路守を検使とし、家康公よりは榊原康政が派遣された。氏政氏輝兄弟の首は石田治部少輔に命じて京都へ送り一条戻橋に晒された。

註 北条一門の中でも氏政、氏輝は主戦派で氏直、氏規は和平派だったという。会議が堂々巡りで結論が出ないのを小田原評定と云うが、この時の北条家中の会議から来たと云われる。

同十二日氏直は高野山へ籠もるため小田原を出発した。秀吉卿からの指示は侍階級三十人とその従卒合わせて三百人以上となっている。北条一門では美濃守氏規、左衛門太夫氏勝、従士として松田左馬助、山上強右衛門、内藤左近、諏訪部惣右衛門、依田大膳では氏直側近である。家老分として大道寺孫九郎が総勢の最後から供している。

家康公は芦子川の門櫓から氏直一行の出発を見ておられたが、牧野半右衛門と小坂助六の兩人に命じ用があるとの事で孫九郎を呼寄せ、氏直の道中の事及び高野山中の住居について種々指示された。

同十三日秀吉卿は小田原の城へ入り、今迄の北条家の領地の配分を諸将に割り与えた。

是迄の北条家領地の跡国(伊豆、相模、武蔵、上総等)、及び上洛の時のためと近江の知行九万石、東海道筋では石部、開の地蔵、四日市の夫々宿々で千石宛は従来通、是迄の料地の中では白須賀、中泉、清見寺で各千石宛と嶋田二千石をこれも又上洛時用として家康公へ進上あつた。

その頃織田内府信雄は故有って改易となり下野国那須へ流されたので、其跡の尾張国並び北伊勢五郡は(228) 近江中納言秀次へ与えられた。家康公の旧領の内、三河吉田の城地十五万石は池田三左衛門輝政へ、同国岡崎五万石は田中兵部太輔長政へ、遠近江国浜松の城邑十二万石は堀尾帯刀吉晴へ、同国掛川五万石は山内対馬守一豊へ、同国横須賀の城地は渡辺左衛門へ、駿河国は中村式部一氏へ、甲斐国は加藤遠江守へ、信州小室の城五万石は仙石越前守へ、同国伊奈郡は毛利河内へ、諏訪城地は目根野織部へ、小笠原を石川出雲守(元の名伯耆守)と夫々に与えられた。

註 織田信雄は小田原陣後の領地割りで家康の跡地(三河、遠江、駿河等)へ国替を命ぜら、これを拒否した為秀吉の怒りを買ひ改易となった(通説)。

七月十四日秀吉卿は会津の伊達政宗を退治する為として小田原を出発した。十五日に江戸に至り所々見分した後、下野国宇都宮の城に着陣し、ここに逗留し奥州各地の国分けを行った。同年八月朔日 家康公は小田原を出発して江戸の城へ移った。この時以来今に到るまで俗に関東入国として徳川家の記念すべき日である。この時小田原城代として大久保治部少輔忠隣が任命され、その後直ぐに拝領となった。(後相模守と改める)

五十二 小田原陣と関東入国余話

小田原陣に関連して種々の異説もあるので以下書き記す

その1 秀吉卿の出陣立ち

秀吉卿が沼津へ着陣する頃、家康公は織田信雄卿と共に出迎えに出た。秀吉卿の馬に先立ち到着した餌差、鷹、犬、小鷹等を連れた鷹匠の中から稲田喜蔵と云う者が家康公の前へ走り寄り平伏した。この喜蔵は家康公が初めて大阪へ上った時、秀吉卿から鷹狩りの為の世話役として付けられた者で、以後上洛の度に(p129)世話を行い、家康公も特に目を掛けた者である。彼がそつと家康公に、殿下は間もなく到着されますが、ご覧になると分りますが大変異様な出立で御座いますと云う。

急な事で家康公もどう対処するか思案していた時、武田家の侍曲淵庄左衛門がお供にいたが三尺余りの朱鞘で大鐔の大刀を横に置いているのを見ると側に呼寄せた。庄左衛門が後ろに

畏まって座っていたが、秀吉卿の馬が近くずくと、家康公は自分の刀を外して庄左衛門の大刀と差し替えた。その時秀吉卿が到着したが、其出立の異様な事は金の立烏帽子に緋緞子の袖付具足、羽織に紅金繡の括り袴、更に顔には作り髭、金作りの太刀をはき、金の土俵うつほを、手には唐国羽を持ち小ぶりの佐同馬に乗っている。

秀吉卿は家康公と信雄卿の出迎えを見ると馬から下りたので兩人もそこへ立寄った。秀吉卿は在陣の労をねぎらい、唐国羽で家康公が指す刀の柄を押へて、是は中々よい物をお持ちだと笑いながら云った。以後三人連れで半町程歩行したが、参陣の諸大名達も近寄ってくるので、家康公が馬に乗る様勧めると、それでは陣中礼なし、ご免と云い秀吉卿は馬に乗り諸大名の前では馬上から夫々に言葉を掛けた。

その2. 秀吉卿討死の武士を惜しむ

山中城攻撃で一柳伊豆守が討死した夜、秀吉卿は本陣へ伊豆守の弟市助と供した家老二名を(p130)呼寄せた。秀吉卿は、今朝山中城攻撃で伊豆守が討死した事は残念であるが、その家督は市助が継ぐ様に、この戦いに伊豆守が連れてきた家中の者は主を失い力を落としていると思うが、今日からは其方の家来となるので十分目を掛けてやる様に。また家老兩人は今日からは市助を伊豆守と思いいきを入れて奉公し、家中の者達にもよく言い聞かせる様にとの事である。又市助の方へ向って、其方は聞いていた以上の兎口である、侍の兎口は武辺の相として誉れであり喜ばしい事であると云った。

この市助は後には監物と云ったが男子を多数持ち、その末の一柳助之進と云う者が松平安芸守

光晟の家来として安芸国広島に居り、私（作者）へ直接話した事である。
註 松平光晟（1617-1693）＝浅野光晟、浅野弾正長政の孫

その3. 山中城一番乗りの真実

山中落城の夜、戸田左門が家康公の本陣へ来て榊原式部太輔に面会して云った事は、今日城攻めの時、徳川家の先手の者達は中村式部少輔の部隊の者と同時に城際に迫り、中でも拙者と青山虎之助は一番に城に乗り入れ、中村殿家来の藪内匠云う者と互に言葉もかけ合いました。ところが山中城には中村殿家中の渡辺勘兵衛と云う者が一番に乗込んだ事になっています。決してそれは真実ではありません、中村殿家中でも内匠を始め三・五人程が拙者共と同時に乗り入れましたが、その中に鳥毛の指物を持っていた者はありませんでした。

殿様としては北条家の領知と境界を接する甲斐、駿河を領する以上、今回の戦いでは当然ながら諸軍勢に先がけて先手となる筈であり、山中の城は徳川家が攻落すと家中では皆思っていたのに（13）近江中納言殿が先手と定められ家中一同心外に思っていました。しかし道筋が替り偶然に城攻めの先手の機会を得、しかも中村殿の者と同時に城へも乗り入れました。関白殿より派遣された黄母衣衆も見届けておりますのでこの事を報告致したく存じます。決して私共が骨折をした事を認めて戴く為に云うのではありませんと云った。

榊原康政が家康公にこの件を報告したところ、左門を呼出し家康公は直に、其方が陳べる事は尤である、しかし婿の氏直が所持する城を私の部隊が攻落したとしても手柄になるものでもなく、

其方達が骨を折った事は私が聞いて置けば良い事である、今後も山中城攻めの事はとやかく言わぬ様に青山にも十分説明する様にと云った。以後左門は山中城攻めの事を尋ねる人があっても、混乱の中でありはつきり覚えていないと答えた。

一方青山虎之助は、山中の城では無駄骨を折って、中村殿の家中の渡辺勘兵衛一人の手柄に成った、殿も人が好すぎると云うのを目付衆が聞いて報告すると家康公は笑いながら、青山がそう云うなら言わせて置けとの事で咎めもなかった。しかしその後江戸のお城に移り、家中の皆が新しく知行を拝領した時、戸田左門へは川越領の内で五千石が与えられた。

註 黄母衣衆 豊臣秀吉の馬廻りからなる親衛隊。緒田信長の黒母衣衆に倣った。

その4. 奇怪な風聞

山中の落城後、上方勢は夫々箱根山中に在陣した。その時家康公と信雄卿が示し合わせて小田原北条家に味方をし、両家の（133）軍勢で秀吉卿の本陣を始め諸陣を全て焼討する。それに呼応して氏政氏直父子が小田原の城兵全てを率いて上方勢を攻撃する計画であるとの噂が出た。種々噂が飛び交い各陣営が気を遣っている時、小早川隆景は京都に用事があり遅れて参陣したのを幸に秀吉卿と相談し、隆景案で家康公陣所へ秀吉卿が訪問する事にした。

日時が決まり、その日に秀吉卿は伊達染の小袖に緋緞子の羽織を着、脇差だけで刀は小童の肩に掛させ、織田内府、隆景、法印達、その外の随員も皆脇差だけで手を引き杖を突いて談笑しながら家康公の陣屋へ入り、昼前から夜半まで種々饗応があった。その後織田内府の陣屋も

秀吉卿、家康公、隆景等が同道して訪問した。その後秀吉卿の本陣へ家康公と内府を招いて昼は能興行が催され、夜に入ると酒宴が始まり踊りや小歌等で盛り上がり、明方になって家康公も帰った。それ以後は諸大名の陣々でも会合があり、皆が落着いてくると自然に噂は消えた。その時秀吉卿が作った歌、この小歌は家康公の作等と云い陣中上下の人々が歌い流行らせたので、私も歌いましたと小木曾太兵衛と云う老人が語るのを私は若い頃聞いたので書留める。

人かひ船ハ 沖をこくとも うらるゝうらるゝ 身をしつかにこけ (p133)
我を忍ハ、思案して 高ひま時から すなをまけ 面かと云て出あほふ

その5. 領国経営の真髄

箱根山の陣中で家康公が伊奈熊蔵を呼び用を言いつけた時熊蔵は、去年から領国の米大豆等貯へ置く様ご指示あり支度をしてきました、今回の戦に必用と思ひ沼津の国境まで運んでおきました、ここ山中の穀物の値段は江尻や沼津と同じなので、領分の米や大豆等の運送は止めて全て当地で買う事になりましたが、これは納得が行きませんと申上げた。

家康公はこれを聞くと、それは皆長束大蔵かやった事である。長束はそれほど武功は無いが全般に考えの深い者であり、秀吉に認められ少身から段々と出世して城主に迄なった。

一般に大名が常に儉約を心掛け不要の出費を嫌い質素にするのは、何か異変があつた時に出費を惜しまず自由に遣うためである。しかし常々も儉約を実行し、必用な場合にも遣わないならば、金銀米銭は何の役にも立たず土石にも劣るものである。其方の役目から納得できる筈の事ができないと云うこと自体、私は納得行かぬぞと云われ、熊蔵は大へん困惑した。

この咄は土井大炊頭殿が家老達へ話した事であると大野知石が私に話してくれた。

註 伊奈熊蔵 関東入国後徳川家勸請方の重鎮となり治水に力を揮う。

その6. 江戸の選択

笠掛山の陣城工事が終り秀吉卿が引越したので家康公と信雄卿が同道で訪問した。秀吉卿は、この山の一角から小田原城内がよく見える所があると言ひ、家康公を誘うと信雄卿も同じく立上り (p134) 家康公の側に付いて離れない。それを秀吉卿は気の毒に思ったか、その場所に到着すると小袖の裳を捲り上げながら、昔より馬鹿のつれ小便と云う、さあ大納言殿も此処へと云うので、家康公も秀吉卿の側近くに立て袂を引いて城中の方を見ながら二人で雑談しているので信雄卿はあちこち徘徊している。

その間に秀吉卿は、小田原の城中の家作等も現状通りで明渡したら貴殿は其の俣居城に用いるかと聞く。家康公は、将来は兎も角、先ず当分は小田原に在城する外無いでしょうと答えると秀吉卿は、それは大きな考え違いです、此処は境目として重要な場所だから家来の中から確実な者に預け、貴殿自身は此処より二十里程隔てた江戸と云う所があるが、人の話しや地図からもここは繁昌する良い場所ゆえ、江戸を居城に定めるべきです。今度この小田原陣が終わったら奥州へ出発しますが、その途中閑を見て私も江戸の様子を見てくるので、その上で又相談しようとの事である。

この咄は前述の様に他人が入る余地はない筈だが、その時代から云われており私も若い頃聞いた事があるので此処に書留める。但し虚実は不明である。

その8. 秀吉卿の鎗

ある時家康公は信雄卿を同道して秀吉卿の陣所を訪問した。話しが終り兩人連れ立って退去する時廊下の様な所で、跡から秀吉卿が十文字の(p135)の拔身の鎗をひらめかし家康、家康と呼ぶので、家康公は右手に持った刀を左手へ持替えて別段驚いた様子もなく立止まった。秀吉卿は大笑をしながら鎗の柄を持替えて石突の方を家康公の手先へ差出し、此鎗は私の秘蔵の持鎗だが貴殿へ進ぜようと言う。家康公も深く御礼を云った所へ、秀吉卿近習の侍が鎗の鞘を持って来て納め玄関へ持出して家康公のお供に渡した。

秀吉卿が追掛けて出て来た時、信雄卿は家康公を一人残して足早に退出したのを秀吉卿を始め近習の諸侍達も見ており、信雄卿の行動を軽蔑し悪い評判が立った。その後この鎗は家康公は後々迄秘蔵して持鎗の一つとした由。実、不実は分らぬが古い人の物語として書留める。

その9. 秀康、結城家を継ぐ

秀吉卿の陣所へ下野国の結城左衛門尉晴朝が参陣して対陣を労い、又昨年十二月以来お願していた養子をお取り計らい願いたいとの事である。秀吉卿は、駿河大納言家康公の息男を以前から手元に貰い、羽柴少将秀康と名乗らせている。これ以外には私の親族としては該当者がいない。幸いにこの陣へも連れて来ており陣が終れば奥州へ出発するが下野国宇都宮に在城する時に貴殿に遣わそう。この秀康を養子とする事には家康も異存は無いと思うが、私から

も念の為伝えておくとの事である。晴朝はたいへん喜んで結城へ帰った。

その10. 伊達政宗の遅参

奥州会津黒川の城主伊達政宗は家老片倉小十郎を伴い、一千程の軍勢を率いて甲斐国を経て相州へ(p136)着陣した。軍勢を三四里も後ろに残して、政宗は片倉一人と手廻りだけで箱根の本陣を訪れ、大谷刑部少輔を奏者に頼んで小田原城攻の部隊に加わりたい旨秀吉卿に面会を申し込んだ。しかし秀吉卿は全く受付けず、私は政宗に面会する用事はない、早々追返す様にとの指示だったが、其後如何思ったか本陣へ来るようにとの事で、政宗が出仕すると諸大名が皆列席しているところへ政宗は呼出された。

浅野長政が秀吉卿に代り述べたのは、越後の上杉は味方に加り数城を攻落し、水戸の佐竹は指示あり次第出陣するとして小田原に使者を張付け、既に武蔵国忍城攻撃に際して軍勢を出した事を承知している筈である。此処まで遅参したのは北条家の成行を見ながらの延引であり、とんでもない不届きである、第一会津は芦名の領知であり、昔奥州征伐で戦功があり右大將源頼朝から芦名の先祖へ与えられ数代持伝へた所領である。それを理由もなく切取り押領した罪は重い。従って北条家同様征伐されるべく朝廷の意向であるので、私の考えて許す事はできない、早々帰国して朝敵として我等の征伐を待つようにと申渡した。次に長政が云った事は、以上の通り決まったからには今日中に当所を退去する様にとの事だった。

政宗は、云われた趣旨は深く恐れ入る外はありませんと席を立ち退出した。その顔の表情は只者ではないと諸人感心した。是より直に伊達政宗追討として会津への出陣が(p137)

諸軍へ通達された。

この咄は徳永金兵衛の雑談からである。金兵衛は浅野長政の近習を勤め、小田原陣にも参加した者であるから実説と思われるので書留めた。今その時代の事を記した書物では、政宗は巧く秀吉卿へ面会して押領の芦名領だけを返上して本領米沢は安堵されて会津へ帰ったとなっている。すると金兵衛の咄とは少し違っている。

その11. 関東入国準備

奥州会津へ出陣の通達が出された時、家康公へ秀吉卿が、貴殿は差迫った国替で家中上下共に多忙を極めていると思い奥州陣軍役は免除する。これ迄の領知を早く明渡し貰わぬと後の面々の収納にも影響があるので遅れぬ様にとの事である。家康公も、その積りで進めておりますと返答した。駿府に滞在する勘定方の諸役人及びその外五ヶ国の諸代官手代以下に至る迄早々に江戸に集めて、青山藤藏、伊奈熊藏両人の指揮の下で関東の知行所を全て見分した。古来からの城地は勿論、在所に至る迄見立て家中で従来地方の知行を取っていた面々に残らず知行割を行い漏れがない様にした。特に小身の者程江戸城下近辺で割渡す様に指示があり、諸役人は昼夜を分かつた働き知行割を行い、間もなく(p138)割定めも終った。急な事だったのでこの時の知行割は大数一村切、又は村続きで一まとめに割りつけた。

その12. 北条家のその後

北条氏直は高野山へ入山しても秀吉卿から扶持は与えられ、その他の諸掛かりは大阪にある家康公の屋敷留守居役の佐野肥後守方へ頼めば滞る事もなく何の不足もなかった。

しかし関東から付き添った従卒には乱暴な振舞があったり、時には山の法師を相手に喧嘩口論もあった。最も困った事は山を下りて魚類を持帰って食べるなどで、家康公も是を最初に禁止したが下々の者は治らない。孫九郎も非常に困り、何とか高野山上の居住から開放して欲しい旨を榊原式部太輔に頼んだ。康政も同意して高野山奥山上人と相談した結果、奥山の取扱で手続きが終った。秀吉卿の許可で高野山の住居を免じて天野と云う所へ下り、その翌年には泉州堺の興応寺へ移り、更にその後大坂天満で織田信雄卿が住んでいた屋鋪が提供された。

その上河内の佐山と云う所に一万石の知行が与えられた。その時家康公は聚楽の屋鋪へ孫九郎を呼んで、氏直が早速高野の住居を赦免されて特に天満で大屋敷を与えられた事は喜ばしい事である、しかし一万石の知行は少ないので家計で必要な私の方で見ると、娘も早々に戻したいと思う。この件を浅野弾正を通して尋ねたところ秀吉卿(p139)も、氏直は屋鋪に関しては不足も無いだろうが一万石の知行ではどうかと思う、近々中国方面で領国の心当たりがあるので夫まで待つようにと内意があった。そこで暫く待つように、又この事を氏直だけに内々伝える様にとの事だった。

孫九郎は喜んで帰り氏直へ報告した。今か今かと待っている内に翌年の二月氏直は疱瘡を病み手当を尽くしたが死去してしまい、従者達もすっかり力を落とした。

その頃京都聚楽亭で岡江雪は毎夜秀吉卿の伽衆に加わっていたが、ある夜江雪がいつもと

違って打ちしおれているのを秀吉卿が気付き、江雪は気分でも悪いのかと尋ねると江雪は、いやそうではありませんと答える。秀吉卿は再度、気分も悪くないのに全く浮かぬ顔に見えるが何かあったかと聞けば江雪は謹んで、大坂で氏直が元日より疱瘡を發していましたが治らず死去したと私が氏直に付けておいた家来から報告がありましたと答えた。

秀吉卿も驚いて、夫ならば其方が不機嫌となるのも当然である、家康公の息女もさぞ悲しんでいるだろう、ところで氏直には子供が居ないと云う事は本当かと尋ねた。江雪は、一子も無く氏直限りで北条家は断絶となる事も止むを得ない事ですと申上げた。秀吉卿は、氏直へ今不相応な大屋敷を与えたが私の気持ちからである。人の運命は悪い時には悪い事が重なるものだ。しかし北条の名跡を残す事は不可能ではないのでその点は心配しない様とあった。

その後北条美濃守に忌明次第参上する様にとあったので(二七〇) 美濃守が上京したところ、秀吉卿は、叔父を甥の跡目にとは言付け難いが北条の本家相統を其方へ申付ける。佐山の一万石もその俣領知して良いとの事である。氏規は喜んで大坂へ下り氏直に付随ってきた者達を呼出し、私は思いもよらず本家相統を秀吉卿より命ぜられた。今後は皆私を氏直と思つて勤めて呉れたら満足であると言う。孫九郎を始め皆、氏直公が死去され北条家は断絶と思ひ皆歎いて居りましたが御家が相統との事は私達の本懐です。貴方様は大聖寺殿の御末子ですから御主人と仰ぐ事は当然で、今日から氏直公と同様と思います。しかし今度相統された事が関東へ伝わると葦山時代の御家来が集り来て奉公を願う事は間違いありません。先ずそれ迄私達は勤めますと云った。

予想通り葦山で離散した浪人達が次々とやって来て人が多くなり、氏直の元家来は皆氏規へ断を入れて大坂を立去り上京した。この頃氏直未亡人の西郡姫君も京都に滞在して居り、氏直のお悔やみと関東へ帰る暇乞をする為孫九郎が代表として、又松田左馬之助は兒小姓として氏直の側近だったので常々氏直が語っていた事を姫君様に報告したいと云う事で兩人揃つて参上した。御局を通じて種々尋ねられたが、(二七一) その上で関東より氏直の供をして高野山中を始め其外所々に付添い苦労した者達であるから、何としても流浪はさせたくないと思うので暫く上方に逗留する様にとの事であった。一同申合せて誓願寺の寺中に止宿していたが、その内に姫君様の御願が通り、孫九郎を始め残らず徳川家の旗本に採用された。

註1 孫九郎 大道寺直繁 父は大道寺政繁、北条氏政の家老。直繁の孫が大道寺友山

註2 西郡姫君(Shirahime) 家康と側室西郡局の娘、督姫、北条氏直正室

註3 大聖寺 北条家三代目氏康の事、氏康の嫡子は氏政、氏規は氏政の末弟

五―三 豊臣政権の奥州政策

今度会津へ出陣する事になり、秀吉卿に先立ち小田原から出軍した諸大名は宇都宮近辺へ着陣すると同時に政宗の領分へ間諜を派遣した。しかし辺りは物静で戦や籠城の準備をしている様子は全く無いので、各部隊共に不思議に思っていた。そんな時秀吉卿が宇都宮の城へ到着すると政宗は家老の片倉小十郎只一人を連れ手廻りも少力で宇都宮へ来て、城下を隔てた禅院に止宿していた。

政宗が片倉を使者として大谷刑部少輔方へ云った事は、先日初めて貴殿を知り、何かとお世話戴き有難く思っています。その時も申し上げましたが私共は朝廷を軽んじた事はありませんが、何しろ田舎育ちで万事弁えず、奥州辺りに気風で私に兵を動した事を今更申訳なく後悔しております。従って芦名領は勿論、本領米沢の城地共にこの度差上ますので宜しくご裁許戴き伊達の名跡の継続だけは貴殿の取成しを御願いたく存じます。私が参上すべきですが道中で病気を発しましたので、この件先に片倉より御願いますとの事である。

この口上を云い終ると片倉は封印した箱二つ持出して一つの箱の封を切り、是は芦名(あしな)旧領の地図及び目録帳面ですと大谷へ渡した。又箱一つを持出して、是は政宗が先祖より相伝した米沢領の地図及び目録ですと云い封を切ろうとするのを大谷は押止て、其箱は取り合えず封印の俣で私が預りますと留置いた。そして大谷は政宗へ片倉を通して、申入れは確かに承りました、病気の保養には油断されぬ様にと返答した。

この様に政宗が降参して宇都宮へ参上した事が奥州地方各所へ聞えたので、出羽奥州のありとあらゆる大小の武士は大変驚き、我も我もと宇都宮へ参上するか或は名代を通して挨拶や贈物を送って秀吉卿の機嫌を伺う事になった。秀吉卿は暫く宇都宮の城に逗留しているだけで出羽、奥州の両国を全て手に入れる事になった。

その後大谷方より秀吉卿が面会する旨の連絡があり、家老の片倉を連れて早朝登城する様にとの

事である。翌朝政宗が出仕すると秀吉卿が面会し、その上岡江雪も相伴で政宗と片倉に料理が出され茶も済んだ。その後又秀吉卿の前へ政宗が呼出されると大谷が例の箱を持出して政宗の前に置いた。秀吉卿は、芦名旧領の地は取上げるが、其方が先祖から伝来した本領米沢も今度差上ると云うが私の判断では是を返すので従来通り領知して良い、私も間もなく帰路につくが早々帰城されよと暇もあったので、政宗は例の箱を押戴きお礼を云って帰って行った。その時大谷は片倉に向つて、会津領はいつ頃明け渡し出来ますかと尋ねると片倉は、黒川の居城を始め其外の(こゝろ)城々等も全て明けてあり、城番の侍、足軽等が少々残つて居ますが明日でも差上げますと云う。政宗は勿論この片倉も中々尋常の者ではないとその頃評判となった。

さて秀吉卿は長岡越中守を城中へ招き、会津黒川の城を受取り在番を勤める様にとあつたので、越中守は了承して座を立った。その後浅野長政を呼んで、私は黒川の城地を受取、彼地に在番する様と云われたので先ずはお請した。しかし貴殿も御存知の通り親幽斎が高齢の為、拙者が会津に永く滞在は困るので、早々彼地の守護を選んで頂きたいと云い忠興は会津へ向つた。
註 長岡越中守 Ⅱ 細川越中守忠興

この時秀吉卿は宇都宮より直に帰京すると云う事だったが、急に様子が変わり、京都を出発した時奥州外ノ浜迄赴くと発表したのに白川の関さえ越さずに帰るのは如何なものか、幸い会津黒川の城地見分に行く名目ができ宇都宮を出て会津へ向つた。道すから勢至堂、黒喜峠などの切所を越し、中でも黒川の城近くにある背あふりと云う大切所も越えた。秀吉卿は予定では黒川の城に三四日程逗留する事になっていたが、唯一夜黒川の城に宿泊して翌日には早くも帰路に

つき、八月十五日には白川の城へ帰着した。

今宵は明月であり当城中で月見の会を催すので、諸大名各位も登城する様にと触れがあった。その日の晩方、蒲生飛騨守は今迄伊勢松坂で十二万石の領知だったが、四十二万石に成つて（てふ）会津黒川の城主に任命された。奥州の葛西、大崎三十万石の所を木村伊勢守に給る。その日の暮方に皆が出仕した時氏郷も同じく登城した。書院の柱にもたれて月を詠して居る所へ日頃氏郷と親しい山崎右京が側近く寄つて、今日は大身に出世して会津を拝領した事は大したものですと云えば氏郷は、云われる様に大身には成つたが最早この氏郷は終つて奥州の田舎者と成りましたと答えた。これには山崎を初め一座の面々は氏郷の大器の程を推量したと云う

五―四 宇都宮在陣余話

秀吉卿が宇都宮在陣中の事を以下に追記する。

その1. 三河守秀康公、結城家へ

秀吉卿は養子である三河守秀康公を前からの約束により結城左衛門晴朝の方へ婿養子として出し、婚儀等もが調つたら私も結城へ行くので家康公も出かけられる様にとの事である。家康公も手廻り人数だけで下野国小山に行き、その後結城へ立寄り更に宇都宮も訪問して江戸に帰城した。

その2. 佐藤忠信のかぶと

秀吉卿より本多中務忠勝と面会したい用があるので寄越して欲しいと江戸へ連絡があり、家康公も不審に思ったが、その時忠勝は拝領の城地、上総国小多喜に滞在していたので江戸へ参上は不要であるから直に宇都宮へ行くように指示した。しかし忠勝は一端江戸へ帰つて登城して家康公に面会してから宇都宮へ参上した。

秀吉卿は忠勝を城中へ招き、甲を一領忠勝の前に置いて、この甲は佐藤忠信の甲との事で奥州よりもたらされたものである、今この甲を用いる程の勇士は其方以外に思付かないので、これを其方へ遣すとの事だった。忠勝はこれを頂戴し、私の家の家宝として子孫へ伝へます誠に忝い事ですと云い、（p.45）江戸へ登城して只一人家康公と面会した後、用の為小多喜へ帰った。

註1 佐藤忠信 （1161-1186）源義経の家臣

註2 小多喜 大多喜城 千葉県夷隅郡大多喜町

その3. 会津の守護選び

蒲生氏郷が会津の守護に任命される前、秀吉卿は家康公に、政宗が押領していた会津を返上したので早速守護職を任命しなければならぬ。会津は奥州の押への場所であり、その人柄は大切であるが余り小身では勤まらない。誰を任命するか考え二人程候補がある、私がこれとは思う二名の名前を書付るので、貴殿もこれと思う二人を書いて入れ札とし、その上で相談して決めたいとの事で、家康公の書付を秀吉卿が受け取り、秀吉卿の書付を家康公が請取った。そこで互いに開いたら家康公の書付では一案蒲生氏郷、二に堀左衛門とあり、秀吉卿の書付では一に左衛門、二に飛騨守となっていた。

秀吉卿は、さてさて不思議な事である、一二の順こそ替れ、人の替りはなく相談して良かった、ところで貴殿が一に氏郷とした理由はと尋ねると家康公は、先ず貴方様が左衛門を一番にしたお考えを伺いたいと云えば、秀吉公曰く、奥州者は全体的に強情であるから、左衛門の様な者でないといと治らぬと考え左衛門とした、貴殿が氏郷を一番にした理由はとある。家康公は、おっしゃる通り奥州人は強情ですから、そこへ左衛門の様な者を任命すると俗に云う茶碗と茶碗のぶつかりにもなります。(p.16) 氏郷は武道にも勝れ、文学の素養もあり、その上歌道、茶の湯な等も好み優雅さもあり、強情な奥州者によくつり合うと考えて一番としましたと答えた。

秀吉卿はそれを聞いて、お考えは最もであるので氏郷に決めますとの事だった。其後奥州辺の所々で一揆起ったが、氏郷の処置は全く完璧であり百万石の領知を給わった。その頃家康公が上洛した時秀吉卿は、貴殿の見立てで氏郷を会津に置いたので奥州方面は安心だと云った。註 蒲生飛騨守氏郷 (1556 - 1596) 信長、秀吉に仕え名将の誉れが高いが若くして病死した

その4. 秀吉の信玄・謙信嫌い

ある夜秀吉卿は諸大名、その外法印、伽衆等呼集めての談話の時、佐野天徳寺が信玄と謙信の咄をした。天徳寺は元々は下野国佐野の城主の子であり武道、文才もある。佐野城下天徳寺の住僧だが、何か理由があり佐野を立去り京都黒谷に隠遁の身で過ごしていた。秀吉卿がこれを知り、関東地方の話聞く為に召出して伽衆の中に加へたものである。天徳寺は話上手で常に色々古い咄をするので、秀吉卿のお気に入りだった。

その夜天徳寺は武田信玄、上杉謙信両将の咄をし、信玄は日本で初めて座備と云うものを行い謙信は信州川中島で武田家と一戦した時、車掛りと云う方法で勝利を得たなど両将の事を大に褒めそやした。秀吉卿はこれを知り、やあ天徳寺、其方が云う信玄や謙信の二坊主が生きていれば私が今度帰京する時、一人には長刀を担がせ、一人には(こた)は朱の扇を持たせて馬の先で京入りの供をさせたのに、二坊主共に早死にして仕合せだった。座備が何だ、車掛りが何だたわ言だと云って座を立ち引取った。天徳寺を始め座の面々みな呆れ果てたとの事である。今は俗に佐野天徳寺宗綱と云うが誤りで、天徳寺は佐野修理大夫宗綱と云う者の弟坊主である。

五―五 国替と関東経営

其頃秀吉卿は白川より直に帰路に赴き武蔵の府中に着いた。家康公より、江戸の城へ立寄られる様にとあったが秀吉卿は、江戸については小田原から宇都宮へ行く途中立寄りよく見たし、貴殿も取込中と察するので今回は寄らないと云う。そこで家康公は府中の旅館へ出向くと秀吉卿は、先頃江戸にも立寄り見分したが、以前から聞いていた様に随分と良い場所に見えるので貴殿の居城となれば後々必ず繁昌の地となると云う。

尚又秀吉卿は、ところで私は奥州方面の方針を大体は定め、これから寒くなるので帰京するが、奥州押へのためと任命した蒲生及び木村は俄大名であり軍勢も少なく、この点が気になっている。両人が身上相応の軍勢を持つ迄は貴殿を後楯にする様にと両人に云含めてきたので、其様にお心得願うとの事であった。

小田原で指示された関東における家中の知行割は諸役人達が精を出し段々出来あがってきた。八月初より加増により (p158) 城地又は在所高を拝領した人々もあり、小身の人々も江戸府内より五里七里十里の外内に隔てた場所で知行の高下次第に知行所が与えられた。その知行所の中で名主や頭百姓の家を明させ、或は寺院等を自分の居所と定めて、駿府に滞在している妻子や老弱者を拝領の知行所へ直に引取ったので、大身少身に拘らず居所の無い者は一人も無かった。御城の番等を勤める者達は在所より出府して、在所の遠近により五日から七日も在所すれば良く、一年に幾日かは全員勤める日があるが、一カ年の内に五度から七度江戸に出てくれば良いというきまりだった。

後々は知行所内で屋敷を造り、在所に在合わせの竹木で軽い普請をして陣屋と名付て居住し、遙か後に江戸に居屋敷を拝領して引越すようになった。そのため今でも旗本衆の知行所には陣屋屋敷と云うものがあると云う。その時役目上江戸に居ない訳に行かぬ人々はお城の近くで小さな屋敷を受取、そこに小屋掛けをして独身で住み勤めを果たした。その上北条家時代の城主遠山の家来が居住した家も多数あるので、その家屋敷を支給された人々もあった。以上の様に命令により七月中旬に国替が決まったが、その年と八月末から九月初頃には駿河、遠江、三河、甲斐、信濃五ヶ国に居住した家中の大小 (p159) 武士は残らず現地を引払った。この事が秀吉卿にも聞こえ、家康公の処理を大変感心して浅野長政へ度々語ったと云う事が徳永金兵衛の覚書にも記されている。

その頃徳川家一番の大身は井伊兵部少輔直政で上州箕輪に十二万石給わったが、箕輪の城地

が良くない由で今の高崎へ移った。他には榊原式部太輔康政へ上野国館林で十万石、本多中務太輔忠勝へ上総国小多喜に十万石給わり、この三人の外では相州小田原で大久保七郎右衛門忠世へ四万石、下総国矢作の城地四万石を鳥居衛門元忠へ下された、この二人は徳川家で二番目の大身である。その他の人々には一万石から三万石下さり、その頃一万石以上の人を人数持衆と云った。

今時俗に井伊、本多、榊原と唱へるが、これは関東入国の時十万石以上の大身となった三人の内一人宛替り番で上洛して、京都でも秀吉卿から居屋敷を給り、その屋敷に家作を調べ、在京中は秀吉卿の奉行の面々を始め国取大名達とも付合い、能興行にも招待されたので誰が言うともなく井伊、本多、榊原を徳川家の三人衆等と云った。その頃の座席の序列は井伊、榊原、本多だったが人々の唱え易さで井伊、本多、榊原となった。

この知行所割の時本多作左衛門重次に城地、増高等の考慮があった。しかし小田原在陣中、家康公へ秀吉卿が、御家の本多作左衛門は今度私が下向するに際し道中所々の道橋 (p160) 等で骨折った事を聞いたので、吉田の城中で私に会いに来るよう加藤遠江守を通して再三声を掛けたが我ままを云い出て来ない、随分の我侭者と思われる。一般に一芸で人を取捨するものは軍事の時である。貴殿も今や大身になったのであるから作左衛門の様な偏屈者を用いる事もないでしょうと云われた。つまり先年岡崎の城中で秀吉卿の母儀大政所を焼殺す用意をしていた事に対する遺恨が残っていると思われる、家康公も一旦秀吉卿の憤りを避けようと思われたか、作左衛門には上総國小井戸と云う郷で三千石の地を下され、鷹狩りでもして楽しむ様にと鷹等も

与えて知行所へ蟄居させたが終に知行所にて死去した。
しかし作左衛門の旧功を家康公も思い、子息飛騨守成重には越前の丸岡で五万石の城地を
給わり三河守忠直の家老を勤めた。

その頃江戸の城の明渡しを斡旋した甲州浪人の曾根、遠山、真田にも五千石宛知行を与える
内意があったが、最初の約束は一万石宛であり五千石では請けられないとの事で榊原康政も
色々説得したが納得しなかった。終に徳川家を立去り京都へ上り、石田三成を頼って関東での
事を報告し、身上も望まず秀吉卿の直参に成りたいと申入れた。石田はこれを報告したところ
秀吉卿は、身上の望を捨てて奉公したいというなら採用するが、江戸の(255)井伊、榊原、本多
三人の中から書状を取る様に、それが無くては採用できないとの事である。そのまま浪人して
上方辺にいる間、蒲生氏郷が大きな地を給わった時であり、秀吉卿よりの内意か又石田の世話か
蒲生家で身上が叶い一万石宛で会津へ下った。遠山は間もなく死去し子は無く跡式断絶した。
曾根内匠は氏郷に仕えて会津城普請の総監督を勤めたので、会津の城には甲州流の設計が
今でも残っている。真田は後に徳川家旗本へ採用となり五千石拝領した。

五十六 奥州経営と一揆勃発

秀吉卿が白川の城に逗留の時、蒲生飛騨守と木村伊勢守の兩人が浅野長政、大谷吉隆、石田
三成の三人へ申入れた事は、私達は今度思いも寄らぬ御取立に預り、其上奥州押への場所に
滞在する事になり、名実共に忝い仕合せですが、兩人共に是迄小身でしたので自身の手勢だけ

では御奉公は勤まりません。新たに人を召抱えなければなりません。私達は今度拝領した知行
所を放置して上方へ上る事もできません。従って上方に留守居を命じた家来の才覚で多数の人
を評価して採用して送込むことは数に限りがあります。其上奥州辺の者は当分採用も難しい
様子であり、特に人不足は困っております。御聞になってはいる通り奥州地方は一揆の多い所
ですから、殿下がお帰りになった後万一の事があっても、大体は兩人相談して解決(256)します
が、兩人の力で解決できない事も有り得ます。その様な時戴いた知行高相応の御奉公が困難
な事は人数不足の為ですから、この点各位もご理解戴き其様な時には宜しく願いますとの
事であった。

三人共に当然と考え、その趣旨を報告したところ秀吉卿は、兩人の云う事は尤である、身上相応
の人が不足している事は私も理解している。しかし誰でも片田舎に住む事は好まぬから、相応
の身上を望む事もあるだろうから、兩人は夫を心得ておくべきである。人不足は私も何とかする
から気を遣わずに良い、万一兩人の力で解決できなければ早々江戸へ連絡し、家康公の指示を
受ける様に良く云い聞かせよとの事だった。

天正十八年(1590)九月朔日、秀吉卿は帰京すると直ぐ増田右衛門尉長盛に指示して京、大津
大阪の三ヶ所に高札を立てさせた。其札の近くに蒲生及び木村の家来が出張して奉公を希望
する浪人達を面接して役人達から紹介状を付けて奥州へ送り込んだ。又高札の文言を聞伝へ
諸国、各所から直接会津や大崎へ下った者もあるので、諸方の浪人は招かずとも奥州へ集った
と結解勘助は話していた。この高札の文言は

今度蒲生飛驒守、木村伊勢守は俄に大身に取立てられ
人が不足しているので奉公を希望する浪人は勿論、たとへ旧主
と問題起した者、又は小身で主人へ不満ある者は
右両人方へ来て面談次第で知行を取る事が出来る。もし先主より (p153)
支障を云われても、今度の事は殿下より御裁許が成されるとの事である。

以上

この時中村式部少輔の家来に成合平左衛門と云う者がいた。彼は有名な人物で秀吉卿からも直に感状等を給ったが、何故か式部少輔は知行を僅か二百石与えているだけであり大変不満を持っていた。今度山中城攻めの時も平左衛門は藪内匠と同時に城へも乗入れたが、新参者の渡辺勘兵衛只一人の手柄になった事も不満だった。そこで木村伊勢守が葛西大崎の守護と成ったので中村方を立退き奥州へ下った。伊勢守は日頃から目を掛け彼の器量も知っているので喜んで採用し、其方へは百倍の立身を申付るぞと云い、一隊の頭と二万石の知行高を与えて領内佐沼の城代に任命した。

註1 葛西、大崎 葛西氏、大崎氏の旧地で宮城県北部及び岩手県南部の地域
註2 佐沼城 宮城県登米市

其頃徳川家でも永井善左衛門、三宿勘兵衛の両人が旗本を立去り会津へ下り氏郷に仕へた。氏郷死去の後、藤三郎の代に少身となり野州宇都宮へ所替になると二人は浪人となった。其後上杉景勝に採用されたが関ヶ原の一戦以後上杉家の知行が減少になると又又浪人したが、

両人共に越前中納言秀康卿に採用された。嫡子三河守殿の代に至り永井は旗本へ帰参仕り、三宿は秀頼卿の家人と成り大坂の城へ籠り、五月七日越前の大野主馬組により討死した。

註 藤三郎 蒲生秀行 (1583-1619) 氏郷嫡子、父の病死で会津九二万石から宇都宮十八万石へ

天正十八年 (1590) 十月奥州にて木村伊勢守は大崎に在城し、葛西の城には嫡子弥市右衛門を配置していた。今後は父子が一所に居る方が良いのではないかと相談のため、伊勢守は (p154) 葛西へ目指し、弥市右衛門は大崎目指して出かけ、途中で父子が思いがけず出逢ったのでこの相談をしていた。そこへ急に一揆が起り、葛西と大崎の通路を遮断して多勢で木村父子を取囲んだ。父子共に力を尽くし従者達も命を惜まず防戦し、当座の一揆は追払う事ができたが葛西と大崎の通路が押さえられ、どちらにも帰る事ができなくなった。そこで成合平左衛門に預けて置いた佐沼の城が比較的近いので、父子共に佐沼の城へ駆け込んだところ、一揆勢が押寄せて城を取巻いて烈しく攻めた。

このため氏郷方へ加勢を依頼したところ、氏郷は心得ましたと云い先ずは状況を家康公へ連絡し、国丸中務を通して伊達政宗にも出勢する様に伝えた。政宗も心得ましたとの返答があったので、氏郷三千の軍勢を率いて出陣し政宗の陣所へ立寄り、明早朝に出発して佐沼城へ向いますが、ここから佐沼迄の間に一揆方の城は幾つ有りますかと尋ねると政宗は、佐沼迄の間で一揆方の城は高清水と云う城だけですと返答した。氏郷は、それでは先ず高清水の城を攻落してから佐沼で戦い、一揆の奴等を打果します。私はこの辺の土地は不案内ですから貴殿が先陣なさるのが良いでしょうと云えば政宗は、元より私もその積りですと云う。

氏郷は陣所へ帰り政宗の出陣に続いて出馬する積りで支度をしていたところ、その夜中に政宗が使者を遣して、明朝出勢する約束で予定して居りましたが、昨晩より持病が起り臥せている状態で、明早朝の出発は難(むづか)くなりました、保養し少し良くなれば後から出陣しますと言う。氏郷は、保養が大切です、私は先に陣しますと云ったが、政宗の急病は疑わしいので急に行軍の編成を替えた。 先手だった関忠次郎を後備として政宗への押さえとし、蒲生弥左衛門を先勢として清水城へ向った。 ところが途中の名生の城に籠っていた一揆勢が突然出て氏郷の部隊に掛かって来たので、蒲生源右衛門、同忠右衛門、其外の者達が力戦して一揆勢を追立て、逃げる敵に押ついて城内へ攻入り二三の曲輪を乗取った。 それを聞いて氏郷自身も城際へ乗付て諸勢を指揮して即時に本丸に乘込み、楯籠る一揆勢五百七十余人を討取った。

そこへ政宗が後から出陣して氏郷の部隊の様子を見させたところ、後備の関忠次郎は足軽や長柄鎗等を最後尾に配置して、明らかに政宗を押へる部隊配置である。 さては氏郷も用心して油断が無いと政宗も判断した。 氏郷が名生の城下に野陣を構えていた所へ政宗一万程の軍勢を引連れ、氏郷方へ使者を送って言うには、夜中にも連絡した通り、急な持病が起り今朝の出発は延期し、名生の城攻めに間に合いませんでした。 貴殿の京都への報告を気にしておりますと言う。 氏郷は、病気なら止むを得ない事です、ところで貴殿も御存知無かったのか清水城以外は一揆方の城は無いと昨日言われましたが、この城を始め他にも古河松山、宮沢等という城も一揆方と聞きます。 その内古河松山の一揆勢は退散しましたが、(p156)宮沢には一揆方が立籠っているとの事です、貴殿の部隊で攻落されれば京都への申訳も立ので早々

出陣されるのが良いと返答した。

名生城中の掃除等も終わったので氏郷は城中へ引入、佐沼城へ軍勢を送り木村父子を呼迎へた。更に氏郷は政宗方へ使を送り、宮沢の一揆鎮圧を催促した。

この名生の城が落ちた夜、政宗譜代の侍で須田伯耆と言う者が政宗への不満から、伊達家を立退き蒲生源左衛門を頼って蒲生家への奉公を望んだ。 その時源左衛門に語った事は、先日氏郷が佐沼の件で加勢の相談のため政宗方へ来陣した時暗殺する用意をしていたが、京都への聞えを憚りそれは中止した。 そこで所々の一揆を扇動して氏郷の軍と戦わせ、その後で政宗が軍勢を送り氏郷を討果し、それを一揆の為に討たれたと京都へ報告する計画を立てた。

そこで急病と称して出陣を遅らせたが、氏郷もそれに気付いたと見へ後備を堅固にして、名生の城も素早く乗取ったので政宗の事前の準備と違ってしまったと細かく陳べた。 それで政宗が宮沢の城を責めるの引延ばしている理由も全て明らかとなった。

其頃浅野弾正長政は秀吉卿の命により甲斐、信濃両国の土地見分のため帰路に付いたが駿府で奥州一揆の事を聞き、それより取って帰り江戸に来てお城で家康公の考えを伺うと家康公は長政へ、奥州一揆の情報は氏郷より注進があり、重ての注進次第で私も出陣する積りです、先手は結城 (p157) 三河守秀康に榊原式部太輔を添え、その他諸部隊の準備を進めており今でも氏郷からの情報次第で出陣します。 貴殿は先に下られのが良いとの事で長政と奥州へ下った。

其後秀吉卿よりの使節として石田三成も来て、今度奥州一揆蜂起に付いて殿下も重ての注進次第出馬する積りとの事で、先陣の清須中納言秀次は近く江戸へ着陣します。 御待合せては

どうですかとある。家康公は、私は奥州へ出発する積りで結城三河守と榊原等義は先立ち出陣したので秀次の着陣を待つまでもありません、貴殿はこれからどうしますがと尋ねれば三成は、私は今から水戸へ行き、佐竹義宣へ出馬する様に伝え、直に奥州へ下りますと云う。

その直後出陣通達を出し、天正十九年正月三日に家康公は出馬し岩槻の城に在陣して奥州からの注進を待った。政宗は家康公が下向すると聞くと、自身の難を通れる為に浅野長政の旅陣を訪れて身の誤りが無い事を陳べるので弾正は、貴殿が云う通り野心が無いというなら家臣の片倉に家老の内今一人を添えて氏郷方へ証人として差し出すのが良いと指図した。政宗は指示に従い、片倉含め都合家老二名を名生の城へ送って来たので氏郷は彼等を携へて黒川の城へ帰陣した。これで奥州方面の一揆は治まったので長政は二本松から江戸へ使者を送り詳細報告して出陣不要の旨を陳べた。家康公はこれを岩槻の城で聞き、先手の人々へ(158) 早々帰陣する様に通達し、正月十三日江戸へ帰陣した。翌十四日に尾州中納言秀次が奥州へ向うとして武蔵の府中へ着陣した。家康公は府中を訪れ、私も岩槻より帰ったので今から帰陣されてはどうかと相談した。

註 一揆勢 葛西大崎は元来葛西氏、大崎氏の領知だが伊達政宗の影響下にあった。両氏共小田原不参を理由に改易となり、跡を木村伊勢守が拝領した。そのため葛西大崎の浪人となった旧家臣達が一揆勢となった。

天正十九年(1591) 閏正月三日 家康公は関東御入国以後初ての上洛のため、江戸を出発して同十五日京都に到着した。蒲生氏郷も会津拝領の御礼として上京していたので、在京中毎度

参会していた。

この参会の時、家康公が氏郷へ会津城普請について尋ねると氏郷は、芦名時代より会津の城は全て芝、土居でしたが今度残らず石垣に築直します。不肖の私を奥州の押へに任命頂き過分の御恩に預り、せめて居城でも見苦しくない様にしたいと思い、諸国の城の建築を見ました。そこで毛利輝元の居城である芸州広島城の城が私の気に入りましたので、会津城の本丸、外郭共に広島城の城に似せる様に設計しようと思います。

家康公は、全体に居城の大小は城主の身上相応の心得も必要です。本丸を始め二三迄の曲輪は矢倉等に十分念を入れて丈夫にする事が肝要です。その他の曲輪も一二の門扉の形等は急な普請では出来ないの事前に普請をして(159) 置かねばなりません。一般に構へや堀等は心がけさえして置けば急でも出来るので、普段は土居か石垣だけでも良いでしょう。長堀を掛けて置くのは役に立たないものですから、芸州広島城の様に外郭まで堀を掛け回す必要は無いでしょう。松永弾正が工夫した大和国志貴の城にある多門矢倉と云うものを二三の曲輪内に造ると大変便利なものと語った。

氏郷は京都より帰ると前から考えていた惣郭の城をやめて、三の丸には堀を掛け、所々に多門櫓を立てようとしていたが、氏郷が死去してしまったので城普請は中止となった。今でも会津城で三の丸には堀も矢倉も無い。蒲生家にいた結解勘助が浅野因幡守殿へ物語である。

